バカとテストと召喚獣と・・・、

下之宮 海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとテストと召喚獣と・・・、

【Ｎコード】
Ｎ４２４４Ｘ

【作者名】
下之宮　海

【あらすじ】
自分の名前しか記憶がない青年、天野快（てんのかい）は文月学園に転校することになっていた。床に落ちていた謎の物体を拾った直後に灰色のオーロラが降りてきて・・・。「行くぜ・・・サモン！変身！」人気ライトノベル「バカとテストと召喚獣」と「仮面ライダーディケイド」のクロスオーバー作品です！（時々ガンダムも・・・）

俺と記憶と破壊者と・・・、

一人の青年「天野快」（てんのかい）、彼は一切の記憶がない。辛うじて自分の名前を憶えている程度である。気が付けば自分の家と思われるどこにでもありそうな二階建ての家のリビングで倒れていた。自分のことを少しでも思い出そうとしていると。テーブルの上に鞄を見つけた。そのなかには「文月学園生徒手帳」と転入届、そして教科書一式が入っていた。さらにその生徒手帳の間に謎の「2―F」と書かれた紙が四つ折りにされて挟まっていた。どうやらこの鞄は文月学園の指定鞄のようだ。　「どうやら俺は、〈文月学園〉とやらに転校することになっている。」と理解した快はとりあえず、外に出てみようと玄関に向かった。リビングから出るために扉に手をかけたその時、ガタン！！という大きな音が響き渡った。

「！？」

驚いて振り向くと、床の上に妙に埃をかぶったベルトのようなものが転がっていた。快は吸い寄せられるようにそれを拾おうと手にかけた。すると、天井に突然、灰色のオーロラのようなものが広がり、徐々に快に迫り、そして快を飲み込んだ。目を開けるとそこには宇宙が広がっていた。しかし、宇宙ではないことがすぐに分かった。快の周りに広がる宇宙には、地球と、その周りに等間隔に点在する、いくつもの地球があったのだ。

「どこだ？ここは？」

おもわず口にしたその言葉に、返事が返ってきた。

「かつて、大きな戦乱がありました。」

振り返ると、そこには２０歳前半のような青年が立っていた。驚く快をよそに彼は話し続ける。

「自分たちの世界の破壊を防ぐため、一人の破壊者に立ち向かった大勢の戦士たちは、仲間とともに、その破壊者と戦いました。」

気が付けば、眼下に広がる宇宙は荒野に姿を変えていた。飛び交う光線、鳴り止まぬ爆音、立ち上る黒煙。その中心にある存在に、快は驚いた。快の手にあるリビングで拾った物が、光を放っていたのだ。それは、あたたかくもあり、鋭くもあった。

「しかし。」

青年がつぶやく。赤と黒の龍がその存在に迫る。だが放たれた光線によって、二体の龍は地面に叩き付けられる。

「その存在は、あまりにも強すぎた。」

空中に現れた線路を走る赤い列車が先頭の車両を粉微塵に破壊され、墜落する。また風景が変わった。そこには顔をそむけたくなるほど大量の人が倒れていた。倒れている人の腰には、ベルトのようなものが巻かれていた。その中央に立つ存在は何のダメージもなさそうだった。

「ディケイド。」

その言葉に快は何かを感じた。青年は語る。

「世界を破壊する存在にして、世界を創造する者。彼はそう呼ばれていました。」

「ディケイド・・・。」快はそうつぶやき、ディケイドと呼ばれる存在を見た。そして

「！」

あることに気が付いた。快の手にあるものとディケイドの腰に巻かれているものが、全く同じであったのだ。「ディケイドライバー」という言葉が頭に直接響いた。すると、突然赤い体をした何者かが、

「待て・・・。」

と言い立ち上がった。「クウガ」というフレーズが頭に響いた。そして立ち上がった者の名前ということを理解した。いや、思い出したのだ。

「ハアァァァ・・・」

力を貯めるクウガ、すると周りの砂利、そして倒れている人の体が宙に浮き、クウガの体が赤色から、黒一色になった。ディケイドと

黒いクウガが互いに拳に力を籠め、激突する。そこで風景が宇宙に戻った。「言い忘れました。僕は紅渡(くれないわたる)といいます。」
青年、紅渡が自己紹介をした。　そして
「よろしく、天野快。」
といった。快には理解できなかった。
（なぜ、こいつは俺の名前を・・・）
と思っていると、さらに衝撃的なことを言った。
「いえ・・・、ディケイド。」
「！」
快に衝撃が走った。
（こいつ、何を言ってるんだ?）
「あなたはあの後、空間の亀裂に放り込まれ、行方知れずになりました。捜すのには苦労しましたよ。」渡は苦笑しながら言う。しかし快にはそんなことは耳に入らなかった。
（こいつの言っていることが本当なら、あれは俺が・・・。）半ば混乱しながら考える。そして意を決して問う。
「なぜ、俺があんなことを・・・?」
言うと渡は
「創造は破壊からしか生まれません。あなたが進んだ道には常に破壊と創造があった。」
諭すように言う。「
ディケイド、あなたにここで歩みを止められるわけにはいきません。あなたにはまだやってもらうことが沢山あります。
」突如宇宙が砕けた。驚く快をよそに、渡は続ける。
「ディケイド、そろそろあなたを先ほどいた世界に戻します。記憶がないようなら、その世界で集めてください。」
渡はそう言うと、快から離れていった。
「待ってくれ!俺はまだ聞きたいことが・・・!」
しかし、渡は消えてしまった。一気に視界が暗転する。快の意識は深く沈んでいった・・・。

俺と記憶と破壊者と・・・、（後書き）

読んでいただいて本当にありがとうございます。自分なりの新設定や新キャラもつけていくので、応援よろしくお願いします！

俺と初日と紙の謎と・・・、

気が付けば、快は電車の中にいた。
「夢か・・・。まあ、それならそれでいいんだけどな。」
ほっとしたのも束の間、快は抱えている鞄に何やら固い感触があるのを感じた。ガバッ！見てみると鞄の中には教科書、筆箱のほかにリビングで拾ったもの・・・ディケイドライバーが入っていた。
（夢じゃなかったぁぁぁぁ！）
シャウトしそうになるのを必死にこらえる。傍から見ればそうでもないが、快は今ものすごい勢いで冷や汗が噴出している。なぜ入っていたかはわからないが、持ってきたからにはどうにもできない。
（と・・・とりあえず学校でばれねえようにしないと・・・！）
転校早々物を没収されるなんて恥は誰もかきたくないものである。とりあえず上に教科書をのせて隠すことにした。
（しっかし・・・、これはなんなんだ？）
手に持っているのは「２－Ｆ」とかかれた紙である。（誰かに聞くにも、文月学園の関係者なんているのか？）キョロキョロと辺りを見回す。すると、
（おっ）
同じ鞄を持っている女の子を見つけた。
（女の子かぁ・・・。ん？）
ふと見ると、その女の子の顔がわずかに赤らんでいる。そして首を横に振っている。その後ろには、中年男性がいた。何やら挙動不審だ。
（ははあ、なるほど。）
気づくが早いか、快はズンズンと他の乗客を押しのけ、女の子の前まで行くと、その手をつかみ
「おはよう！元気？」
と声をかけた。女の子が

「へっ?え?あっ」
と言ってる間に、快はその手を引いて、もと来たところへ戻った。
そして隣の両に移った。そこは比較的人が少なく、二人なら余裕を持って座ることができた。
「ふう」
と一息つき、
「大丈夫だった?」
と声をかけた。その女の子は、
「あっ、はい。助かりました。ありがとうございますっ!」
と心底嬉しそうに返事をした。
「うんうん。」
とうなずいていると、
「あの・・・どうしてその・・・ち・・・痴漢されてるってわかったんですか?」
と聞いてきた。
「ああ、あの君の挙動と、あの変態エロおやじの挙動を見れば１２０%痴漢だと分かる。」
と答えると
「へ・・・変態エロ・・・」
と顔を赤らめてしまった。そして快は、
「あ、そうそう。教えてほしいんだけどさ、これって何?」
問題の「2―F」と書かれた紙を見せた。すると女の子はきょとんとして、こういった
「あの・・・、これクラスだと思います。」
と言った。
「クラス?」
聞き返すと、
「はい。2年F組のことだと思います。私と同じクラスですね。」
と言った。
「へえ、どんなクラスなの?」聞いてみたらこんな答えが返ってき

た。

「ええっと・・・その・・・要するにですね・・・2年生の中で、一番お勉強が苦手な・・・その・・・おバカさんがたくさんいますっ！」

・・・・・・・・・。

「マジで？」

俺と初日と紙の謎と・・・、（後書き）

快、ついに登校です！学校に向かう電車の中でクラスメイトを痴漢から助けた快。この助けた女の子、話し方でわかると思いますが、誰なのかは次回発表します！

俺とクラスと担任と・・・、

ところ変わって文月学園の最寄駅を少し出たところ。
快は電車の中で助けた女の子と歩いていた。電車を降りてから、お互いが自己紹介をしていないことに気づき、
「あ、忘れてた。俺は天野、天野快だ。」
「天野君ですか。私は姫路瑞希と言います。よろしくお願いしますね。」
ニコッと微笑みながら自己紹介され、快は姫路に好感が持てた。談話しながら歩いていると、姫路が突然こんなことを聞いてきた。
「そう言えば天野君って、転校生なんですよね。前通ってた学校はどんなところでしたか？」
ギクゥ！凍りつく快。無理もない。彼は自分の名前以外記憶がないのだ。どう答えたら良いか一瞬思案し、悩んだ末
「あ・・・ああ・・・まあ、遠いところだよ、遠いところ。」
と曖昧に答え、これ以上追究されないことを祈ったが、
「遠いところですか。国外ですか？」
追究されさらに困った快は、辺りを見回し、必死に考えた。
「え、ええっと・・・そう国外！ロサンゼルス！」
近くの看板に「ロサンゼルス」と書いてあったので丸々利用させてもらった。そして追究される前に、
「あ！俺今から職員室行かなきゃ！じゃまた後でな！」
有無を言わさずその場からダッシュで逃走。
「あ！待ってくださいー！」
というこえが聞こえたが、気にせず、（すまん、姫路・・・！）と心の中で謝っておく。
思い切り走ったので学園にはすぐ着いた。快は職員室の前にいる。
「よし・・・」
扉を開け、目の前にいた眼鏡の若くそれなりに美人な女性教師に声

をかけた。
「すいません。今日からこの学校でお世話になる天野快です。」
すると、
「あ、はい、ではついてきてください。」
と落ち着いた感じで隣の応接室に案内され、来客用のソファに座らされた。
「では、少し待っていてください。」
というとその人は応接室から出て行った。
5分ほどすると、今度は髪を後ろで束ねた老婆が入ってきた。老婆と言っても腰は真っ直ぐでそれほど老いは感じられず、雰囲気から幾つもの年を重ねて見えた。
「あんたが転校生ってやつかい？」
そう問われ、
「はい」
と短く答えた。
老婆は快の向かいに座り書類を取り出し読み始めた。
「天野快・・・１９９４年7月２８日生まれ・・・肉親関係なし・・・。」
「！」
思わぬところで記憶の破片を手に入れることができた快はわずかに反応した。
「学歴・・・ほう、ロサンゼルスの小中一貫校・・・なかなかいいじゃないか。」
出まかせで言ったロサンゼルスが本当になっていた。一通り書類を読んだ後、
「私がここの学園長、藤堂カヲル（とうどうかをる）だよ。」
と自己紹介をされた。
「はい、よろしくお願いします。」
「じゃあ、手短に言うけど、お前が入るクラスは・・・２－Ｆでいいんだね？」

なぜか確認を取られたが、
「はい」
と答えた。すると、
「本当だね？後悔しないね？」
しつこく聞いてくるので、
「はいって言ってるでしょう。」
とこちらも言い切った。
「わかったよ。じゃあもうすぐ朝のＨＲが始まるから、担任の西村先生のところにいきな。」
そう言われ応接室を出ると、そこにはそれなりに身長のある快さえも圧倒されるほどの大男が仁王立ちで立っていた。
「私が担任の西村だ。よろしくな。では行こうか。」
短くそういうと踵を返して廊下を歩いて行った。快はその後ろにつき、２－Ｆの教室に向かった。

俺とクラスと担任と・・・、（後書き）

というわけで、快が電車の中で助けた女の子は姫路さんでした！ほかにも高橋先生やババア長そして鉄人まで登場し、他のメンバーも早く登場させたいです！

そういえば、読んでいただいたらわかると思いますが、書き方を変えました。読みにくいとの指摘をうけ変更しました。

感想お待ちしております。

俺とクラスと友達と・・・、

「マジかよ・・・」
快は２－Ｆクラスの教室の前にいるが、教室はものすごく汚い、というかボロボロだった。
「２－Ｆ」
と書かれた木札は片方の金具が外れて、ぶら下がっているし、教室のドアは引き戸ではなく障子だった。しかも、穴が開いている。そこから覗くと、全員、机と椅子ではなくミカン箱と座布団であった。
最初の快の発言が、この教室の感想である。そこに、
「では、私が呼んだら入ってこい。」
と当然のように、西村先生が入っていた。
「えー、ではＨＲを始める。その前に、転校生を紹介する。」
『ウオォォォォォォ！！』
世界が揺れたかと思うほどの大歓声だった。
「先生！その転校生は女子ですか！？」
１人の男子が聞いていた。声の弾み様から相当期待しているようだった。
「いや、男だ。」
『チクショォォォォォォォォ！！』
またもや大きな叫び声が聞こえた。
「じゃあ、入ってこい。」
と呼ばれた。（入りづらいなあ）と思ったが、意を決して障子を開けた。スーッ、ガタン！
なぜか少し離れた位置にある障子が外れた。
『・・・・・』
沈黙。
「あ、あの・・・今日からお世話になります、天野快と言います。よろしくお願いします。」

（気まずいィィィ！なんでだぁぁぁ！なんで関係ない障子が外れるんだぁぁぁぁ！）

「あー、私は授業に必要な道具を持ってくるから、全員静かに待っているように。天野は開いているスペースを使え。」

どこか決まりが悪そうに西村先生は教室を後にした。

「ハア・・・」

溜息混じりにスペースを探していると、

「ここ、空いてるよ。」

と1人の男子生徒が自分の後ろを示した。

「あ、ありがとう。」

快は、もらったミカン箱と座布団をそこに置き、座った。

「天野君だっけ、僕は吉井明久（よしいあきひさ）よろしくね。」

「ああ、よろしく明久。」

ここで下の名前をつかったのは、関係をつくろうとした快の考えである。

「あ、名前で呼んでくれるんだ、じゃあ僕も快って呼ぶけどいいかな？」

「ああ、そうしてくれ。」

2人が仲良くなるのに、そう時間はかからなかった。

「へぇ、快も1人暮らしなんだ。ぼくと同じだね。」

「お前もなのか、奇遇だな。」

「僕の家族はね、みんな海外で、働いてて、その仕送りで生活してるんだ。でも、そのお金でゲームを買ったりしちゃうんだけどね。」

はは、と苦笑しながら、明久は言う。そんな明久が、快は少し羨ましかった。

「そうか・・・家族がいるのか・・・。」

「え、なんか言った？」

「ああ、いや、こっちの話。」

「ふうん、あ、そうだ、快ってこういうの好き？」

ガサガサ、と鞄を漁り、あるものを快の前に置いた。そこには、

《Hなお姉さんがピー！してズギューン！してあ・げ・る》
と書かれた本、要はエロ本があった。
「ブフォッ」
おもわず吹いてしまった快。
「いやあ、やっぱり巨乳はいいよね、最高だよ。」
とか言いながら明久はエロ本の感想を述べている。そこへ、ゆらり、
とドス黒いオーラが来た。
「へ～、アキってこういうのが好きなんだ～・・・」
「へ？どしたの美波、ってそっちを向いた瞬間腕が痛いィィィィ
！！」
明久は一瞬で美波と呼ばれるポニーテールの勝気そうな女の子に腕
十字固めを極められていた。
「あ、君転校生だよね。ウチは島田美波（しまだみなみ）、「ぎゃあああああ」仲良く
しましょ。」
ニコニコと笑顔で言われるが、人に腕を極めているやつに仲良くと
言われても、めちゃくちゃ怖いだけである。
「は、はは・・・よろしく。」
半笑いであいさつする快の横に、
「おい、転校生、あんまりそいつに近づくな。バカがうつるぞ。」
快より大きいが、西村先生よりは小さいオールバックの男子がいた。
「雄二！快に変なこと吹き込まないでよ！」
明久が反論するが、
「何言ってんだ、鉄人の私物売りさばいて、観察処分者になった大
バカが。」
と軽くあしらわれている。
「鉄人？」
快が聞くと、
「ああ、俺たちの担任のことだ。俺たちはやつに幾度となく鉄拳制
裁をうけ、様々な品を没収された。ったく、あいつの勘の鋭さった
らないぜ。・・・あ、俺は坂本、坂本雄二（さかもとゆうじ）だ。」

「よろしく雄二。あと、観察処分者ってなんだ？」
「召喚獣が実体化する、と言えば聞こえはいいが、要は学園一の問題児ってことだ。主に教師に頼まれた雑務をこなす。」
「召喚獣？」
「そうか、知らなかったな。ここの学園長がつくったシステムでな、生徒の勉強意識の向上を目指してつくられた。生徒はこの召喚獣を戦わせて、召喚獣戦争をする。勝てば設備がランクアップするし、負ければランクダウンする。召喚獣の強さは、生徒次第で、戦争する前にテストを実施して点数を取る。その点数が高ければ強いし、低ければ弱い。」
「へえ、じゃあ明久はバカって言われてたから弱いのか。」
「ああ、そうだ。」
「ちょっと！さすがにそれは聞き捨てならないな！」
やっと解放された明久だが、
「アキ～、まだ終わってないんだから！」
と今度は足技をかけられていた。
「・・・中々上物・・・」
「うわぁ！」
快の横で音もなく明久のエロ本を読んでいる明久ぐらいの身長の男子がいた。
彼は無言でページをめくり、誰も話しかけられない雰囲気をつくっていた。次のページを開いたその瞬間、
ブシャアッ！
突然、彼の顔に血飛沫が舞った。そして、バタリ！とうつ伏せに倒れ、ピクピクと動いている。
「おい！大丈夫か！？」
快が抱き起すと、震える腕を上げ、グッ、と親指を上に向け、パタリと降ろした。
「おい、雄二、明久、大変だ！」
慌てふためくか快に、２人は、全く気にせず

「ああ、気にするな、こいつは土田康太（つちだこうた）、いつものことだ。」
「はい、ムッツリーニ、輸血パック。」
「どうも・・・。」
と輸血しながら、ムッツリーニと呼ばれた彼は、快にあいさつした。
「お、おう・・・。」
まだ落ち着かない快に、雄二が、
「こいつはとんでもないスケベでな、しょっちゅう鼻血を出してる。しかもあんまりしゃべんないからな、寡黙なる性職者（ムッツリーニ）だ。」
「ムッツリーニはね、すごいんだよ。保健体育なら、Ａクラスにも負けないんだよ。それ以外は全然だけどね。」
明久がそういうと、ムッツリーニは快に名刺を差し出した。そこには彼のと思える電話番号と、こんな文が添えられていた。
「《いつもあなたの真後ろに・・・ムッツリ商会》・・・なんだこれ？」
「こいつが経営してる商会だ。そこに電話して依頼すると、金を払えばすぐ写真やらをくれる。」
（何者だ・・・こいつは）
そう思っていると、快の右横に、また１人やってきた。
「おぬしも気をつけろ、転校生。わしも幾度となく、写真を撮られておる。」
見ると、そこには、おもわず見惚れるほどかわいい女の子がいた。
しかし明らかにおかしかった。
「なんで君は女の子なのに男子用制服をきて、武家みたいな喋り方なの？」
そう聞くと、その女の子は、
「わしは男じゃ！男が男用の制服を着るのは当たり前であろう！」
と怒っていた。
「こいつは木下秀吉（きのしたひでよし）性別はれっきとした、『秀吉』だ。」
雄二がそういうと、
「だから男じゃと言うとろうにー！」

とまた怒っていた。
「席に着け、これから授業を始める。」
ガラッ、と西村先生が入ってきた。
「えー、授業に入る前に一つ連絡事項だ、2時限目の現国はなくなる。召喚獣の再調整をするようだ。
着替えなくていいから、体育館に行くように。」
『ざわざわ』と教室が少し騒ぐ。
「にしても快、お前、すごいタイミングで転校してきたな。」
雄二が言った。
「何が?」
と聞くと、
「転校早々、学園の醍醐味が味わえるってことだ。」
ともったいぶるように言われ、
「だから何がだ?」
もう一度聞くと明久が、
「今度やるんだよ、戦争を、さっき話してた召喚獣戦争をね。」
と言って快の問いに答えた。

俺とクラスと友達と・・・、（後書き）

みなさんこんにちは、夜ならこんばんは。
ついに主要メンバーを登場させることができました！
次回から、対Ｄクラス戦が開始されていくので、おたのしみに！

俺と検査と丸腰と・・・、

１時限目の英語は、西村先生が少し遅く来たこともあり、プリント学習になった。
（どれどれ・・・）
快は送られてきたプリントに目を通す。そこには、バラバラの単語をつなげて文を書く問題や、英文の読解問題があった。快はなぜかすらすら解くことができ、あっという間に終わってしまったので、自分の記憶について考えていた。
（俺はどうやら自分自身の記憶は生年月日と家族がいないことしかないが、学力はそれなりにあるな・・・、いや、そんなことよりも、あの紅渡とかいうやつの「記憶はこの世界で集めろ」という言葉も気になる・・・。）
考えていると、
「よし、では今日はここまでだ。全員次の時限は体育館に移動だぞ。」
いつの間にか授業が終わっていた。皆席を立ち、体育館に向かうようだ。
「快、行こう。」
「ああ、ちょっと待ってくれ。」
明久に誘われ、快も立ち上がり、体育館に向かうのだった。
文月学園の体育館は、天井が通常より少し高い程度で、あとはどこにでもあるような感じである。
「じゃあ、召喚獣の再調整を始めるよ。１人ずつ前に出て、召喚獣をだ出しな。」
先に来ていた学園長がそういうと、雄二が発言した。
「おい、ババア、なんでつい最近やったばかりの調整をまたやるんだ？」
後ろから学園長をババア呼ばわりする雄二に快は驚いた。

「まったく・・・、ババアと呼ぶなと言ってるだろ、毎度毎度。」
嘆息しながら答える学園長は、不満げにこう答えた。
「召喚システムに異状が生じてね。閲覧不能な正体不明のデータがシステムに食い込んでるんだよ。あんたたちクソガキどもの召喚獣に異状がないか確認だよ。」
「正体不明？消去できないのか？」
「ああ、消去しようとしても全然ダメなんだ。まるでシステムに守られてるみたいで、気味が悪いよ。まったく、誰があんな悪戯を・・・、まあそういうことだ、さっさと召喚獣出しな。」
（召喚獣ってどんなのだろうか・・・）
少しワクワクしながら、快は見ていた。
「サモンッ！」
一番最初に前に出たやつがそういうと、ポンッ！と尾が生えた二頭身ぐらいの人形のようなものが幾何学的な紋様から飛び出した。棍棒に武術家のような出で立ちだった。
「おお」
思わず、感心したように声を出した快は、あることに気付いた。その召喚獣は、呼び出したやつにそっくりなのである。
「うん、異状はないね。次のやつ出な。」
「あ、はい。サモン！」
次に前に出たのは姫路であった。ポンッ！とさっきと同様に召喚獣が飛び出てきた。姫路の召喚獣も、姫路にそっくりで、大きな剣と鎧でしっかり武装されていた。先ほどのより明らかに強そうだった。
「・・・異状なし。次。」
数人検査していよいよ快の番になった。前に出ると、周りから
『あいつの召喚獣ってどんなだろうな』
という視線がきた。
「よーし、サモンッ！」
勢い良く叫んだ。そしてポンッ！出てきた召喚獣は・・・なんと武装を一切着けておらず、普通に制服姿だった。

「・・・・え・・・・・？」
一瞬何が起こったのかわからなかった。学園長もきょとんとしている。
「あ・・・、まあ、異状は・・・ないみたいだね。次。」
学園長は次を促した。がっくりとうなだれながら戻った快の横に
「ドンマイ。」
という言葉とともに、雄二と明久がやってきた。
「すごかったね、快の召喚獣、雄二のより丸腰だったよ。」
「ああ、俺のはメリケンサックがついてるからな。」
「・・・武装があるだけマシだろ・・・ハア。」
ものすごい落ち込み様の快を励まそうと話しかけたが、さらに快を傷つけた。
「あ！あそこにフィールドがあるから、快、ちょっと手合せしてよ。外見だけで、意外と強いかもしれないよ。」
フォローするように明久が快の背中を押した。
「あ、ちょっと・・・」
快は半ば無理矢理、フィールドの中に入った。
「いくよ～、サモンッ！」
「どうなることやら・・・、サモンッ！」
フィールドに改造学ランと木刀の明久の召喚獣と、清々しいほど丸腰の快の召喚獣が現れた。
『総合　天野快　４８６点
　吉井明久２９３点』
お互いの点数が表示される。
「先手必勝！、いくよ、快！」
思い切り踏み込み、木刀で鋭い突きをしてきた明久の召喚獣の攻撃を防ぐために、腕を前でクロスさせた快の召喚獣は、ドッ！と腕で受け止めようとした。ズキリ、と腕に衝撃が来る。
「グッ！」
腕に痛みを覚えたがこらえようとする。だが、

「ハァァ！」
さらに前に押され、吹っ飛んでしまう快の召喚獣はそのまま快に目掛けて飛んできた。その時、快の頭の中ににディケイドライバーが浮かんだ。一瞬、それに意識を集中してしまい、
「危ない！！」
自分の召喚獣が飛来するのをよけれなかった。
「グハァッ！」
思いっきり快の腹に直撃した召喚獣はそのまま快もろともフィールドの外に飛び出し、そのまま明久の勝利となった。
「あれ・・・、勝っちゃった。」
驚いている明久の近くに雄二が近づき、
「勝っちゃった、じゃねえよこのバカ！素人に本気出しやがって！」
バシ！と思い切り頭をはたいていた。
ギャーギャーと2人が言い争っているところに、学園長がやってきた。
「おかしいねえ、召喚獣が実体化するのは吉井1人のはずなんだけどね。」
不思議そうに仰向けに倒れている快の横で腕を組んでいる。
手に持っていたノートパソコンで快の召喚獣をチェックし、何も異状がないことを再確認する。
「召喚獣の設定はランダムに決まるからね、あんたのは実体化して、痛みがフィードバックして、丸腰、っていう設定になったんだろう。ま、こればかりはどうしようもないね。ほら、じゃあもう全員教室に帰んな、授業に遅れるよ。」
パンパン、と手をたたき、教室に帰ることを促している。
「ちぇ、もっと強そうなのがよかったな。」
「悪いな快、こいつはどうも手加減というものを知らないらしい。」
「ごめんね、快。痛かった？」
「ああ、大丈夫だ。気にするな。」
笑ってみせる快に、ホッとしたように笑った明久と雄二であった。

そして自分だけが残った体育館で学園長は、
（おかしい、あれほどの点数があれば何か武装があってもおかしくない、一体何が原因だろうね？）
と、快が弱い原因を模索した。
　時間は少し戻り快が初めて召喚獣を出したとき教室では、ポウッ、と快の鞄の中に入っていたディケイドライバーが淡く光を放っていた。それはすぐに収まったが、何かに反応しているようだった。
別の場所では、一人の中年男性が
「おのれ～・・・許さんぞあの小僧！」
と激昂していた。すると、男の体の形がだんだんと人の形を失い、緑色をした、虫とも人とも見れない姿に変貌するのだった。

俺と検査と丸腰と・・・、（後書き）

どうもみなさんこんんちは！
ついに快の召喚獣がお目見えです！丸腰設定でしかも明久と同じ状況となっていますが、これが後後重要になっていきます。
そして快に迫る不穏な影、次回もお楽しみに！
感想お待ちしてます！

俺と飯と化学兵器と・・・、

快の召喚獣がものすごく弱いことが判明して、3時間ほどたった。
今はお昼休みである。
「・・・そういえば飯持ってきたっけ？」
快は先ほどのことから立ち直り、明久たちと昼食をとる約束をしていた。したはいいが、自分が食べ物を持っているか定かではないことに今しがた気づいた。ガサガサ、とディケイドライバーを見られないように注意しながら漁ると、
（！）
声にも顔にも出さなかったが、鞄の中に先ほどまで入ってなかったパンがあった。
《漢のヤキソバパン！！》
と袋に書いてある鞄にギリギリ収まる大きな焼きそばパンだった。
（なんでだ、さっきまで入ってなかったぞ・・・。）
まあ、でも。とあまり気にせずそのパンを持って、明久達が集まっている教室の隅に向かった。
「お待たせ。」
「あ、快、こっち座って。」
明久は、自分の隣を示した。
「サンキュ」
快はそれを受け、明久の隣に座る。明久の膝の上には、弁当箱が置いてあった。明久は、なれた手つきで包みを開き、弁当箱を開けた。
「！」
快はその中身に絶句した。なんと、弁当箱の中身は乾麺を半分に切ったものだった。
「いただきます。」
丁寧に手を合わせてから、乾麺をバリボリと食べる明久に驚き、近くでそれを見ていた雄二に聞いた。

「なあ、こいつの飯っていつもこうなのか？」
「ああ、そうだな。まあこれでもマシなほうか。この前は塩だけだったことがあったぞ。」
「塩だけ・・・」
「流石にあの時はみんなで弁当分けてやったな。」
「ごちそうさま。」
いつの間にか食べ終わっていた明久の前に近づき、
「食うか？」
焼きそばパンを半分差し出すと、
「いいの！？ホントに！？ありがとう！すごくうれしいよ！」
と半泣きで感謝された。そこに・・・
「あの、明久君、よかったら私の作ってきたクッキーも食べますか？」
小さな包みを持参して姫路がやってきた。すると明久は、
「あ・・・、ああ、その・・・気持ちだけ受け取るよ・・・。」
と姫路から目をそらして言った。
「あ・・・そうですか・・・。」
残念そうに戻ろうとする姫路をみて、
「おいおい、明久、さすがにそれはかわいそうだろ。姫路、俺にも一個くれ。」
快は包みに手を伸ばし、クッキーを手に取り、口に運んだ。
『や、やめろー！』
雄二と明久の声が聞こえたが、快はもうクッキーを咀嚼していた。
「うん、なかなかうまいじゃ・・・」
バタン！言葉の途中で快は倒れて、そのまま動かなくなった。
「だから言ったのに、ったく・・・」
雄二が言い、
「あれ？明久君、天野君が動かなくなっちゃいましたけど・・・」
姫路が明久に問い、
「え～っと、あの・・・、きっと美味しすぎて昇天しちゃったんだ

よ！ねえ！雄二！」
「あ・・・、そ、そうだな、うん、そうに違いない。」
「そうなんですか？美味しくて倒れちゃったんですか？」
3人はそんな会話をしていたが、ガバァッ！と言葉のとおり、昇天していた快が目覚めた。
「なんだ、今のは！？」
「あ、起きた。」
「案外、頑丈だな。」
「あれ、俺、明久にパン分けて、そしたら姫路が来て・・・、あれ？」
「あの～、天野君、大丈夫ですか？」
目覚めた快に、三者三様の言葉をかけるすると、キーン、コーン、カーン、コーン、と予鈴が聞こえた。
「あ、授業始まっちゃいますね。じゃあ私はこれで。」
姫路が戻ろうとする姫路を見送り、
「なんだったんだ、あれは・・・」
と感想を述べる快に、
「あれは姫路の化学兵器だ。」
と雄二が答えた。
「化学兵器！？俺、そんなもん食ったの！？」
「まあ、化学兵器って言っても、作り方がちょっと違うだけなんだけどね・・・」
「どんだけオリジナリティ溢れた作り方したら化学兵器になるんだよ！？」
そんな会話を姫路に聞こえないようにしていると、
「あ、もう一個食べます？」
姫路が聞いた。それに男3人は、
『あ、ああ、いや大丈夫。』
と力なく答えるだけであった。

俺と飯と化学兵器と・・・、（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございます！
ごめんなさい！まだちょっと戦争編には入れませんでした。
転校初日に姫路の化学兵器を味わった快は次回ついに初変身です！
次回もお楽しみに！

「じゃあ、またね。」
「ああ、またな。」
快が姫路の手作りクッキー（化学兵器）を食べてから、時間は経ち、放課後、快は明久と一緒に帰ることを誘われ、共に下校した。快は電車なので駅の前で別れた。
（まあ、初日にしては、よかったかな。）
と思いながら、快は電車に乗り込む。
（そういえば、今朝は、姫路を痴漢から助けたっけ・・・）
（そうそう、明久があのエロ本の話したら、島田にプロレス技かけられてたな。）
（そしたらムッツリーニがそのエロ本みて鼻血吹いてたな、あれはビックリした。）
そんな他愛のないことを思い出しながら窓の外の風景を見ていると、鞄の中の固い感触、ディケイドライバーが快を現実に引き戻した。
（破壊者、か・・・）
快は、自分の置かれた状況を確認した。快には、彼、紅渡の言葉が引っ掻かっていた。
『記憶がないようなら、この世界で集めてください。』
という言葉について、快は疑問を持った。
（俺の記憶がこの世界に散らばっている？もしそうなら、どうやって集めるんだ？）
快は渡に聞きたいことがまだたくさんあるのだ。なぜ、俺は記憶を失ったのか、なぜディケイドになったのか、など挙げていけばキリがない。
　そうこうしている間に電車は快の降りる駅に着いた
（まあ、気にしてもしょうがない。次にあいつに会ったら聞こう。）
そう考えをまとめて、下車し、改札を通り、駅を出た快は一歩目で

立ち止まり、
「あ」
と思わず声を出した。とんでもないことに気付いたのである。
（どうやって、帰るんだ・・・？）
そう、快は渡と別れたあと、気が付けば電車に乗っていたのだ。電車の往復は、定期券に書かれていた駅を利用しただけである。どうしようかと途方に暮れていると、ポウ、とディケイドライバーが淡く光った。
「？」
それに気づき、鞄を覗いた快の脳内に、
「！」
早送りのような映像が流れた。堰から水が流れるような感覚を覚えた時には、快は帰宅ルートを完全に把握していた。いや、思い出したと言うべきか。
「こういう時、変に気が利くな、お前は。」
そう言いながら、快は駅を後にしたのだった。
しばらく道を歩いていると、路地裏から、
『いや！離して！』
『おとなしくしろ！』
と、何やらただならぬ雰囲気の会話を耳にした快は、路地裏を覗き込んだ。
「！！」
そこには中学生のような女の子の腕を1人の男が掴んでいた。快が驚いたのはそこではない、腕を掴んでいる男のほうである。
「あいつは・・・！」
その男は、快が今朝、姫路を助けた際に姫路に痴漢をしていた中年男である。
「おい！何やってんだ！！」
快がそう叫ぶと、男はバッ、とこちらを見た。
「お前、まだ懲りてねえのか！」

快がそう言って近づこうとすると、
「チッ！」
と舌打ちをして、襲われていた女の子を引っ張りながら、走って逃げた。
「逃がすかよ！」
快も追いかける。
狭い路地を走り、男を追い、着いたのは廃工場のような場所だった。
辺りを見回すと、廃材を積んだところに、女の子が横たわっていた。
近づこうとしたその時、ザッ、と中年男が快の前に立ちはだかった。
「この俺の楽しみの邪魔しやがって・・・！」
激しく怒っている男に快は、
「へっ、女の子を撫でまわしてるようなことが楽しみなんて、お前、人として恥ずかしくねえのか？」
とわざと挑発するように言った。すると男はニヤ、と不敵に笑った。
「残念ながら、俺は人じゃないんでな。俺は人間なぞよりもはるかに上の存在だ。」
「は？何言ってんだ？明らかに下等だろ。」
「減らず口が言えるのもそこまでだ！」
そう叫ぶと、男の体が見る見る変わっていった。その体は緑色に変化し、腕には長い鉤爪のようなものがついていた。
「なっ！？」
「ククク・・・、俺はワーム、人間に擬態し、その命を奪う、この姿、見られたからには貴様を生きては帰さん！」
ビュン！と鉤爪が快へ襲い掛かる。快は横っ飛びでそれを躱し、近くに転がっていた鉄パイプを手にし、振り上げながら立ち向かう。
「ヤアッ！」
ガキィン！ワームの頭部に鉄パイプがヒットする。
「どうだ！」
「ふん、そんなもの効かん！」

バキッ！快は思い切り殴られ盛大に吹っ飛び、鉄パイプを落としてしまう。
「ぐあっ！」
地面に叩き付けられる快に、ワームは笑い、
「クク・・・、すぐに楽にしてやる！」
ビキ・・・ビキビキビキ！と体に亀裂が入り、また体が変わった。
フォルムは先ほどより細くなり、背中には虫のような羽が生え、両腕にはカマキリのような鋭い鎌がついていた。
ザシュッ！と鎌を快目掛けて、振りかざす。何とかよけるが、今度は蹴りが快の顔面にヒットした。
「ガッ・・・」
またもや吹き飛び、ボロボロになった快の周りに鞄の中に入っていたものが散乱する。
「貴様のような子供に、《クロックアップ》を使うまでもない。なぶり殺しにしてくれる。」
ゆっくりと近づいて来るマンティスワームを前に、
（何かないのか・・・）
圧倒的に不利な快は、何か役立ちそうなものを探す。すると、
「！」
近くにディケイドライバーが転がっている。そしてそれに吸い寄せられるように手に取った。そして、
「こうなったら、ダメもとだ！」
快はディケイドライバーを腰につけた。すると、勝手にドライバーは腰に巻きつき、その横に何かが着いていた。《ライドブッカー》という言葉が頭に響き、それを開いた。また、記憶が戻る。
（懐かしい・・・、俺はこれを使うときいつもこう言っていた。そうだ、あの言葉だ！）
快は、ライドブッカーの中から一枚のカードを取り出し、ワームに見せるように構えた。
「バカな！？貴様、まさか！」

マンティスワームは一歩後ずさった。
快は深呼吸して、叫んだ。あの言葉を、人々を守る戦士が言っていたあの言葉を。
「変身！！」
ドライバーを回転させ、カードを入れる。そしてまたドライバーをもとの位置に回転させた。
《カメンライド・・・ディケイド！》
電子音が響き、快は灰色の装甲に包まれ、それはマゼンタのカラーになり、その姿を現した。
「これが・・・ディケイド・・・！」
世界を破壊し世界を創造する力を持った戦士、『仮面ライダーディケイド』がこの世界に降り立った。

俺と仮面と変身と・・・、（後書き）

みなさん、お待たせしました！
仮面ライダーディケイド、いよいよお目見えです！いやあ、長かった！
次回はディケイド対マンティスワームのバトルをお見せします。
ご期待ください！

俺とバトルと仮面の力と・・・、

「これが・・・ディケイド・・・！」
快は自分の姿に驚嘆する。一方マンティスワームは
「バカな！貴様、仮面ライダーだったのか！？」
と驚愕を露わにし、おもわずそう独りごちた。
仮面ライダーという言葉が、頭に響き、快にまた新たな記憶がよみがえった。怪人の種類と、その知識、そして、戦い方である。快はライドブッカーを開き、一枚のカードをドライバーに装填した。
《アタックライド　ブラスト！》
電子音が鳴り、ライドブッカーはガンモードとなり、快はその引き金を引いた。
「くらえ！」
銃口から無数の光弾が打ち放たれ変則的な軌道を描きながらマンティスワームの両腕の鎌に命中する。
「グアァッ！」
鎌が粉々に砕け、自身もがれきの山に突っ込んだワームはがれきをまき散らしながら立ち上がった。
「おのれ・・・、こうなれば！」
快に走り出したと思った次の瞬間ワームは見えなくなった。消えたのだ。正確に言えば、人には見えない不可視の領域に到達する能力、クロックアップを発動したのだ。快が反応するより早く攻撃に転じたワームは正面、横、後ろからと攻撃をたたき込んだ。
「ウワァ！」
快は攻撃を受け、ワームより後方に吹き飛ばされる。快はクロックアップに対応できるカードを考えながらブッカーを開き、カードを取り出した。するとこの状況では中々ありがたいカードが出てきた。
「ヘッ、１０秒でカタをつけてやるぜ！」
《フォームライド　ファイズ！アクセル！》

電子音が鳴り、快が姿を変えた。仮面ライダーファイズの高速移動形態、『アクセルフォーム』となった快は腕のアクセルウォッチのスイッチを押した。「１０」の文字が出てくる。
『ＲＥＡＤＹ　・・・ＧＯ！』
快はアクセルフォームの力を完全に把握していた。１０秒間だけ超高速移動が可能となるが反対に言えば、１０秒で決着をつけなければならないことも分かっていた。
「ハアァッ！」
快はワームに接近し、パンチやキックを浴びせた。
「グッ！」
ワームがよろけたところに、強い蹴りを入れ、上空に蹴り上げる。
ここまでで４秒使った。残り６秒。
快は新たなカードを取り出した。そして装填する。
《ファイナルアタックライド　ファファファファイズ！》
快もワームを追うように跳躍し、それを追い抜く、するとワームの周りには、赤い円錐のような光がワームを取り囲むように点在した。そこに鋭い飛び蹴りを浴びせ、着地し、標的が落下する前に、また飛び上がり、蹴りつけるという動作を超高速で行うことで、快が何人もいるように見えるようになる、『アクセルクリムゾンスマッシュ』を浴びたワームが落下する前に
『３・・・２・・・１・・・』
とカウントダウンが差し迫り、
『ＴＩＭＥ　ＯＶＥＲ』
の音声とともに、ワームが空中で爆散した。
戦いが終わり、快は変身を解いた。
「すごい・・・これがライダーの力・・・。」
そう言うと、意外な返事が返ってきた。
「お見事です。ディケイド。」
振り返るとそこにはあの青年、紅渡の姿があった。気が付けば、周りの風景も廃工場からあの地球が幾つもある宇宙になっていた。

「そうです、これがディケイドの力、ライダーの力を完全に手中に収め、使用する。破壊者でもあり、創造者でもあるから可能なのです。」

渡は語り始めた。快は、彼のペースに流されまいとこちらから質問を投げかけた。

「ああ、確かにすごい。だが、なぜ俺はこの力を使える？なぜ俺はディケイドなんだ？」

すると渡は意外そうな顔をしてから、フッ、と微笑んだ。

「そうでしたね、まだあなたに伝えていませんでしたね。分かりました、お教えしましょう。」

言うと、また風景が変わった。

荒野に2人の戦士が向かい合っている。ディケイドと、黒いクウガ、クウガアルティメットフォームである。互いの拳に力を籠め、同時に激突する。

「・・・、この風景はこの前見たぞ。」

快は言うが、渡は気にせずという感じで、

「はい、しかし次が重要です。」

と言ってそのビジョンを見るよう促した。快は、2人の激突の続きを見た。

大きな爆発が起こり、辺りが煙に包まれる。煙が晴れると、ディケイドとクウガは仰向けに倒れていた。どうやら相討ちらしい。すると、ビキ！ビキビキビキ！バガァン！と空に大きな亀裂が入り、一部が砕けた。ゴォォォォォ！ものすごい勢いでその穴の中に吸い込まれていくディケイドとクウガ、

「あなたとクウガの激突のエネルギーで世界を保つ力が不安定になり、世界に亀裂が生じた。」

快と渡も追うように亀裂に入っていく。ディケイドとクウガは互いに別々の方向に飛んで行った。すると、共に吸い込まれた岩がディケイドをかすめ、ライドブッカ―が開いた。バサバサとカードが散らばり、ディケイドを取り囲むように展開した。そしてそのままデ

ィケイドは1つの世界に落ちて行った。そこでビジョンは終わった。
「ディケイドが落ちて行った世界はどこだかわかりますか？」
渡が問い、
「・・・、俺がいる世界・・・。」
と答えた快に
「そうです、見つけるのに苦労しましたよ。はるか遠く、ライダーとは関係ない世界にいたんですから。」
と話す渡に快は業を煮やし、まくしたてるように言った。
「だからなぜ俺はディケイドなのかと聞いてるだろ！！」
すると、渡は落ち着いてこう答えた。
「ディケイド、あなたに記憶を集めるように言ったのは僕です。しかし、まだ知ってはいけない記憶もある。それを知ってしまえばあなたはあなたでなくなるかもしれません。」
一瞬、どういうことだ、と言いたくなったが、何やら、先ほどとは違う雰囲気に圧倒され、閉口している快に、今度は優しく微笑みながら言った。
「あなたには、そんなことよりやらなければならないことが沢山ある。先ほどの戦い、あなたはワームと戦い勝ちました。しかし問題はそこではなく、なぜワームがいたかです。」
「！」
快は瞬時に理解した。
「そうです、先ほど見せた世界の亀裂を通り、あの世界までやってきたのです。あなたにはそれを駆逐してもらいたい。あなたにはすでにあの世界との関係が出来上がっている。」
快の脳裏に明久や雄二達の顔が浮かぶ。
「・・・・・、分かった。」
沈黙し、短く答えた快に、安心したように笑い、
「では、頼みましたよ。あなたの力で守ってください。あの世界を・・・」
そう言い、立ち去ろうとする直前

「あ、教えてあげれなかった代わりと言ってはなんですが、プレゼントを用意しておきました。楽しみにしておいてください。では。」と言い、渡は今度こそ立ち去った。風景もいつの間にか路地の入口まで戻ってきていた。

「・・・、やってやるよ、くそったれ。」

快は小さくつぶやき、決意を固めたのであった。

俺とバトルと仮面の力と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは！
快、初勝利です！書いていて興奮しました！最後のアクセルクリムゾンスマッシュは私の好みです。
次回からは、いよいよ、長かった序章を終え、戦争編が始まります。
お楽しみに！

俺とバイクと俺ん家と・・・、

マンティスワームとの戦いからしばらく経ち、快は自宅のすぐそこまで来て、ふと思い出した。

「・・・そういえば、プレゼントってなんだ?」

楽しみにしていろ、と言われたのでそれなりに楽しみにしながら自宅の前に着くと、玄関前に大きなバイクが置いてあった。

「・・・もしかしてこれか?」

そのバイクに触れると頭に『マシンディケイダー』という言葉が響いた。これは、ディケイドが乗るバイクのようだ。

「プレゼントというのはお前か?」

冗談交じりに話しかけてみた。すると、ブオォン、と、まるで肯定するかのようにアイドリングした。キーも刺さってないのにもかかわらず。驚いた快はしげしげとバイク、ディケイダーを観察しあることに気付いた。鍵穴がないのである。ならばどうやって先ほどアイドリングしたのか、考えていると、さらに気付いた。座席部分から見ると、視界の下にディケイドのマークがあり、それに触れると、ディケイダーは小さくなり、快の手の平の上に収まるサイズになった。

「まあ、場所取らないから便利だな。」

そう切り上げ、扉を開き、ディケイダーを手に家に入る。リビングに入ると、もう一つ重大なことに気付いた。

「・・・そういえばバイクもらったのは良いんだけど、免許は・・・?」

そう、バイクに乗るには、免許も必要になってくる。しかし、その心配は杞憂に終わった。テーブルの上に封筒が置いてある。開けてみると、免許証、しかも快の名前で記名されていた。その免許証に触れた途端、快の頭にまた堰を開け流れ出る水ような感覚が感じられた。その感覚が終わるときには、快は免許取得に必要な知識をす

べて記憶していた。今ならどこでも行けそうな感覚もあった。
「便利だな。やっぱり。」
と、口にすると、カサ、ともう1つ何かが封筒から出てきた。またさらに一回り程小さい封筒であった。開けると手紙が入っていた。封筒の裏には『紅渡』の名前があった。文面は
『プレゼントは気に入りましたか、ディケイダーは燃料を積んではいません。クラインの壺と呼ばれる機関から無尽蔵にエネルギーを取り出せるので、ガソリンスタンドに行く必要はありません。そして、あなたの意思がなければ動かないようになっています。あなた以外は動かせませんからあしからず。』
「まあ、そういうことなら」
快は、このプレゼントをありがたく頂戴することにした。
「さて、いつまでも制服姿じゃアレだな。着替えるか。」
そう思い、2階に上がり、自分の部屋に入った。ここですぐに快の部屋と分かったのは、2階の扉がすべて開いており、1つの部屋以外には何も置いてなかったからである。自室は、1人用ベッドがあり、勉強机があり、ベッドと、机の近くには窓があり、クローゼットが部屋の入ってすぐのところにあった。広さとしては、広すぎず、狭すぎない、それくらいの広さだった。クローゼットを開き、Tシャツとジーンズに着替えた快は、自分の家を探検することにした。2階は快の部屋以外は空で、それほど気にはならなかったが、1階はまだちゃんと見ていなかったのでまずは台所から捜索した。
「どれどれ。」
ガラッと棚の扉を開けると、パスタや調味料などが出てきた。食器棚には皿はもちろん、箸、スプーン、フォーク、ナイフなどがあった。
そして、冷蔵庫を開くと、卵、飲み物、肉、野菜などがきれいに整理されて入っていた。量もそれなりにあり、食糧不足はないらしかった。
「ふむ。」

次はリビングのテーブルの横にある棚を開けた。そこには『〇?銀行』と書かれた封筒が幾つかあり、開くと小銭、千円札、五千円札、一万円札に分けられて入っていた。どうやら貯金もできているらしく金欠というわけでもなさそうだった。

「結構、マメなやつなんだな、俺って。」

家を一通り探検した後、小腹が空いたので、もぐもぐと菓子パンを食べながらテレビをつけると、

『任務了解、これより破壊する。』

とアニメが放送されていた。タイトル表記は『新機動戦記ガンダムW』。再放送らしく、画は少し古い。

「へえ、結構面白いじゃん。」とかいいながら、菓子パン片手に快は『ガンダム』を見るのであった。

俺とバイクと俺ん家と・・・、（後書き）

みなさん、こんにちは！夜ならこんばんは！
今回は快の家の詳細を説明しながら、快がバイクを手に入れるお話を書かせていただきました。ほんの少しだけガンダムが登場しました！
次回は、快が自分の召喚獣の秘密を知ります。
ご期待ください！

俺と模擬戦と召喚獣の変身と・・・、

日付が変わって次の日の朝、
「・・・おはよー・・・」
快はげっそりとした顔で教室の障子を開けた。
「どうしたのさ、快、なんかやつれてるよ？」
心配そうに話しかけてくる明久に、
「ああ、まるで徹夜の後みたいだぞ。」
と雄二もやってきた。
「いやな、昨日家に帰ってテレビ点けたら、めちゃくちゃ面しれえアニメやっててよ・・・見まくっちまった。」
答える快は、昨日あの後、アニメ、『ガンダムW』を見続け、どハマリしてしまったのだ。しかもなんとそれは、１８時３０分から朝の５時３０分まで一挙放送というとんでもない長時間スペシャルだったのである。途中、食べ物は食べたが、何を食べたかすら覚えてはいないほど、食い入るように見てしまったのだ。おかげで、快はビックリする位寝不足である。
「へ・・・へ～、快って結構ハマるととことんハマるタイプなんだね・・・。」
快の意外そうな一面を見て、驚く明久と、
「まったく・・・、転校初日から何やってんだか・・・。」
とあきれる雄二、それに反抗するように
「おいおい、ウイング０はすげえんだぞ。ツインバスターマジパねえ。」
と全く説得力のない発言をする快。そこに、
「まったく・・・、おぬしは戦争前に何をやっとるんじゃ。」
と男装した美少じょ・・・じゃない１人の男子、秀吉がやってきた。
「あ、秀吉。おはよう。」
「よう、秀吉。」

挨拶を交わす明久と雄二、快も少し遅れながら
「ああ、おはよう秀吉。」
と言葉をかける。
「そうだぞ、快、今度の相手はDクラス、それほど賢くはないが、俺たちよりは数段賢い。今日は、一日何もないからな、みんなで模擬戦をやろうと思って呼んだんだ。」
「ああ、分かってるって。」
昨日、帰り際に、雄二、明久、ムッツリーニ、秀吉等とアドレスを交換した快は、今日の朝、ガンダムを見終わり、シャワーを浴びて一息ついたところで、雄二からメールが来て、こうして休みの日に、学校に来た次第である。
「ババアからは申請は取ってある。午前中だけなら体育館を使っていいんだとよ。」
「ふうん、それにしても、よく許可がおりたな。」
「以前から考えていたことだしな。ババアからすれば少しでも多くのデータを取っておきたいんだろ。」
「そういうことか、まあでも、俺、召喚獣がアレだしな・・・。」
と肩をすくめる快の脳裏にはあの丸腰で制服姿の自分の召喚獣が思い出される。
「まあ、その点についても、もう少し調べてみようと思う。鍵は姫路と島田・・・後ムッツリーニが取りに行ってるから、俺たちも行くぞ。」
そう言って、教室を出ていく雄二を追って3人も体育館へ向かった。
そして、体育館で姫路、島田、ムッツリーニと合流し快達は早速模擬戦を始めることにした。
「召喚許可はババアからもらってるし、フィールドもタイマー式で12時まで使えるようにしておいてもらってる。点数は模擬戦だから無制限だ。行くぞー。」
「「「「「「「「「サモン！」」」」」」」」」
全員の召喚獣が幾何学的な紋様から飛び出す。明久、雄二、姫路の

召喚獣は検査の時に見たことはあったが、秀吉、島田、ムッツリーニの召喚獣は見たことがなかったので、快はチラ、と彼らの召喚獣を見る。秀吉の召喚獣は侍のような姿で、日本刀を持っている。島田のは軍服にサーベルという姿。そしてムッツリーニは忍者のような姿に小刀というそれぞれしっかりした装備を着けている。

「それに比べて俺は・・・」

快の前には丸腰制服姿の召喚獣がいる。やはりとても頼りない。

「じゃあ、とりあえずウチとアキが見本を見せるから見てて。」

と島田が前に出る。

「え、僕？まあいいや、よーし、こい！美波！」

明久も召喚獣に木刀を構えさせる。

「行くわよー、それっ！」

島田の召喚獣が明久の召喚獣に肉薄する。ガン！ガキン！とサーベルと木刀がぶつかり合う。しかし、所詮、木と鉄である。明久の召喚獣の木刀はすぐに折れ、明久はピンチに陥る。ビッ！とサーベルが明久の召喚獣の首元に置かれる。

「勝負ありね。アキ。」

「くッ、やるじゃないか美波！」

「と、まあ、ざっとこんなもんかしら。」

召喚獣を消して島田が言う。

「すごいよ美波、扱いが前より上手くなってるね。」

と明久がほめると、

「え！、そ・・・そう？」

と照れるような仕草をし、顔を赤らめた島田。すると

「お姉さまに近づく豚め・・・、殺す！殺します！」

「うわあ！？」

快の横に黒いオーラを放ち、明久を睨んでいるの女子がいた。そしておもむろにシャーペンを取り出し、それを投げナイフのように明久に向かって投げた。

「危ねえ！」

咄嗟に手でそれを払った快に、
「何するんですの!?」
と食って掛かる女子に、
「それはこっちのセリフだ!そんなもん人に投げようとして!」
快は強く言った。
「美春!!」
と美春と呼ばれた女子に島田が近づいた。すると、
「お姉さま!大変凛凛しゅうございましたわ!」
と先程とはまったく違うキラッキラした目で島田を見ていた。
「島田、知り合いか?」
快が問うと、抱きつこうとしてくる女子を抑えながら
「うん、清水美春(しみずみはる)って言うの。いつもウチにこうやってくるから大変なの。」
「何を言ってらっしゃるんですの!私はお姉さまとの愛を確かめているだけですのに!」
「アーッ、もう抱きつかないの!」
グイーッと引きはがされ、ふと目があった快を見て、清水は島田に聞いた。
「お姉さま、誰ですの?この見慣れない薄汚い豚は?」
「豚って・・・。」
「ああ、こっちは昨日転校してきた天野快っていうの。」
「おい、豚のところスルーか!」
「ふうん、転校生でしたの。道理で見かけない面だったわけですわ。ま、戦争前に転校生の1人や2人来たところでこの私が軽く捻ってやりますわ。」
自信あり気に清水が言う。
「自信満々じゃねえか。言ってくれるね。」
快が言い返すと、
「ええ、なんなら今ここで模擬戦の相手をして差し上げてもよろしいですわよ。」

とさらに言ってきた。そして、快の足元の召喚獣を見て、フッ、と笑い
「まあ、そんな弱そうな召喚獣に負けるはずありませんがね。」
と挑発するように言った。
「いいぜ！相手になってやるよ！」
快はその挑発に乗り、清水と対決することになった。
「ちょっと、雄二、止めなくていいの？快、負けちゃうんじゃない？」
「そうじゃぞ、雄二、勝負は目に見えておる。」
「・・・無謀。」
「そうですよ坂本君、天野君の召喚獣は痛みのフィードバックがあるんですよ？」
「そうよ坂本、美春のことだからこてんぱんにしちゃうわよ。」
明久たちが快を案じて雄二に抗議する。しかし雄二は気に留める様子もなく、
「いや、このままやらせる。実を言うと、ババアから頼まれててな。あいつの召喚獣についてこっちで調べておけって。まったく、人使いの荒いババアだ。」
と言って2人の対決が始まるのを待っている。そして、
「行きますわよ！サモン！」
清水の召喚獣が出現する。武装は短い剣とローマの兵士のような鎧である。
「一気に終わらせて差し上げますわ！」
清水の召喚獣が剣を振り、快の召喚獣に迫る。
「危ないっ！」
明久が叫ぶ。すると快は
「大丈夫。」
サッ、と必要最低限の動作でそれを避けさせる。そして回し蹴りを相手の横っ腹に当てる。ガン！と音が鳴る。しかし、
「いっっっっっ・・・・・て～～～！」

苦悶の表情で転げまわっているのは清水の召喚獣ではなく快と快の召喚獣のほうである。鎧に蹴りを思い切り当てたのだ。フィードバックで足にものすごい激痛が走る。

「「「「ダメだな」」」」「ダメね」「ダメですね」

と明久たちも微妙にあきれ顔である。

「ふふ、全くと言っていいほどの素人ですわね！」

剣を快の召喚獣に向かって突き刺そうとしてくる。それを横に転がることで何とか躱す。

「ほらほら！避けてるだけじゃ勝てませんことよ！」

清水の連撃を何とか躱し続ける。

「くそっ！何か手はないのか！？・・・ん？」

ふと快は自分が何かを持っているのに気づき、見るとそれは、ディケイドライバーだった。

「なんで！？」

確かに快は昨日のようなことに備え、持ってきてはいたが、鞄の中に入れたはずであった。

「こんな時に、どう使えって、言うんだよ！」

召喚獣を動かしながら、快は考える。すると、ポウ、とディケイドライバーが淡く光り、快の頭にイメージを送った。

「・・・！なるほど、そういうことか！」

快は召喚獣を自分のそばに近づけさせた。

「どうしたんですの？降参するなら今のうちですわよ。」

余裕そうに清水が言う。しかし、快も負けないくらいに余裕ぶりながら、

「へっ、それはこっちのセリフだぜ。」

と答える。

「虚勢を張るのもたいがいにしてください。これで・・・終わりです！」

清水の召喚獣が突進してくる。快はディケイドライバーに力を籠めた。するとディケイドライバーが快の手の中から消え、小さくなり

召喚獣の腰に巻かれた。
「行くぜ・・・変身！」
快が言うと、召喚獣は快のそれと同じようにライドブッカーからカードを取り出し、ドライバーに装填した。そしてドライバーを回転させた。
《カメンライド　ディケイド！》
電子音が鳴り、召喚獣に灰色の装甲がつき、灰色からマゼンタカラーへと色が変わる。召喚獣が小さなディケイドになったのである。
「なるほど、道理で最初の姿が丸腰なわけだ。」
「快の召喚獣の姿が変わった！？」
「すごいです！そういう仕掛けだったんですか！」
「変身とは、さすがに想像できなかったのう！」
「なんだか強そうだわ！」
「見たことがないタイプ・・・。」
明久たちが驚きの声をあげるなか、１人、清水は狼狽した。
「なっ、なんですのそれは！？」
「フッフッフッ、これはな・・・」
と説明しようとしたが、なぜか、心のどこかで、自分がライダーであることを隠せ、と告げる声があった。一瞬悩み、はぐらかすように、
「あー・・・企業秘密だ！！」
と言った。そして、有無を言わせないように、カードを取り出し、ドライバーに装填させる。
《アタックライド　スラッシュ！》
と電子音が鳴りライドブッカーをソードモードに変え、召喚獣を突進させる。
「クッ！」
清水は召喚獣に受け止めさせる構えをとらせた。しかし、剣同士がぶつかり、バキィン！と大きな音が鳴ると、清水の召喚獣の短剣は根元からボッキリと折れていた。

「なっ・・・！」
相手が動く前に快はライドブッカーを清水の召喚獣の首元に置かせ、宣言した。
「勝負ありだな。」
シュゥゥンと音を立て召喚フィールドが消えていく。どうやら約束の１２時を過ぎたようだ。あの後清水は「今日は、今度の対戦相手に挨拶をしに来ただけですの。先ほどは驚いて何もできませんでしたが、次戦うときは負けませんわ。」
といかにも負け惜しみ的なことを言って、体育館を後にした。
「しっかし、すごかったな、快の召喚獣。まさかあんな仕掛けがあったなんてな。」
帰り、快は雄二、明久と一緒に歩いていた。快はバイクもあったが今はまだ使っていない。
「そうだね、すごかったよ、一気に決着を着けてたもん。」
「ああ、まあ俺もあの時初めて使ったんだけどな。まさかうまくいくとは思わなかった。」
快は得意げに話している。初めて見たときはすごく弱そうだった自分の召喚獣が本当はすごく強かったことがうれしかった。
３人はわいわいと話しながら学園を後にした。
その日の夜、誰もいない召喚獣制御システムマシン室、そこに、突如、召喚フィールドが出現する。誰もいないはずのこの場所で、なぜフィールドが出現したかは謎である。そのフィールドの中央にゆらゆらとホログラムのような蜃気楼のような、あるいは幻のような、人の影があった。その影は、小さくつぶやいた。
「・・・天野・・・快・・・・・」
そして突然、フィールドはその影もろとも消えてしまった。そこには、稼働していない制御システムマシンが置いてあるだけであった。

俺と模擬戦と召喚獣の変身と・・・、（後書き）

こんにちは！作者です！
召喚獣が変身というとんでもない展開になりました！
これは、この作品を作る前から考えていたアイデアです。皆さん、いかがでしたでしょうか？
そして清水美春が登場です！これからも、どんどん準レギュラーキャラを出して行きたいと思います！
余談ですが、冒頭のガンダムWのくだりは後々ストーリーに関係してくるのでお楽しみに！では、次回にお会いしましょう！

俺と気持ちと開戦と・・・、

快の召喚獣が変身すると分かった次の日の月曜日、今日からDクラスとの戦争が開始される。快は、学園までバイク、ディケイダーで向かった。途中、同じ文月学園の生徒が制服姿でバイクに乗っているのを見て、驚いている数人の学園生徒の姿を見た。学園より少し離れたところで、誰も見ていない事を確認し、ボタンに触れ、バイクを手のひらサイズにして、鞄に入れた。まだ、申請をしてないためあまり騒がれたくなかったからである。

そして教室、そこではFクラスの全員と作戦会議を開いていた。

「いいか、今日からDクラスとの戦争が開始される。俺がクラス代表で問題はないな。」

雄二が慣れた感じでそういっている。快は後ろのほうでそれを聞いていた。

(俺はうまくやれるだろうか・・・)

そう考えていると、

「快は、今回は初めての戦争だからな。自由に動いてくれて構わない。でも無理はするな。」

「あ、ああ、わかった。」

快のほうに視線が向く。快は、そう答え、説明の続きを促した。

「・・・ここは階段から・・・」

雄二は指揮官が似合うな、と快は思った。こういう大勢を動かす能力に長けている。そう思いながら、快は作戦会議を聞いていた。しばらくするとキーン、コーン、カーン、コーンとベルが鳴った。

「もうすぐ戦争が始まる。全員、死んでも勝て!。」

『オウ!』

作戦会議を切り上げ、全員の周りに緊張した空気が漂う。西村先生が入ってきた。

「もうじき戦争が開始される。そのことに関して一つ学園長から注

意事項がある。」
この大事な時間に、なんだろうか?全員がその言葉に耳を傾けた。
「全員、今回は勝つことしか考えていないだろう。しかし、それではつまらないと学園長が提案を出しそれを自分の権限で通した。」
「おい、鉄人、勿体ぶらずはっきり言えよ。」
雄二がそう言うと、
「西村先生と呼べ。そして今から言うから待て。えー、お前たちは今の教室の設備がもう下がらない。そう思っているだろう。しかし、そうではない。学園長は新しいペナルティを用意した。」
「なんだと!?」
雄二が狼狽する。
「お前たちが、この戦争で負けたら、さらに設備がランクダウンする。それが今回のペナルティだ。」
『ナ・・・ナニィィィィ!?』
全員に動揺が走る。
「どういうことですか!?これ以上何が下がるっていうんですか!?」
快も動揺を隠せず鉄人に詰め寄る。
「さあ、私にもそれはわからない。だが、何かしらがなくなるのだろう。では、そういうことだ。全員これ以上設備が悪くならないよう頑張れよ。」
そう言って、教室から出て行ってしまった。
「畜生!ババアの奴、飛んでもねえこと言いだしやがった!」
雄二が悪態をつく。そこに明久が
「どうするのさ雄二、負けたらこれよりひどくなっちゃうんだって。」
とミカン箱を見ながら言う。
「ああ、もう負けられねえぞ・・・!」
「これ以上ひどくなるなんていやだぜ・・・」
「いよいよ、なにもなくなるんじゃねえか、ここ・・・」

皆も口々に、不安の声をあげる。
『・・・・・・・・・』
教室が一気にシュンとなる。すると
「・・・あ～～もうっ！！なに始まる前から負けるみたいな空気出してんだよ！勝てばいいんだろ！！勝てば！！」
快が嫌な雰囲気を払拭するように立ち上がり、叫ぶ。
「俺は転校してきてまだ日が浅いからそんな大それたことは言えねえ！だがこれだけは言える！最初っから士気が低くかったら勝てるものも勝てねえ！勝ちたいんだろ！？だから、皆必死こいて勉強してきたんだろ！？」
快はそこで一度区切り、息を吸った。
「皆、一人一人違う目的があったとしても、勝ちたいのは同じだろ！？だったら・・・！」
快がさらに言おうとすると、雄二がそれを制した。
「雄二・・・！」
「まったく・・・。転校生のくせに言ってくれるぜ・・・。」
そういう雄二の顔はどこか覚悟を決めたようだった。
「どうしたお前ら！転校生にケツ叩かれねえと動けねえなんてそれでもいいのか！？」
雄二が全員に向かって言う。雄二も雄二なりに皆を鼓舞しようとしている。
『・・・』
少しの沈黙が流れ、そして、
「へっ、そんなわけねえだろ！」
「ああ、そうだ！Dクラスになんか負けねえ！」
「さっさとこんな汚い教室おさらばしようぜ！」
段々と声があがる。皆に士気が戻っていく。
「やってやろうよ雄二！」
「Dクラスの連中に一泡吹かせてやろうぞ！」
「・・・絶対勝つ・・・」

「やるわよー！」
「私もがんばります！」
明久たちも完全に士気を取り戻し、やる気に満ちている。
「よし！俺たちならやれる！行くぞ！！」
『ウォォォ！！』
全員が団結し、士気が最高潮に達したとき、アナウンスが鳴った。
『それでは、只今よりＦクラス対Ｄクラスの召喚獣戦争を始めます。』
短いアナウンスだったがそれ以上は語ることは無かったようだった。
「さあ、Ｆクラス魂を見せてやるぜ！」
須川が教室から意気揚々と出ていき、皆も作戦会議で指示された場所へ向かう。
「じゃ、俺も行きますか・・・」
快が障子に手をかけると、
「ちょっと待て。」
雄二に引き留められた。
「なんだよ雄二。」
快が問うと、雄二は快の肩に手を置き言った。
「快、さっきお前には自由に動いていいと言ったが、あれは嘘だ。」
「嘘？」
「ああ、お前にも役目がある。」
不敵に笑いながら言う。
「とっておきの重要な役目がな。」

俺と気持ちと開戦と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは！
いよいよ開戦です！今までなかなか戦争編に入れなくてすいませんでした！
これからもガンガン書いていくのでお楽しみに！
次回は快が戦場を駆け抜けます！
ご期待ください！

俺と初戦と戦略と・・・、

快は教室を出て、手近に戦闘が行われている場所を探してる。現在、雄二に指示された作戦を決行中である。
「しかし・・・、上手くいくのか？」
快は雄二とのやり取りを思い出した。
「いいか、快、お前は今回の戦争の鍵を握っている。お前にはプロパガンダ・・・、宣伝をしてもらおうと考えている。」
雄二が事前に考えていたであろう作戦を伝える。
「宣伝？」
「ああ、お前は転校してきてあまり日がない。おそらくお前の召喚獣は昨日の模擬戦で見せた変身能力がメインだと考えられる。おそらく清水もそのことは伝えてあるだろう。だが、そこを利用する。」
「どうするんだ？」
「おそらく清水の奴は転校生の召喚獣は変身する、とだけしか伝えられてないだろう。それだけじゃ、それほどの脅威にはならない。だからわざとお前は派手に戦ってほしい。お前に派手に戦ってもらっているうちに、こっちでハッタリをかます。」
「ハッタリってどんな？」
「俺たちは、切り札としてとんでもないものを持っている。とだけDの連中に言う。まあ、いきなり、やつらはお前の事だとは思わないだろう。だが、そこでお前が派手に戦場を荒らせばそのハッタリは、本当になる。お前に連中の視線が行ってるうちに、俺たちがDクラス代表を叩く。まあ、言ってしまえば、囮作戦ってことだな・・・やれるか？」
一通り説明が終わり、雄二が確認を取る。快は自信ありげに頷き、その場を立ち上がる。
「ああ、任せろ。一つ聞いておく、相手は全員倒していいんだな？」
「？ああ、それに関しては構わないが、それがどうしたんだ？」

雄二が聞くと、
「いや、あんなことを言った手前、俺も頑張らなきゃと思ってな。」
快はそう答え、教室を出た。
そして現在、快は3人のDクラス生徒と鉢合わせした。
「お前が転校生か！悪いが今回の戦争でお前の出番はなしだぜ！」
「ああ！Fクラスのバカなんぞには負けねえ！」
「ここで戦死してもらうぜ！北山先生！お願いします！」
1人が連れてきたであろう北山と呼ばれた若い先生に声をかける。
「はい、召喚を許可します。」
北山先生が言うとフィールドが展開される
「「「サモン！」」」
ボンッ！と三体の召喚獣が幾何学的な紋様から出現する。
「サモン！」
快も召喚獣を呼び出す。
『現国　Dクラス　　Fクラス
立場陽一　１１８点
下田幸平　１０３点　　ＶＳ天野　快　１０６点
吉村　清　１１４点
』
双方の点数が表示される。
「へっ、それなりに点数はあるみたいだが3対1だ！しかもお前の召喚獣は丸腰！勝ちはもらった！」
スポーツ刈りの男子、召喚獣の見た目から下田というやつか、が剣を構えさせ攻撃を仕掛ける。
「どうかな・・・。見せてやるぜ、俺の力！」
快が念じると召喚獣の腰にディケイドライバーが巻かれる。カードを取り出させ装填する。
「変身！」
快が言い、召喚獣がドライバーを回転させる。
《カメンライド　ディケイド！》
電子音が鳴り、召喚獣の姿が変わる。

「なに！？」
サッ、と剣をいなし、敵の召喚獣の甲冑にパンチを入れる。バガン！と大きな音が響く。見ると、敵の召喚獣の甲冑にひびが入っている。見ると表示された点数が変わっている。
『下田幸平　７８点』
「「何ィ！？」」
３人が動揺している。一発のパンチで点数が激減したのに驚いたのだろう。しかし快は攻撃の手を休めない。ライドブッカーをソードモードにし、一気に下田の召喚獣の懐まで間合いを詰める。
「ハアッ！」
気合の一言とともにライドブッカーを振る。ザンッ！という音と共に下田の召喚獣が袈裟切りにされ、また点数が変化する。
『下田幸平　４６点』
「クッ、こいつ強いぞ・・・！」
下田が声を出す。
「オラオラどうした！そんなもんか？そこの２人もかかって来いよ！まとめて相手してやる！」
「舐めるなぁ！」
叫びながら立場が召喚獣に武装の拳銃を抜かせ、二丁拳銃で快に攻撃し、吉村の召喚獣が薙刀を構えまがら突進する。
それを難なく躱した快は、新たなカードを取り出させた。
「これでフェアに戦えるぜ！」
《アタックライド　イリュージョン！》
カードを使うと、快の召喚獣が三体に分身した。
「「「増えた！？」」」
「さらにこれだ！」
快は三体の召喚獣に別々のカードを取り出させる。
《カメンライド　クウガ！》
《カメンライド　デンオー！》
《カメンライド　アギト！》

三体の快の召喚獣は姿を変え、下田の召喚獣にはクウガ、立場の召喚獣には電王、そして吉村の召喚獣にはアギトが向かい合うように配置される。

「姿が変わった!?」

「おまけにもう一丁!」

快はさらにカードを取り出させた。

《フォームライド　クウガ!タイタン!》

《フォームライド　デンオー!ガン!》

《フォームライド　アギト!ストーム!》

快はクウガをタイタンフォーム、電王をガンフォーム、アギトをストームフォームにフォームチェンジさせた。

「さあ、ボッコボコにしてやるぜ!」

快の超ド派手囮大作戦（快の勝手な命名）がスタートする。

俺と初戦と戦略と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは！
快が召喚獣ディケイドを使いこなせている感じに仕上げるために大量にカードを使わせてもらいました！意図としては、お互いが同じ武器で戦うように使うカードは選びました！次回はさらに戦争がさらに展開していきます！お楽しみに！

俺と囮と増殖と・・・、

「戦死者は補習～！」
「「ちくしょぉぉぉ！！！」」
快に挑んだDクラスの3人は、いつの間にか近くにいた鉄人こと西村先生に連行されていった。
「ふう、ま、こんなもんかな。」
快の戦いは一方的だった。タイタンフォームの能力で下田の召喚獣の武装の剣を奪い、タイタンソードにし、驚いている隙に一気に薙ぎ払い真っ二つにした。そしてガンフォームと立場の召喚獣の戦闘は敵の銃撃をダンスを踊るように躱し、至近距離で連射を浴びさせ蜂の巣にし、吉村との戦闘は、相手の召喚獣の薙刀をストームハルバートで細切れにして無防備になったところを思い切り貫いた。そしてDクラス3人衆の持ち点が0になり、戦闘は終了した。
「さて、次の戦場に急がねえと・・・」
快が歩きだした瞬間
（・・・快・・・）
と女の声が響いたような気がして後ろを振り返る。しかしそこには、西村先生に連行されていく下田、立場、吉村の姿しかなかった。
「・・・？まあ、いいか。」
快はその場を後にした。
「・・・、すげえ、やっぱり3人じゃダメか。」
快とDクラスの戦闘を影から見ている者がいた。清水に頼まれ、偵察として快の戦闘を観察していたDクラスの男子生徒である。
「こうしちゃいられない。すぐに戦力を増やさないと！」
彼はすぐに立ち去った。
「・・・・・」
しかし、彼の後ろにはもう一人彼を見ていた存在があった。
「・・・坂本の言った通り・・・。」

快のクラスメイトであるムッツリーニこと土田康太である。彼は雄二に作戦会議が始まる前から指示を受けていた。快から目を離すな、という指示である。雄二は快に偵察が付き、戦力が快に注がれることを予見し、そのタイミングを見逃さないようにムッツリーニに報告させるように指示を出していた。

「・・・・・」

スーッとムッツリーニは雄二にこれを報せるべく、音もなくその場を後にした。

「・・・以上・・・」

「なるほど、思った通り快に戦力を向けたか。よし、俺たちは今からDクラス代表を叩きに行く。全員準備はいいな?」

雄二が報告を聞き、集まった快以外のFクラスの面々に声をかける。

「いいけど・・・雄二、快は大丈夫かな?」

明久が囮である快のことを案じ、雄二に話しかける。

「大丈夫だ明久、ムッツリーニからの報告では快は結構一方的な戦いをしたらしい。それに、まだまだ余裕そうだったと聞いてる。俺たちはあいつが作ってくれたこのチャンスに一気に勝負をつける。」

「でも・・・」

「心配ないぞ明久よ、あやつなら心配ないじゃろう。」

明久に秀吉が声をかける。

「秀吉・・・」

「それにあやつはなかなかいい目をしとった。囮も上手くこなせているであろう。おかげでわしらはこうして無事集まれたんじゃ。」

「そうですよ明久君、天野君を信じましょう。」

姫路も秀吉の考えに賛同する。

「そっか、そうだね。よし!僕たちも頑張らなきゃ!」

「その意気だ明久、よし、じゃあ行くぞ。」

Fクラスの面々は、打倒Dクラスという目的を胸に、代表がいるであろうDクラスの教室に向かった。

時同じくして、

「うわあ・・・、これはこれは・・・。」
快は廊下の一角から顔を出し、様子を伺っていた。そこにはざっと見積もっても１５人はいるであろうＤクラスの生徒が固まって周囲を警戒していた。
「さて、どうしたものか・・・」
快が様子を伺っていると、
「しかし、すごいなＦクラスの転校生は。」
「ああ、一気に下田と立場と吉村の３人を倒しちまうなんてな。」
「でも、だからってこの人数は多すぎない？清水さん。」
数人の男子と女子の会話が聞こえてきた。話の内容からどうやら清水もいるようだ。
「いえ、あの豚野郎は何か他のＦクラスの連中とは違う感じがしてましたの。これでもまだ少ないと思いましてよ。」
「そうなの？私はまだ見たことがないからよく分からないわ。」
快は悩んだ。先ほどのようにイリュージョンのカードで人数を増やすことはできるが、あれは３体が限界であると快は理解していた。イリュージョンのカードで増やした分身は快の考えた通りに動く。だがそれは召喚獣の戦いで使うとなると相当な集中力が必要だった。召喚獣のコントロールは召喚した本人が所有している。すなわち、１体の召喚獣のコントロールは難しくない、だが複数体のコントロールとなると途端に難易度が上がるということである。
（３人でやっとだったんだ、１５人なんてできるわけがない。仕方ない、こうなったら・・・！）
快は意を決してＤクラス軍団の前に躍り出る。
「！、あら、ごきげんよう豚野郎。さすがのあなたでも一気に１５人は酷じゃなくって？」
清水が余裕そうな表情を浮かべる。
「まったく、過大評価してくれちゃって・・・。ま、まだ俺を倒すには足りないかな。」
と快も負けじと余裕の表情を見せる。

「減らず口が言えるのもそこまでですわ！先生お願いします！」
「はあ、さすがこれは天野君には不利かもしれませんが、本人は平気そうなので召喚を許可します。」
化学の布施先生が召喚を許可したことでフィールドが発生する。
『サモン！』
「サモン！」
ボウンッ！と快の召喚獣の前におびただしい数の召喚獣が出現する。
点数の表示法も変化していた。
『化学　Ｄクラス軍団　１６０８点
　Ｆクラス　天野快　１２９点　』
Ｄクラス側の点数表示が一人一人の点数から合計点に変化されている。
「さあ、叩きのめして差し上げますわ！」
清水の召喚獣が突進する。
「変身！」
《カメンライド　ディケイド！》
快はすぐに召喚獣を変身させ、ライドブッカーソードモードで攻撃を受け止める。
「俺たちも・・・」
「いるんだから！」
男女の２人組が快の後ろに接近し、左右からレイピアとククリ刀で攻撃しようとする。
「危ねえ！」
サッとしゃがみながらそれを躱し、後ろへジャンプして距離を取る。
しかし着地する場所にもう一人いることに気付かなかった。
「掛かったな、くらえ！」
ズバッ！召喚獣の背中をダガーのようなもので切り付けられ、快の背中にもフィードバックの痛みが、容赦なく襲い掛かる。
「ぐっ！」
攻撃を受けたことで、快の召喚獣は一瞬隙ができる。そこに、追い

打ちをかけるように拳闘士タイプの召喚獣の飛び蹴りが襲い掛かる。
なんとか受け止め、後ろに後退するがまだ敵は多く、今度はナイフを、正確に快の召喚獣の目を狙って投げつけてきた。
「当たるかよ！」
難なくそれを躱す。しかしナイフに目が行ってしまい接近するハンマーを持った召喚獣がいることに気付かなかった。
「しま・・・っ！」
「遅い！」
ドゴン！とハンマーが快の召喚獣の体を打ち据える。
「・・・！」
痛みで息ができなくなる。装甲があったとしても打撃系の強い一撃ならダメージが少なくとも衝撃には耐えられない。
「どうですの？少しは効いたんじゃありませんこと？」
清水が余裕の表情で快を見る。
「クッ・・・！」
何とか立ち直り、点数をチェックする。
『化学　天野快　７６点』
確実に点数が減っている。このままではまずい、そう思い、何か対抗手段を考える。するとライドブッカーが勝手に開き、２枚のカードが飛び出す。
「・・・これは！」
「今更何をしようが無駄ですわ！」
清水が召喚獣を快の召喚獣に接近させる。
「これでどうだ！」
快はドライバーにカードを装填させる。
《カメンライド　オーズ！》
快の召喚獣がディケイドの姿から人の欲と戦うライダー「仮面ライダーオーズ　タトバコンボ」に姿を変える。
「なっ、姿が変わった・・・！」
「これも使うぜ！」

快はさらにもう1枚のカードドライバーに装填する。
《フォームライド　オーズ！　ガタキリバ！》
オーズの姿が赤、黄色、緑のカラーリングから緑一色になり、頭部と腕部の形状も変化する。
「姿が変わったからなんですの！？何をしてこようがこの数なら押し切れますわ！」
清水の顔に少し焦りが見える。快が何か企んでいると察したのだろう。他のDクラスの生徒に一斉攻撃をするように指示を出している。
「ああ、確かにその人数なら勝てるだろうな・・・、ただし！俺がもっと多人数になったら話は変わってくるだろ！」
快はオーズガタキリバコンボの特殊能力を発動する。額の緑色の水晶のようなものが光ると2人に増え2人が4人に、4人が8人に、8人が16人にとどんどん数が増えていく。そして・・・、
「・・・これはすごい・・・。」
「う・・・嘘だろ・・・。」
「こんなのでたらめよ・・・。」
「勝てるわけがねえ・・・。」
驚いているDクラス軍団と布施先生の前には広大なフィールドを大量のディケイドオーズGKが立ちふさがっていた。だが、快は分身した召喚獣の制御は3人が限界のはずである。しかし、それはイリュージョンの場合であり、ガタキリバの分身は一体一体が自立行動をとることができる。よって、イリュージョンのように集中する必要がなくなるということだ。しかも、召喚システムはこれを快1人の行動であるとし、すべての分身に快の残りの点数76点が与えられた。
「さあ、こっからが本番だぜ！」
快は召喚獣に攻撃の指示を出す。ドドドドド！と大量のディケイドオーズGKが完全に人数差を逆転させたDクラス軍団に迫る。
「う、うろたえてはいけませんの！相手は所詮Fクラス！どうせこれもハッタリですわ！」

清水が他のDクラスの生徒に声をかける。しかし、清水の発言はすぐに否定される。
「これで終わりだ！」
《ファイナルアタッククライド　オオオオーズ！》
カードを装填し、すべての召喚獣をバッタレッグの能力で高くジャンプさせ、大量の飛び蹴りを浴びせる『ガタキリバキック』を発動する。
「うわあ！」
「きゃあ！」
とDクラスから悲鳴があがる。強力なキックを浴びた召喚獣が爆発して消滅したのだ。そして、キックの雨が止むとフィールドに立っているのは快の召喚獣であるディケイドオーズGKだけであった。
点数が表示される。
『化学　Dクラス軍団　　0点
　　天野快　　76点　　』
決着がつき、布施先生がフィールドを消す。すると、
「戦死者は補習～！」
とまた突然西村先生が現れ、清水たちを連行していった。
「クッ・・・、天野快・・・！とんでもないやつですの・・・」
すれ違いざまに清水がそう言った。
「お褒めに預かり光栄だ。」
快も皮肉を言う。すると清水は不敵に笑い、
「ふふっ、まあいいですわ。我々Dクラスの勝利は確定しています。」
「何・・・？」
「今頃、Dクラス代表の平賀源二（ひらがげんじ）が他のFクラスたちをボコボコにしているでしょうね。ご存じ？　召喚獣戦争はどちらかの代表が負けるまで終わりません。反対に言えば代表が負ければ戦争は終わります。つまり、あなたがいくら強くても代表が負けてしまえば意味がありません。」

「要は、その平賀ってやつを倒せばいいんだな？」
快が聞くと、ズズン！とどこかで何かがぶつかったような大きな音が聞こえた。
「そういえば、平賀源二は誰にも負けない力を手に入れた、と言ってましたわ。もうじき勝負もつくでしょう。」
清水は余裕そうに言う。
「雄二が負ける前に倒せばいいだけのことだ。」
快は言葉を返す。
「やれるもんならやってみろですの。」
「やってやんよ。」
快はそう言うと音がしたほうに向かった。
そして快がＤクラス軍団に勝利する少し前、Ｄクラスの教室
「平賀、もうすぐＦクラスがここに来るってお前が言ってた時間だな。」
「ああ、もうすぐ、もうすぐだ・・・。これでやつらに復讐できる・・・！」
と何やら不穏な会話が行われていた。
「しかし、よくこんな作戦をとったな。自分を倒しに来るであろうＦクラスを転校生に向かわせたやつら以外をここに集めて迎撃する、こんな作戦、未来予知でもしないと使えないぞ。」
近くにいたＤクラスの生徒がそう言う。確かにそうだ。彼は、雄二たちの作戦をなぜか知っている。
「クク・・・、この力のおかげだ。この力で俺は無敵の力を手に入れた！ハハハハハハ！」
高笑いしている平賀を心配そうに見つめる英語教師の遠藤先生の姿があった。
（彼って、あんな感じだったかしら？普段はもっとおとなしい子なのに・・・。？何かしら、アレ？）
彼女の心配をよそに高笑いしている平賀の手にはＵＳＢメモリーのようなものが握られていた。

俺と囮と増殖と・・・、　（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは！
なんと、今回は2か月前に感動の最終回を迎えた仮面ライダーオーズから、初コンボであるガタキリバコンボを登場させてみました！
次回はDクラス戦争最終決戦スタートです！　お楽しみに！

俺とメモリと変貌と・・・、

「音がしたのは確かこの辺りだった気がするんだがな。」
快はきょろきょろと周りを見渡す。すると一つの教室の近くでフィールドが発生しており、そこの前で腕組みして立っている西村先生を見つける。何やら教室の中の様子を見ているようだ。
「西村先生」
快が声をかけるとチラ、と快の方を見てから突然、トン、と快のことを軽く突き放した。
「おっとっと・・・」
よろけながらその場から一歩後ずさる。
「何するん・・・」
ですか、と言葉を続けようとしたがそれは果たせなかった。突然、目の前のドアが吹っ飛び、大きな音を立てながら壁に何かが激突した。見るとそれは召喚獣である。装備は木刀と改造学ランという、何とも頼りない召喚獣だった。
「！」
快はその召喚獣に見覚えがあった。その召喚獣の召喚者は快がこの世界で初めて友達になった人間、
「明久！」
そう、吉井明久である。快は慌てて教室の中に入る。するとそこには多くの召喚獣が展開し、いたる所で対決していた。見ると、雄二の召喚獣に3体の召喚獣が襲い掛かってきているところを発見した。
『代表が負ければ、戦争には負けるんですの。』
清水の言葉を思い出し、
「サモンッ！変身！」
快は雄二を守ろうと召喚獣を召喚し、変身させる。
《カメンライド　ディケイド！》
マゼンタの装甲に身を包んだ快の召喚獣がライドブッカーソードモ

ードで3体の召喚獣を切り付ける。
「快！来たのか！」
雄二が声をあげる。
「よそ見すんじゃねえ！」
さらに何か言おうとしたが、敵の邪魔が入り快と雄二は召喚獣を背中合わせにし、
「「クッ、まずこの状況を切り抜けるぞ！」」
全く同じことを言った。お互いの点数が表示される。
『英語　Ｄクラス　藤川啓祐　１３２点　　Ｆクラス
坂本雄二　９３点
中曽根大輔　１１９点　ＶＳ
香山晃　１０６点
天野快　１２１点　』
雄二の召喚獣は手負いらしく、点数が少ない。対してＤクラスは全員が3桁以上の点数だった。快は、中曽根、香山の2人を、雄二は藤川の相手をしている。
「雄二、状況は！」
快は戦いながら雄二に戦況を聞く。
「俺としたことが、やつの・・・平賀の罠にはまっちまった。Ｄクラスの連中はお前に仕向けたやつら以外の生徒をここに集めて、待ち伏せしてやがったんだ！」
メリケンサックで敵の双剣を受け止め、頭突きを食らわせながら雄二が答える。
「俺たちもお前以外の全員でここに来たから多少戦力はあったんだが、向こうが強すぎる！いまは、俺
明久、秀吉、島田、姫路しか残ってねえ！Ｄクラスの方は１３人、こいつはちょっと不利だ！」
戦況を話し終え、雄二は藤川の召喚獣の腹部にパンチを入れ、吹っ飛ばす。
「なるほど！大体分かった！」

快は新しいカードを取り出しながら答える。
《カメンライド　ブレイド！》
「ハアッ！」
ブレイドに姿を変えた快の召喚獣はライドブッカーで中曽根の召喚獣を切り付け、後ろにいた香山の召喚獣を蹴り飛ばす。２体の召喚獣がよろけている隙に新しいカードを取り出し、高くジャンプする。
《ファイナルアタックライド　ブブブレイド！》
マッハ、サンダー、キックの３つの力を集中させて放つブレイドの必殺技、『ライトニングソニック』を２体同時にぶつけ、一気に点数を０点にさせる。そして雄二もメリケンサックの連撃で藤川を押し切り、何とか勝利した。
「これで後は１０人！雄二は秀吉たちの援護に！俺は平賀をやる！」
「分かった、だが気をつけろ！何か今日の平賀は様子がおかしい！」
雄二が秀吉たちの援護に向かいながら快に忠告する。
「ああ、分かってる！」
快は短く答え、Ｄクラス代表平賀と対峙した。
「快！」
先に戦っていたのであろう明久が快に声をかける。
「明久、さっき召喚獣が壁に叩き付けられていたが大丈夫か？お前の召喚獣は・・・！」
快が言うと
「大丈夫大丈夫！あんなの慣れてるから全然痛くないよ。」
明久は気丈に答えた。
「お前が転校生とか言うやつか・・・。まあ良い、２人まとめてかかってこい！」
平賀が言うと点数が表示される。
『英語　Ｆクラス　天野快　１２１点
ＶＳ
Ｄクラス代表　平賀源二　１３７点
吉井明久　８７点

』

明久の召喚獣は先程の攻撃で点数が少なくなっている。対する平賀の召喚獣はＲＰＧに出てくる勇者のような武装で構えている。すると

「吉井・・・、お前は楽には殺さない・・・。たっぷりといたぶってやる！」

平賀は制服のポケットからＵＳＢメモリーのようなものを取り出し、スイッチのような突起部分を押した。

「まさかそれは・・・！」

快はそれがなんなのかすぐに理解した。

《プロフェシー！》

メモリーから音声が鳴る。そしてそれを自分の召喚獣に投げた。すると平賀の召喚獣にメモリーが刺さり、勇者のような姿から何か別のものへと変貌していく。体は白を基本に、中央に紫色のラインが走り手にはバスターソードから変形した白い大剣が握られていた。

それは、召喚獣の本来の姿ではない。

「・・・、ドーパント・・・！」

快が小さくつぶやくと完全に平賀の召喚獣はメモリー、ガイアメモリに飲み込まれ、仮面ライダーＷの世界の怪人『ドーパント』に姿を変えた。

俺とメモリと変貌と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは。
今度は召喚獣がドーパントになるという驚きの展開です！少々強引かもしれませんが、これはこれで気に入っています。
次回は対プロフェシードーパント戦を書いていきますので、お楽しみに！

「快、何なのアレ！？向こうの召喚獣が変になっちゃったよ！」
目の前で平賀の召喚獣が変貌し、困惑する明久が快に聞く。
「おいおい、まさかガイアメモリを使ってくるなんて・・・！」
快がそういうと、
「ガイアメモリ？何それ？」
明久がさらに聞き返した。
「ガイアメモリっていうのは・・・」
快は説明しようとする。しかし、どうやって？という疑問が快の頭に浮かびあがった。ここで、
「仮面ライダーWの世界ではびこっている、人を怪人にする道具だ。」
なんて言っても、明久はちんぷんかんぷんだろう。なのでここは、
「あー、アレだ、ほら、えっと、召喚獣の能力を向上させる秘密のレアアイテムだ！」
とそれっぽい感じで答えておいた。
「ちょっと平賀君！召喚獣を改造したら反則ですよ！」
遠藤先生が平賀の行動を注意する。しかし、
「遠藤先生、これは反則ではありません。これは僕の召喚獣の能力ですよ。」
と言い返す平賀。さらに平賀は続ける。
「召喚獣はまだ未知の領域が多いんでしょう？だったらその未知の領域に入ったということなんですよこれは。」
とペラペラと話す。
「え、そ、そうなんですか？・・・、分かりました。そういうことならこのまま続行してください。」
あっさり論破されてしまった遠藤先生は、注意を取り下げた。
「さあ、これで準備は整った。覚悟しろ！吉井明久！」

「僕?!」
姿を変えた平賀の召喚獣、いやプロフェシーのメモリを使ったので
「プロフェシードーパント」と言うべきか、が明久の召喚獣に突進する。
「まずい!」
快は明久の点数が残り少ないことを思い出し、召喚獣を動かして明久の召喚獣の前に出る。
「邪魔をするな!!」
しかし、プロフェシードーパントに裏拳を浴び、そのまま横に殴り飛ばされる。
「ウッ!」
召喚獣が顔面に裏拳を浴びたので、快の頬ににも痛みが走る。そしてドーパントは明久の召喚獣の腹部を蹴り、そのまま吹き飛ばした。
「ウグッ・・・」
明久も快同様、痛みのフィードバックにより、明久は腹に激痛を覚えた。この痛み方だともう0点ではと思い、明久が確認する、しかし
『英語　吉井明久　75点』
まだまだ点数が残っていることに驚き、明久は
「すごい!僕の召喚獣って意外と頑丈?」
と自分が耐えたと思っている。しかし快には分かっていた。
(いや、あいつ、まさか・・・)
「手加減しているんじゃないか、そう思っているんだろ?」
「!」
考えていることを平賀に読まれ、驚く快。
「言ったはずだ。たっぷりいたぶると!そう簡単に死なれては困る!」
殴り、蹴り、切り付け、少しずつ、少しずつ明久の召喚獣を攻撃している平賀のプロフェシードーパントは、明久を倒すのではなく、明久本人をフィードバックの痛みで痛めつけている。すると、

「明久君！」
向こうでの戦闘を終え、こちらに参戦してきた姫路の召喚獣が横から大剣で攻撃しようとする。だが、振り下ろされた大剣はプロフェシードーパントに片手で止められ、そのまま大剣ごと投げ飛ばされた。
『英語　姫路瑞希　２０８点』
姫路の点数が表示される。姫路と平賀の点数さはかなりあるが、それをものともせず姫路を片手であしらう強さを持っているのは、メモリの力であろう。平賀はさらに明久に攻撃しようとする。
「明久はやらせん！」
今度は秀吉が真正面から日本刀で切りかかった。ガキン！秀吉の召喚獣とプロフェシードーパントの刀と剣がぶつかる。ヒュッ！と秀吉が召喚獣に蹴りを入れさせる動作を見せる。だがそれはもう片方の腕で受け止められる。
「邪魔をするなと言っている！！」
ドゴッ！と逆に秀吉の召喚獣が強力な蹴りをくらった。
『英語　木下秀吉　５３点』
秀吉の点数がもうぎりぎりのところまで来ている。それを判断したのか、平賀は剣で秀吉に止めを刺す動作に入った。秀吉の召喚獣の顔面に剣が刺さろうとしている。
「やめろっ！！」
痛みでボロボロの明久の召喚獣が木刀でそれを受け止める。ボキッ！大きな音と共に木刀はへし折れてしまった。構わず平賀は明久と秀吉の召喚獣を串刺しにしようとしている。
《アタックライド　ブラスト！》
後ろから快が攻撃する。しかし平賀のプロフェシードーパントは何も見ず避けた。だがそれは、明久と秀吉の召喚獣を雄二の召喚獣と島田の召喚獣が避けるのには十分な隙だった。
「大丈夫？アキ、木下？」
十分距離をとり、体勢を立て直す。

「ありがとう美波、雄二。助かったよ。」
「うむ、礼を言うぞ二人とも。」
明久と秀吉が島田と雄二に礼を言っている。秀吉はそうでもないが、明久は痛みのフィードバックで、かなり疲弊している。
「しかし、何なんだあいつは、なんでこうも明久を狙っているんだ？明久、何か心当たりは？」
「さあ、僕にもさっぱり分かんないんだよ。僕何したんだろ？」
雄二と明久が話しているとすると快が突然
「なあ、雄二、お前はさっき待ち伏せをされたと言ってたよな。」
と聞いた。
「ああ、そうだが、それがどうしたんだ？」
雄二が聞くと快はニッ、と笑いこう言った。
「やつの倒し方が分かった。」

俺とメモリと怨恨と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは。
今回はドーパントとなった召喚獣との戦闘を書きました。やっぱりバトルって書くのが難しいですね。
次回はDクラスとの戦争が決着します。お楽しみに！

俺と連携と決着と・・・、

「倒し方が分かったって本当？」
明久が快に聞く。快は自信満々で、
「ああ、これはおそらく間違いない。」
こう答えた。
「具体的にはどうするんだ？」
雄二が言う。そして快は自分の考えを話した。
「作戦は・・・、」
「さ、作戦は・・・？」
「作戦は、あいつに自分たちの考えていることをばらすことだ！」
『・・・・・・・え？』
快の作戦を聞いた一同はポカーンとなる。
「えっと・・・、それはつまり・・・？」
「だから、あいつに全員が自分の考えていることを伝えるんだよ。」
「だからどういうことなのじゃ！？」
秀吉がたまらず語気を強める。
「いや、今は何も言わずに俺に従ってくれ。これで勝てるんだ。」
快が落ち着き払った声で頼む。
「どうした？作戦会議は終わったか？」
快達に勝てると思っている平賀が離れたところから聞く。
「うるせー！もうちょっとだから待て！」
快が平賀に向かって言う。
「いいか、ここでグダグダやってても始まらねえ。俺を信じてくれ！」
「・・・、分かった。だが失敗したら承知しねえぞ。」
「仕方ないのう。して、どうすればいいのじゃ？」
雄二と秀吉が言い、ほかのメンバーも快の作戦を聞き入れた。
「ありがとう、じゃあ、どうするか言うぞ。ここで重要なのは一つ

だけ、必ず全員で攻撃すること。」
「それだけか？」
「ああ、それだけだ。」
「よし、お前ら、今は全員の連携が必要だ。呼吸を合わせていけ。」
雄二が指示を出す。
「いや、呼吸を合わせる必要はない。全員自由に攻撃してくれ。」
快がそれを訂正する。
「どうしてだよ！？」
雄二が快に問う。
「やってみれば分かるから！あと、考えを伝えるってのは例えば『俺はお前の腹部を攻撃するぞ。』、っていう考えを相手に伝えるように頭で考えるんだ。」
「なるほど。分かったよ。」
「じゃあ行くぞ！この戦争には絶対勝つんだ！」
ザッ！と快達Ｆクラスのメンバーは平賀の前に出た。
「ふん、ずいぶん長くかかったな。」
平賀が待ちわびたように言う。
「悪いな。お前を倒す方法を伝えるのに時間をくった。」
快が言うと、
「フッ！やれるものならやってみろ！」
と自分の召喚獣・・・プロフェシードーパントを動かし、快達に接近してきた。
「行くぞ！全員、さっき言った通りにやるんだ！」
快が声をあげ、全召喚獣が動き始める。
「えっと、こうでしょうか？」（まず、剣で横に薙ぎ払いますよ。）
「行け！」（横っ腹にメリケンでパンチを叩き込む！）
「こういうことかの？」（日本刀で突きを打つのじゃ。）
「こうかしら？」（後ろに回って、サーベルで背中を突いてやるわ！）
「ハアッ！」（ライドブッカーで切ると見せかけて、蹴りを入れる

！）

「あ！そういえば僕だけ丸腰だ！」（あ！そういえば僕だけ丸腰だ！）

全員が思考することを、平賀に伝えるようにする。すると、

「ウッ！？」

一瞬ドーパントの動きが止まり、平賀が自分の頭を押さえる。動きが止まってしまい、全員の攻撃を、もろに食らった。

「よし！効いた！」

「これならいけるぞ！」

全員がまた先ほどと同様に考えていることを伝えるようにしながら攻撃すると、また平賀が苦しそうに頭を押さえて、召喚獣の動きが止まり攻撃を受けた。

「ウウッ、なんだこの頭痛は・・・？」

平賀が考えているうちに、快は止めに刺しに動いた。カードを取り出させ、装填させる。

《ファイナルアタックライド　ディディディディケイド！》

快の召喚獣と平賀の召喚獣の間にカードが並び、快はその間を潜り抜けさせ、強烈なキックを放った。

『ディメンションキック』を食らった平賀の召喚獣はそのまま点数が０になり、爆発して消滅した。

「そこまで！Ｄクラス代表平賀源二戦死！よって今回の召喚獣戦争の勝者はＦクラス！」

「やった！勝った！僕たちの勝ちだ！」

明久が嬉しそうに言う。

「やったわ！これであのミカン箱ともおさらばできるわ！」

「はい！これで少しは勉強が楽になりますね。」

と姫路と島田も嬉しそうだ。

「・・・さて」

快は、召喚獣が０点になったことで召喚獣から排出され粉々になったメモリを拾う。

「これはどこで手に入れたんだ?答えろ。」
快がすごみながら聞くと平賀は、
「え、えっと、その、あの、い、いきなり空から降ってきて、それから・・・」
となにやらおどおどとしていて先ほどとはまるで別人のようだった。
「なあ、快、どうしてやつに勝つ方法が分かったんだ?」
雄二が聞いた。
「ん、簡単なことだ。雄二、『プロフェシー』の意味は?」
「・・・たしか予言だったか?」
「そう、予言だ。あいつが作戦を先読みして待ち伏せしたのも、攻撃を見ずに避けれたのも、すべては予言があったからだ。」
「どういうことだ?」
「あいつは、俺たちが動く前に予言を受け、行動を先読みしていたんだ。だから俺の銃撃も振り返らないで避けれた。だから俺は考えた。もし、あの予言の力が一度に多くのことを予言したらどうなるかってな。案の定、一度に多くの予言を聞いて、動きが鈍くなってくれて助かったぜ。」
「なるほど。じゃあ、その予言の力を与えたのも、召喚獣が変わったのも・・・」
「そう、こいつの仕業。」
快はメモリの破片を見せる。
「なんなんだこれは?USBメモリーのようだが。」
「まあ、壊れちまったからにはどうしようねえな。」
2人が話していると、
「おーい、雄二、快、そろそろ行くよー。」
と明久に呼ばれた。
「まあでも、今はこの戦争に勝ったことを喜ぼうぜ。」
「ああ、そうだな。」
快と雄二は、Dクラスの教室を出ようとした。そこでピタ、と快が歩みを止める。

「そういえばさ、なんでお前は明久を恨んでたんだ?」
平賀の方を振り向き、問いかける。
「えっと、実は・・・、僕が生まれてはじめた買った、その、本を彼に取られちゃって・・・、
それで、僕、怒って彼を恨んだんだ。」
「明久がそんなひでえことするわけないだろ。」
雄二が言う。確かにそうだ。明久が他人の本を取るとは思えない。
「いや、それが買ったまでは良いんだけど、そのあと段々、恥ずかしくなっちゃって、隠してたんだ。それで取りに戻ったら、吉井君が僕の本を持っていくのを見ちゃったんだ。」
「そこで引き留めればよかっただろ。」
「いやあ、僕、そういうのちょっと苦手で・・・。」
「事情は分かった。俺が言って、明久に返すように説得する。平賀、本の題名を教えてくれ。」
快が平賀に本のタイトルを聞いた。すると、
「え!?いや、そんな、こんな学校の中でそんなこと・・・。」
となにやらモジモジと言うのを躊躇っている。
「大丈夫だから、笑ったりしねえよ。」
快は優しく言った。すると、納得したのか、教えてくれた。
「えっと、確か《Hなお姉さんがピー!してズギューン!してあ・げ・る》だったかな、ってあれ?」
快はもうそこにはいなかった。そして遠くの方で、
『明久ァァァァァァ!!』
『え!?ちょ!?なになになになに!?』
『エロ本だったんかいィィィィィィ!!』ドガシャアッ!!
『ぎゃあああああああ!!』
と怒号と悲鳴が聞こえた。
「やれやれ・・・」
雄二は肩をすくめながらDクラスの教室から出るのであった。

俺と連携と決着と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは。
戦争終結です！バトルを書いていくのはとても難しいというのが骨身にしみましたホント大変だったー！
さて次回は戦争の後に起こる不思議な事件がテーマです。
オリジナルキャラが登場します！ご期待ください！
感想お待ちしております！

俺と規制と代用と・・・、

Dクラスとの戦争が終わり、次の日の朝である。結局あの後、明久は平賀にエロ本を返した。明久は、『あれは取ったんじゃないよ！学校の裏庭の掃除をやってる時に妙に木の根っこが盛り上がってるから少し掘ってみたらあれが出てきたんだって！』と必死に弁解していたが、なにはともあれ、平賀は本が無事戻ってきたので明久のことを許した。だが快はそんなことよりもっと気になることがあった。

（ガイアメモリ・・・、あれもやっぱり亀裂から流れてきたのか？）

そう、あの時平賀が使ったガイアメモリの事である。快はマンティスワームの時と同様に世界と世界の間に生じた亀裂からこの世界に流れてきたのではないかと考えていた。

（前回は一つだけだったが、もし、何個も流れてきたら対処できるだろうか？）

そんなことを考えながら歩いていると、

「快ー、おはよー」

と明久が走ってきた。

「おう明久」

快も挨拶を返す。

「いやあ、昨日は大変だったね。」

明久が昨日の戦争の事を話している。

「ああ、全くだ。初めての戦争で一気に１５人も相手をすることになったり、代表の平賀の召喚獣が、いきなり化け物みたいになったりしてな。」

快も昨日の戦争を振り返る。

「だが、今度の相手はもっと手強いぞ。」

後ろから声がした。振り返るとそこには雄二がいた。

「雄二か、・・・その隣にいるのは？」

快が雄二に聞く。雄二の横にはきれいな長い黒髪の文月学園の制服を着た女子がいた。
「ん、ああ、こいつか。こいつは霧島翔子（きりしましょうこ）、２年Ａクラスに所属していて、俺のことを・・・ああ、いやなんでもねえ。翔子、こいつがさっき話した転校生の天野快だ。」
「よろしく・・・。」
と霧島と呼ばれた女子は、短く快に挨拶する。
「ああ、よろしく。そういえば雄二、さっき言ってた今度の相手ってどういうことだ？」
快が霧島に挨拶してから雄二に聞いた。
「もしかして雄二、ホントにやるの？」
明久が確認をとるように聞く。
「当然だ。取り下げるつもりはない。」
雄二がきっぱりと言い切る。
「やるって何をだ？」
快が聞くと雄二が答えた。
「今度また俺たちは戦争をする。相手は・・・」
「私たち・・・。」
雄二の答えに霧島が割って入った。
「え・・・、ってことは何か？Ａクラスと戦争するのか？その、学年で一番頭がいい奴らと。」
快が言うと、雄二の代わりに明久が答えた。
「雄二が前から考えてたんだけど、Ｄクラスとの戦争に勝ったらＦクラスは今度はＡクラスと戦争して一気に下剋上しちゃおうってことなんだ。」
「いくらなんでもそりゃ無茶じゃないか？」
快が言うと雄二が、
「何言ってんだ。今だからこそだ。いいか、俺たちはＤとの戦争に勝利した、この流れに乗っかって、このままＡを倒しちまおうと考えてたんだ。まあもっともＡとの戦争に負けたとしても、また設備

が元に戻るだけだからな。」
と本当に前々から考えていたであろう考えを話す。そのまま校舎に入り、下駄箱がある場所で霧島とは教室が別の方向なので別れた。
「じゃあ、そういうわけだ。翔子、後で宣戦布告に行く。首洗って待ってろ、って代表に伝えとけ。」
「分かった・・・その代りFクラスが負けたら、雄二・・・、」
「ああ、分かってる。」
と雄二と霧島は別れ際に何か話していたので、何を話していたのか聞こうとしたら、目の前に西村先生が現れた。
「天野、学園長がお前に話があるそうだ。今から学園長室に行け。」
そう快に告げた。
「おい快、お前何やったんだ?転校してきてすぐにババアに呼び出されるなんて。」
雄二が言った。しかし快にも自分が何をしたのかいまいち心当たりがなかった。
「さあ?俺にも分からん。」
快はそう言って学園長室に向かった。
「失礼します。」
快は学園長室の豪奢な扉をノックして開いた。そこには学園長が大きな椅子に座って待っていた。
「なんですか?話って。」
快が聞くと、学園長が答えた。
「お前さんを呼んだのは他でもない、ちょっとお前さんの召喚獣について聞きたいことがあってね。」
ピク、と一瞬快は眉を動かす。バレたか?と思い、少し焦る。
「俺の召喚獣が何か?」
快は気付かれないように平静を装いながら聞いた。
「お前さんの召喚獣、召喚したときは丸腰なのになぜ姿が変わるんだい?昨日はカメラ越しに見せてもらったよ。あれには驚いた。特にお前さんの召喚獣が大量に増えたときなんかはね。」

「それで？何が聞きたいんですか？」
快がさらに聞くと、学園長は手元のパソコンを操作し、ある画面を快に見せた。そこには見知った顔が沢山並べられていた。
「昨日、お前さんが倒したDクラスの生徒だよ。こいつらは全員戦争の後妙なことが起こっている。」
「妙な事？」
「召喚獣のデータがきれいさっぱりなくなってるんだよ。何の痕跡もなくきれいにね。」
「と言うと？」
「調べた結果、こいつらの召喚獣の最後の戦歴はみんなお前さんと戦った時で止まってる。」
「・・・・」
「しかも、その敗北の仕方がおかしい。普通、召喚獣は0点になれば自動的に消えるんだがこの召喚獣たちは見ると爆発して消滅している。」
確かに、キック技で止めを刺した者たちは爆発していた。
「私の見解としては、お前さんの召喚獣には召喚獣を消滅させる何らかの能力があるんだろう。だからこちらとしては、いちいち召喚獣を作り直すのは面倒だ。だからあまりこの力は使わないでおくれ。」
「ちょっと待ってください！そしたら俺はどうやって戦えばいいんですか！？」
たまらず快が学園長に詰め寄る。すると学園長は、
「その点に関しては心配ないよ。中学校で技術を担当している竹崎先生が、召喚獣に武装を装着させる方法を研究していてね。こっちで話はつけてあるから放課後に技術室に向かいな。」
「召喚獣に武装？」
快はうまく想像できなかった。召喚獣が武装するということは、さらに強化されるということなのだろうか？と考えていると、
「ほら、話は済んだよ。とっとと教室に戻んな。」

と学園長が快に部屋から出るように言った。快は学園長室から出るとそのままFクラスの教室へと歩いた。
「・・・ってなことがあったんだよ。」
快はいつものメンバーに学園長とのやり取りを話した。
「なるほどな、いかにもババアらしいな。」
「召喚獣のデータを消すなんてすごいね。」
「天野君の召喚獣が新しくなるってことですか？」
「しかし、変わったとして一体どう変わるのかの。」
「・・・開けてみてからのお楽しみ・・・。」
「やっぱり最初のより強くなるのかしら？」
皆、それぞれ思い思いの言葉を発する。
「さあ？どうなることやら・・・」
そうこうしている間に時間が過ぎ西村先生がＳＨＲにやってきた。
「えー、では朝のホームルームを始める。」
この日の放課後、学園では不思議なことが二つ起こることになるが、誰もそのことを知る由もない。

俺と規制と代用と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは。
快がディケイドの力を封じられました！（おろおろ）
次回はこの日の放課後、快が技術の竹崎先生の所へ行くところから入ります。
お楽しみに！

俺と方便と同好の士と・・・、

「うーん、やっと終わったぁ～・・・！」
快は1日の全ての授業が終わり、大きく伸びをした。今日はバイク投稿申請書を提出した以外に特に変わったことは無かった。そこで快はあることに気付く。
「おい雄二、結局なんで今日は宣戦布告に行かなかったんだ？」
そう、今朝言っていたAクラスへの宣戦布告を雄二は行っていなかった。
「ん、ああ、それがな、お前がババアに呼び出されてた時に翔子からメールが来てな、今日は向こうの代表が不在らしい。」
「なんでだ？」
「風邪じゃ。姉上は昨日風呂上りに大好物の・・・いやいや、本を読んでいてそのまま湯冷めして風邪をひいてしまったんじゃ。」
雄二の代わりに秀吉が答える。
「・・・姉上？」
快は秀吉の言葉を繰り返す。
「ああ、言ってなかったのう。わしの姉上、木下優子（きのしたゆうこ）はAクラスの代表をしておるんじゃ。」
「へえ、秀吉って姉ちゃんいたんだな。」
「まあの。幸い酷くはならなかったんじゃが大事をとって今日は休むことにしたようじゃったぞ。」
「そういうことか。ま、布告は明日にでもするさ。」
「そうか。」
「すまぬの、雄二。」
快が雄二とのやり取りを終え、立ち上がる。
「さてと、じゃあ、行きますか・・・。」
快は今朝言われた通り技術室に向かうべく、歩き出す。
スーッ、パタンと快が教室を出ると、雄二が明久と話をしていた。

「そういえば、快は召喚獣の改造に行くんだったな。」
「改造ということではないと思うけどそうだね。」
「・・・匂うな。」
「え？」
「仮にババアの言った通り、快の召喚獣が召喚獣を消す能力があったとして、それは召喚システムが決めたことで、ババアが後からどうこうできる問題じゃないと思うんだがな。」
「たしかにそうだね。あれ？じゃあなんで快は呼ばれたんだろ？」
「そこが分からないんだ。・・・、ババアが何か企んでるとしか思えないな。」
そんな会話があったとは全く気付かず、快は地図を頼りに技術室に向かい、今、その技術室の扉の前に立っている。
「失礼します。」
快は扉を開けた。中には大きな机が６つ置かれ、壁の周りには工具やら材木やらがきれいに並べられており、その机の１つに作業服を着た中肉中背の男性が座っていた。
「あの、竹崎先生？」
快は声をかける。
「・・・・・・」
しかし、先生は全く微動だにしない。何をしているのかと思い近づくと、どうやらイヤホンをしているようだった。イヤホン越しからは『二人のこの手が真っ赤に燃える！！幸せ掴めと轟き叫ぶ！！ばぁぁぁぁくねつ！！ゴッドフィンガー！！石！！破！！ラァブラブ！！天驚けぇぇぇぇぇん！！』
と言う声が聞こえ、前に置かれているパソコンではゴッドガンダムがデビルガンダムに止めを刺すあのシーンが流れていた。
「・・・、やっぱこの展開１回目はそうでもないけど落ち着いて見るとものすごい突っ込みどころ満載なんだよなぁ・・・石破ラブラブ天驚拳って・・・。」
と何やらぶつぶつと独り言を言っている。快はトントンと先生の肩

を叩いた。
「うわ！びっくりした！」
バッっと快に振り向き、イヤホンを外す。
「なにやってんですか・・・」
快は呆れながら言う。
「あ、ああ！たしか君が学園長から言われた転校生の天野君だね。」
「はい、今日はよろしくお願いします。」
快は挨拶するが内心は
（生徒待ってる間にGガンダムの最終回見るなよ・・・）
という竹崎先生への不満があった。
「ささ、立ち話もあれだから座って座って。」
と快に向かいに座るよう促す。
「あ、じゃあ失礼します。」
快は言われた通り、椅子に座った。
「えーと、何だっけ要件？」
いきなり快は椅子からズルッ！とずっこけた。何を話すのかと思ったら要件を教えてくれって一体どういう神経してるんだと思いながら椅子に座りなおす。
「さっき自分で学園長から話は聞いてるって言ってたでしょうが！！」
「え、ああ！はいはい、思い出した思い出した。召喚獣の装甲装着テストの事だね。」
先生は思い出したように言った。
「・・・え？」
「ん？」
快はポカンとなる。何言ってんだこの人は？と思い、先生に聞いた。
「あの、テストってどーゆーことでしょうか・・・？」
何やら面倒なことが起こりそうだ。
「嘘？」
明久が素っ頓狂な声をあげる。ここは学園長室。明久と雄二が学園

長に事の真意を確かめに来たのである。
「そうだよ。あれはあいつをテストに使用するための方便。本当は別に変身能力も使ってくれて構わないんだけどね。まあ、おかげで何も疑うことなく行ってくれたんだけどね。」
と何も悪びれるそぶりを見せず学園長が答える。
「つまり、快は実験に利用されるためにわざわざ技術室に向かったってことか。」
雄二が言う。
「ちょっと待ってください、がくえ・・・ババア！どうして快がそんな実験をやらされてるんですか？理由を教えてください！」
「学園長と呼べと何回言わせるんだい全く・・・。まあ理由は教えてやらないこともない。あいつには適性があったんだよ。」
「適性？どういうことだ、がくえ・・・ババア。」
「絶対あんた達わざとやってるね・・・。ゴホン、あの天野の召喚獣を詳しく調べたら、以前スタートした召喚獣の追加装甲計画で開発された装甲と適性があることが分かったんだよ。」
「追加装甲計画？」
雄二がオウム返しをする。
「この計画は、その気になれば順位が低いクラスでも簡単に校内のパワーバランスをを変えられるように1人の教員が考えた計画だよ。その追加装甲を使えば、中学1年のFクラスの一番バカな生徒が高校3年のAクラスにも勝てるかもしれなくなるっていう事らしいが1つ欠点がある。」
「欠点？」
今度は明久が返す。
「それは・・・」
「それは・・・？」
「誰も動かせないってことだね。」
ズコォッ！！と明久と雄二は漫画で見るようなずっこけ方をした。
「・・・それじゃ意味がないだろ・・・！」

「まあ、適性があれば動かせるって話なんだけどね。だから最近召喚獣の検査を行ったんだよ。あれは完成した追加装甲を動かせるやつがいないかと思って実施したんだ。」
「それで快がヒットした・・・ってことだな？」
「そういうことだよ。今頃はもう始めてるんじゃないかい？」
「どうしてわざわざそんな回りくどい方法を・・・。普通に頼めばよかったじゃないですか。」
明久が聞くと、
「まあ、自分からFクラスを志願するようなやつだからねえ。何企んでるかわからないじゃないか。」
いたずらっぽく笑ってみせる学園長であった。
『お前の方が何か企んでるだろ・・・。』
2人の考えが一致する明久と雄二であった。
「・・・というわけだよ。」
ニコッと笑って説明を終えた竹崎先生の前には椅子に座り額をおさえる快の姿があった。
「ってことはアレですか？俺はドッキリ仕掛けられた挙句、テストの実験台にさせられるってことですか？」
「んー、そうだね。」
快は心の中で固く誓った。
（今度からババアって呼ぼう！！）
「さて、天野君！君に聞きたいことがある。」
「・・・なんですか？」
「ガンダムは好きかい？」
意外なことを聞かれた。何かもっと別の事を聞こうとしていると思ったのだが全くそうではなかった。
「え？まあ、はい。」
「本当かい！？」
ずいっと快に顔を近づけてきた。
「は、はい。」

「ファーストは見た!?」
「はい・・・。」
「Zは!?」
「はい。」
「ZZは!?」
「はい!」
ものすごく食いついてくるので快も楽しくなり自然と声が大きくなる。
「好きなガンダムは!?」
「ええっと・・・、ウイングゼロです!」
「どっちの!?」
「エ、エンドレスワルツの方です!」
ガシッと肩を掴まれた。
「き・・・君は、君というやつはどこまでタイミングがいいんだ!」
「はい?」
快がそう言うと竹崎先生が立ち上がり、部屋の奥に来るよう促した。
そこには扉があり扉の向こうの、その部屋は薄暗く、部屋の中では大きなパソコンが稼働していた。
「ウイングゼロの設定は知っているかい?」
竹崎先生がパソコンを操作しながら快に聞く。
「えっと、確か最初にして最強のプロトタイプMSでしたっけ?」
快がそう答える。
「正解。この召喚獣追加装甲計画のコンセプトはまず、ひとつのプロトタイプを作りそのデータを取って、そこから派生して様々な装甲を作っていこうってわけなんだ。」
カタカタと、パソコンに目を向けながら言う。
「・・・、そういえばこの計画って先生が作ったんですか?どうしてこんな計画を?」
快が聞くと、パソコンから目をそらさずこう答えた。
「んー、見たかったから・・・、でいいかな?」

「見たかった？」
「うん、召喚獣を使った戦争って言うけど、やっぱり僕としてはガンダム系の装備がもしあったら、そういう武装がいかに能力を発揮するのか見たかったんだ・・・。でも残念ながらそんな武装を持った人は出てこなかった。」
「・・・だからいないのならば作ってしまおうと？」
「そう、この計画も学園長は快く了承してくれたよ。戦争に新しい空気を取り入れようじゃないかってね。おかげでプロトタイプ完成までこぎつけたよ。さ、お話はここまで。じゃあ召喚フィールドを出すから召喚獣を呼び出して。科目は総合点だよ。」
「あ、分かりました。サモン！」
ポンッと幾何学的な紋様からおなじみの丸腰制服召喚獣が現れる。
『総合　Ｆクラス　天野快　３２７点　』
と点数が表示される。Ｄとの戦争を終えたすぐなので点数は少し低い。
「うん、見事なまでに丸腰だね。」
「うっ・・・」
さらっと気にしていたことを言われた。
「じゃあ、追加装甲装着テストを開始するよ。『アームド』の掛け声で召喚獣に装甲を着けて。」
「こうですか？アームド！」
快が掛け声を出す、すると快の召喚獣の服装が制服から何かインナーとパンツのような服装になった。そしてその周りに光の渦が発生し、足から装甲が纏われていく。白を基調にした下半身の装甲に、青を基調とした上半身の装甲が着き、美しい白い４枚の翼が背中から伸びた。手には２丁の長銃身ライフルを持ち、その姿はまるで・・・、
「ウイングゼロじゃないですか・・・これ。」
快は薄々感じていた予感が的中した。
「そう！これが召喚獣追加装甲計画第１号ウイングゼロ！！武装は

ツインバスターライフルと肩のマシンキャノン、ビームサーベルだけだけどその運動性能は他の追随を許さない！なんと飛行もできちゃう！」

「もうウイングゼロって名前も付けちゃうんですね・・・」

熱く語っている先生にツッコミを入れる。

「よし！起動は上手くいった。次は武器のテストだ。ちょっとこの的をそのバスターライフルで打ってみてくれ。」

言って快の前に召喚獣サイズの的が置かれる。

「えっと、アニメみたいにやると、こうかな・・・」

快は召喚獣にバスターライフルを2丁から1丁に接続させる。そして、引き金を引いた。

「・・・っ！！」

ドゴォォッ！とものすごい勢いのエネルギーの奔流が飛び出し、快の腕には重たい衝撃が走る。

「・・・すごい・・・予想以上だ・・・！」

竹崎先生も息を飲む。的は跡形もなく消滅した。

『総合　Fクラス　天野快　２９７点　』

点数が減っている。

「あれ、先生点数が減ってるんですけど」

「ああ、言ってなかったね。この追加装甲の原動力は点数だよ、武器を使うと点数が減少する。ウイングゼロの場合は空を飛ぶのも点数がいるよ。そうしないとフェアじゃないからね。」

先生が説明する。

「そうですか・・・」

「じゃあ、次はビームサーベルの出力調整を・・・」

と快は様々なテストをこなし、日もだいぶ傾いたころにテストはすべて終わった。

「いやあ、本当にありがとう！おかげで今日は良いデータが取れたよ。」

夕日をバックに竹崎先生が快にお礼を言う。

「いえいえ、どういたしまして」
快も正直楽しかったので笑顔で言葉を返す。
「ああ、日もだいぶ落ちちゃったね。今日はもう帰りなさい。」
「え、でもウイングゼロはどうするんですか？」
「それは君にあげよう。何せそれは君にしか動かせないんだ。」
「良いんですか！？」
「ああ、いいとも。ただし！」
と先生は付け足した。
「今度の戦争ではそれを使ってくれ。相手はＡクラスなんだろう？」
ニコっと笑いながら先生は言った。
「え、なんで今度はＡクラスと戦うって知ってるんですか？」
快にはそれが分からなかった。
「そりゃ、職員室では噂になってるよ。ＡクラスがＦクラスに宣戦布告するって。」
快は驚きを隠せなかった。

俺と方便と同好の士と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは。
長文すいませんでした！なんだかどこで区切ったらいいのか分からず、結局。全部入れちゃいました！ホントにすいません！
さて、装甲として登場したウイングガンダムゼロ（ＥＷ版）ですがこいつは今度の戦争で大変重要になってきます。次回は快の帰宅途中に起こったもう一つの不思議な出来事を書いていきます。お楽しみに！今度は長文になりませんように！

俺と出会いと陰謀と・・・、

快は技術室を出て、下駄箱に歩いていた。時刻は午後5時15分である。日も沈みかけ西日が眩しい。

「・・・あ・・・」

快は下駄箱から自分の靴を取り出した瞬間気付く。

「教科書、教室に忘れた。」

快が忘れた教科書は今日出された宿題を解くのに必要なものである。このまま帰ったりなんかして宿題をやらなかったら雄二曰く『宿題が3倍になる』らしい。

「しょうがないか・・・」

快はつぶやき、教室に向かった。

「しかし、Aクラスがこっちに宣戦布告しようとしてるなんて全然想像できなかったぜ。」

独り言を言いながら誰もいない廊下を歩く。

「着いた着いた。」

ガラッっと障子を開ける。するとそこには女子がいた。窓を開け、沈んでいく夕日を眺めている。だが快はその女子はFクラスではないと分かった。Fクラスには女子は姫路、島田の2人しかいないはずだからである。（秀吉はカウントしない。怒られるから。）

「おい・・・」

恐る恐る声をかけると、彼女はこうつぶやいた。

「私は私が誰だかわからないのに、世界は回ってる。」

「え・・・？」

「突然目の前に世界が広がって、今ここに立ってる。」

ヒュウと風が窓から入ってきて、彼女の秀吉より長いが霧島より短いきれいな髪をなびかせる。

「・・・・・。」

快は思わず息を飲んだ。

（きれいだ・・・）
そんなありきたりな感想しかなかったが、それ以外に表す言葉を見つけられなかった。
（いかんいかん、何を考えているんだ俺！）
振り切るように自分のミカン箱の中から教科書を取り出す。
「ねえ、あなたは自分が誰だかわかる？」
唐突に声をかけられ、え、と振り返ろうとした。すると背中に優しく抱きついてきた。
「あなたは・・・わかる？」
抱きついてきた彼女の体が小刻みに震えている。泣いている。すぐにそう分かった。
「・・・わからない。突然この世界に落っこちてきて、自分の記憶もないのに、お前は世界を破壊する者だと言われ、今ここにいるんだ。」
見ず知らずの、初対面の人に、ここまで喋ってしまった。なんだか自分に似ていると思ったのだ。
「私には、帰る場所も、帰りを待ってくれる人もいないの・・・」
「お前、名前は？」
気が付けば快は彼女に名前を聞いてしまっていた。
「・・・ユキ・・・苗字は・・・知らない・・・」
彼女、ユキはそう答えた。
「ユキか。俺は天野、天野快だ。」
「快・・・、覚えた。」
快が振り向くと、ニコと優しく微笑む女の子がいた。
（やばい、どうしようもなく・・・可愛い）
快は一瞬心臓が止まるような感覚を覚えた。スッとユキが快から一歩離れた。
「私、行かなきゃ。私には何かやらなきゃいけないことがあった気がする。」
「え・・・」

快が何か言いかけたが、ユキはそのまま障子に手をかけた。
「じゃあね、快。また会えそうな気がする。」
ユキが出ていき、自分だけになった教室で快はしばらく動くことができなかった。空には今にも沈みそうな夕日が赤く輝いていた。

「・・・博士、ＤＢ－Ｙがターゲットに接触を果たした模様です。」
とある場所、とある時間に大きな画面に映る科学者のような風貌の男が、博士と呼ばれた白髪の老人に報告をしていた。
「そうか、途中トラブルが発生したが、転送は成功したようだな。」
博士と呼ばれた老人はニヤリと口元を歪ませる。
「はい、じきにあの力が発揮されるでしょう。」
「ククク、あの力をもってすればやつもただでは済みまい・・・」
「いよいよですね博士。」
博士の後ろには、マントとローブで体全体を覆っている長身の若い男が立っている。
「ああ、これで我々の宿願は果たされる。フ、フフ、ハハハハハハハ！！」
博士は辺りに響き渡る大きな声で笑った。
「・・・楽しみにしてますよ、ネオ死神博士。」
マントの男の口元が怪しく歪む。
「待っていろ、ディケイドォォォォォォ！！」
ネオ死神博士の叫びは、地底を恐怖で震わせた。

俺と出会いと陰謀と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
えー、前回が大変長文だったため、前回よりも短く仕上げました。
新キャラが続々です！ユキと名乗る少女、ネオ死神博士、謎の男など考えるのはとても大変でした！
次回は快がＦクラスと対決？をします。そう幸せをこよなく嫌う奴らとの死闘が、幕を開けるのです。
次回もお楽しみに！感想待ってます！

俺と彼女と逃避行と・・・、

結局、快が家に帰ってきたのは六時過ぎになってしまった。学校から帰る途中も教室で出会ったユキと言う少女のことで頭がいっぱいになり、宿題をしているときも全く身に入らず、夕飯の支度をしている時も幾度となく指を包丁で切りそうになった。そして夕飯を食べ終わり食器を洗った後、快は風呂に入っている。

「ふう・・・」

体を洗い、湯船に浸かり、今日一日を思い返す。

「竹崎先生からもらったウイングゼロの装甲、明久たちに見せたらどんな顔するかな・・・」

「明日からバイクで登校していいんだよな・・・」

「そういえばＡクラスがＦクラスに宣戦布告するってホントなんだろうか・・・」

といろんなことを考えていたが、

「ユキ・・・」

やはり、ユキのことがどうやっても頭から離れない快である。

「どうしてあんなに喋ってしまったんだ・・・あんな初対面の女の子に・・・」

そう考えていると脳裏に自分でもびっくりする位鮮明に彼女の別れ際に見せた笑顔が映った。

「～～～っ！」

一瞬にして顔が赤くなり、ざばっ！と勢いよく立ち上がって湯船から出る。

「いかんいかん！何を考えているんだ、天野快！何をそんなに彼女を意識しているんだ！」

厳しく自分を戒め、風呂から出ようとしたその時、ツルッ、と足が滑り、

「どわあ！」

思いっきり尻餅をついてしまった。
そして翌日、快はバイク、ディケイダーに乗って学園に向かった。
申請書も出したので、堂々とバイクに乗ることができる。
「お、快じゃねえか」
信号が青に変わるのを待っていると、横から声をかけられた。
「ん？おう、雄二か」
声の主は雄二であった。快のバイクを珍しそうに観察している。
「お前バイクの免許持ってたんだな。中々良いバイクじゃないか」
「そうか？そう言ってもらえるとありがたいな・・・そういえば今日は霧島と一緒じゃないのか？」
今日は雄二の横に霧島がいない。明久の話ではほぼ毎日一緒に登校しているらしいのだが。
「ああ、なんか今朝は秀吉の姉貴に用があるらしくてな」
雄二がそう答える。快はあの事を思い出し、雄二に知らせる。
「そうだ雄二、大変だ！Ａクラスが近々俺たちに宣戦布告するらしい！」
快がそう言うと、信号が青に変わった。そのタイミングは雄二が飲んでいた缶コーヒーを吹き出すのと同じタイミングだった。
「詳しいことは学校に着いたら話す！また後でな！」
「ゲホッ！ゴホッ！エッホ！」
雄二がせき込みながら何か答えていたが、快はもう走り始めていた。
「・・・と言うわけだ」
と快が教室で雄二に竹崎先生から聞いたことを話す。ちなみにディケイダーは快の筆箱の中に入っているらしい。
「なるほどな、さすがはＡクラス、言われなくても自分たちから申し出ようってことか」
雄二は落ち着いてその話を聞いた。
「こっちからなら俺たちの好きなタイミングで宣戦布告できるが、こっちがまだ準備が整っていない間に、潰してしまおうっていうことらしい」

快はそう付け加える。
「・・・どうする雄二、今にもＡクラスがやってきそうだが」
「いや、それはない。授業が開始されてからじゃないと宣戦布告はできない」
「そうか、ならまだ大丈夫だな・・・ってそういう問題じゃないだろ！」
「まあ、ガセネタかも知らねえし、こっちとしてはどうしようもないけどな。それに俺たちにはお前っていう秘密兵器がある」
「秘密兵器って・・・」
快は満更でもない顔をする。
「それに、いつかは通る道だ。それが早いか遅いかだけの違いだ」
雄二はもうＡクラスとの戦争のことを本格的に考えているようだった。

そして朝のＨＲが始まった。
「えー、では朝のＨＲを始める・・・と言いたいところだが、また転校生がこのＦクラスにやってくることになった。」
「・・・・・・」
一瞬の沈黙、そして
『えおおおおおお！！』
一部の『え』と大勢の『うおおおおお！！』が一緒になり一気にＦクラスの教室はヒートアップする。
「先生！その転校生は女子ですか！？」
福村が鉄人に質問する。
「ん？なんかデジャヴ・・・」
快はこの風景をどこかで見たことがあった。自分がここに転校してきたときである。今思うと随分、昔のことに思えてくる。
「・・・女子だ」
鉄人が答えると、
『うおおおおおお！！』
とさらにボルテージが上昇していくＦクラス男子。

「じゃあ、入ってこい」
鉄人が教室に入るよう促している。どんな奴だろうか、と快も少なからず気になっていた。
スーッ、と障子が開く。
「ッ！？」
ガタッ！と快はその転校生を見た瞬間、驚きのあまり筆箱を落としてしまった。
「今日からここで皆さんと一緒に勉強させていただきます。天野ユキといいます」
ペコリ、と行儀よく礼をしているのは快が昨日出会った、謎の少女であった。
『・・・・・』
先程まであんなに騒いでいたFクラス男子が全員黙りこくってしまった。
「か、かわいい・・・」
「タイプだ・・・」
とぽつぽつと、小さな声があがる。
「そうだな、天野の席は・・・」
と鉄人が開いたスペースを探していると、ス、とユキが快の横を指差した。ババッ！と、そこに視線が集まる。
「先生、私、あそこがいいです」
「ん、まあ良いだろう。天野、お前少し右に寄れ」
快は言われるがまま、ミカン箱を右にずらし、自身も右の方に寄った。
「では、特に連絡事項もないのでこれで終わる。今日は一時限目は自習だ。全員今日も勉学に励むように」
そう言って鉄人は教室を後にした。
「・・・・・」
快は何を話したらいいのか分からず、隣に座ったユキに全く話しかけられない。

「あ、あのさ・・・」
意を決して話しかけようと、ユキの方を向いた。すると、
「また、会えたね」
そう言って、ユキは快の頬に顔を近づけた。チュッ、と快は頬に何かやわらかいものが触れる感触がした。それがキスだと気付くには数秒かかった。
『ゆるさぁぁぁぁん!!』
ドスドスドスッ!!と突如カッターやら三角定規やらが飛来してきた。
「うわっ!?」
快はユキを守るように抱きかかえ、その飛来物たちを避けた。
「なにしやがる!?」
快が声を荒げるとFクラスの男子全員（秀吉以外）が謎の覆面を被り、ローブを羽織っていた。
「これより我々FFF団が邪教徒、天野快に天誅をくだす。FFFの名のもとに!!」
リーダー格らしき誰か（声からして須川か）がそう叫ぶと他の連中も
『FFFの名のもとに!!』
と後ろに続いた。
「かかれぇぇぇ!!」
須川らしき誰かがそう言うと、鎌や釘バットなどどこに隠し持っていたのか分からない凶器を手に、一斉に襲い掛かってきた。
「クソッ!逃げるぞ!」
「えっ?あっ!」
快は困惑しているユキを抱きかかえ、教室から脱兎のごとく抜け出した。
「団長!ターゲットが転校生をお姫様抱っこしながら走っています!!」
「逃がすな!!奴を必ず血祭りにあげるんだ!!」
『おおっ!!』

とさらに追いかけてくる殺気が強くなる。
「ああ、もうっ、何でこうなるんだぁぁぁぁぁぁ！！」
快の叫びが朝の学校に木霊し、快の逃走劇がスタートする。

俺と彼女と逃避行と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
今回からキャラのセリフに読点を入れることをやめました。なかなかまだ初心者っぷりが抜けませんが応援のほどよろしくお願いします。
さて、次回は快の逃走の続きを書いていきます。お楽しみに！
感想お待ちしております！

俺と彼女と一喝と・・・、

「どこ行きやがった！」」
「探せー！近くにいるはずだ！」
「「・・・・・」」
ＦＦＦ団のメンバー、と言うよりＦクラスの男子に追われている快は、使われていない教室の隅に行き近くを通りかかった奴等をやり過ごしている。そして近くからいなくなったことを確認して隣にいるもう一人の転校生、ユキに話しかける。
「全く・・・お前が俺にその、なんだ、キ、キスなんかするから朝から大変なことになっちまった」
快がそう言って、ユキに話しかけると、
「ふふ、ビックリした？」
と悪戯っぽく笑って見せた。
「そりゃ驚くわ。大体、なんでお前苗字が俺と同じなんだよ？」
快は率直な疑問をぶつけた。
「だって、昨日はあの後ホテルに泊まったんだもの。苗字がなかったらチェックインの時怪しまれるでしょ？」
と言うのがユキの答えだった。正直あまり答えになってないのでそれについて言おうと思ったが、快はもう一つ気になることがあった。
「そう言えば、昨日、やらなきゃならないことがあるとかなんとか言ってたけど何かできたのか？」
快がそう聞くと、ユキはバツが悪そうに答えた。
「うーん、それが結局分かったのはここに転校することになってることだけだったの。自分のことも名前以外は全然覚えていないの」
そっくりな状況にあるユキに快は親近感を抱いた。思わぬところで自分の仲間を見つけたのだ。快は意を決して聞いてみた。
「なあ、可笑しくても笑わないでくれ。お前は別の世界からやってきたんじゃないのか？」

快がそうユキに問うと、長い沈黙が訪れ、そして、
「ぷっ、あはははははははは！」
とユキが盛大に笑った。
「お、おい！笑うなよ。言ったじゃないか可笑しくても笑うなって」
快が慌ててそう言うとユキは涙を拭い、
「ふふっ、そうね、別の世界ね、なかなか面白い考えだわ」
と微笑みながら答えた。
「・・・っ！」
快はまたユキに見惚れてしまった。ユキは快の一挙手一投足が快をドキドキさせる。不意にユキが手を握ってきた。真っ白できれいな指が快の指に絡まる。
「不思議、快といるとなんだかとっても安心できる・・・」
「えっ・・・」
平静を装っているが快の頭の中はパニック寸前である。
（やばいやばいやばいやばいやばい！！どうすんの！？どうすればいいんだ！？）
心臓がバクバクと音を立て、外に聞こえるんじゃないかと思えるくらいの鼓動が快には聞こえてくる。
快とユキの顔がゆっくりと近づき、もう少しでキスができるほどの距離まで近づくと、
「団長！！さっきこの近くで笑い声とターゲットの声が聞こえました！！」
「全員武器をとれ！奴に神の裁きを下すのだ！！」
先程のユキの笑い声を聞き、ＦＦＦ団が戻ってきた。聞こえる足音の数から相当な数である。
「クソッ！感づかれたか。ユキ！ここを出るぞ！」
「えっ？」
快はユキの手を引き、教室を出た。廊下に出ると、後ろにはおびただしい数のＦＦＦ団の姿があった。
「いたぞ！あそこだ追えー！」

「血祭りじゃあーーーーー！！」
「覚悟しろ幸せ者ォ！」
怒号が飛び、ドドドド！と武器を手に迫ってくるＦＦＦ団から逃げるため、快はユキの手を引いて走る。すると
「逃がさん！」
ヒュッ、と何かカッターらしきものが飛んできた。
「きゃっ！」
小さな悲鳴が上がる。しかしそれは快のものではなかった。快に当たりはしなかったが、飛来したそれはユキの足に掠ったのだ。ユキの足からは少量だが血が出ていた。
「・・・！」
どくん、どくん、と内側から抑えられない感情がこみあげてくるのを快は理解した。
「ユキ、ちょっと待ってろ・・・」
静かにそう告げると快は、ゆらりと自分からＦＦＦ団の前に立ちはだかった。
「・・・れだ・・・」
「ん？」
快が小さくつぶやき、ＦＦＦの１人が聞き返す。
「誰だ・・・」
「え？」
「カッター投げたのは誰だって聞いてんだよ！！」
そう叫び、ビリビリと空気が振動する。ものすごい殺気と怒気を孕みながら、快が一歩前に出る。ジリと一歩後ずさるＦＦＦ団は快が相当怒っていることに気付いた。さらにもう一歩快が前に出ると、
『す、すいませんでしたぁぁぁぁぁぁ！！』
ものすごい数の土下座したＦＦＦ団がそこにはいた。

「はい、これでもう大丈夫ですよ」
ユキの足に絆創膏を貼り、保健室の木島先生が救急箱を片付けなが

ら告げる。
「「ありがとうございました」」
快とユキの2人はお礼を言ってから保健室を出た。
「「・・・・・」」
2人の間に会話はない。保健室から大分離れるとやっと快は口を開いた。
「足、大丈夫か？」
「うん」
「そうか」
これだけの会話をするだけで快は頭の中でプチパニックを起こしているのだった。
「ねえ」
「はい！？」
唐突にユキに話しかけられ思わず声が裏返る。
「ふふっ、そんなに固まらないでよ。えっと、その・・・ありがとう・・・」
最後の方はモゴモゴと何を言ってるのか分からなかった。
「え？」
もう一度聞き直そうとしてもう一度話しかけると、
「な、何でもない！うん、何でもないよ！」
ユキはパタパタと手を振ってそう言った。
「？」
快が首を捻っていると
「ほ、ほら！もう1時限目終わっちゃうよ！早く行かなきゃ！」
タタタ、と小走りで走っていった。
「？、おかしな奴だな」
快も追いかけるように小走りで教室に戻るのだった。

俺と彼女と一喝と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
今回は快がユキとの関係を進展させる回にしてみました。ＦＦＦを一喝で黙らせる快の気迫と叫びはものすごいですね。（他人事かよ！）
さて次回はＡクラスに宣戦布告される回にしたいと思います。それでは次回をお楽しみに！

俺と弁当と代表交代と・・・、

「はい、じゃあ今日はこれで終わりです」
４時限目が終わり、福原先生が教室から出て行きそのまま昼休みに突入する。
「あ～腹減った～」
快は言いながら鞄を漁り、弁当箱を取り出す。
「あ、今日はお弁当なんだね」
明久が快の方を向いて自分の弁当箱を取り出しながら言う。
「まあな、食材も弁当箱もあったことだし作ってみた。変じゃないよな？」
快は弁当箱の蓋を開ける。中には白飯と卵焼きと野菜炒めと鶏の唐揚げが入っていた。
「全然変じゃないよ。快も料理できるんだね」
そう言って明久が自分の弁当箱の蓋を開ける。
「・・・また、それなんだな・・・」
中には、前回と同じように乾麺がそのまま入っていた。
「大丈夫大丈夫、これでも結構美味しいんだよ」
バリボリと乾麺を食べる明久に、
「本当は？」
と聞くと
「・・・辛いです・・・」
と力なく答えた。すると、ぐきゅるるる～、と突然快でも明久でもない腹の音が聞こえた。音のした方に向くとそこには、
「・・・・・」
真っ赤な顔をしてうつむいているユキがいた。
「ユキ、お前昼飯は？」
快が聞くと、
「持ってきてない・・・」

か細い声でユキが答えた。
「しょうがないな、俺のやるよ。ほら」
すると、雄二が弁当箱を差し出してきた。
「「「えっ？」」」
快、明久、ユキの3人の声が重なる。
「どうしたんだよ雄二。全部あげるなんてえらく羽振りがいいな」
快が雄二に聞くと、
「ああ、実はもう1個あるんだよ」
とまた鞄から弁当箱を取り出した。
「なんで2つも持ってきてるんだよ・・・」
「片方はお袋が用意してくれたんだが、もう1個はどうやら翔子が入れたらしい。3時限目の休み時間で鞄の中を見たらいつの間にか入ってた」
「3時限目の休み時間って、全然気が付かなかったぞ」
「食べないと生命の危機に直面するから俺は翔子の方を食う。お前はお袋が作った方を食ってくれ」
そう言って弁当箱を開け、雄二は弁当を食べ始める。
「じゃ、じゃあいただきます」
ユキは雄二から受け取った弁当を食べようと蓋を開けた。
「・・・・・」
なぜか、その弁当にはご飯がなかった。2段重ねのタイプの弁当箱の中味は、上がおかずで下もおかずというとんでもない状況になっていた。
「あの、坂本君・・・ご飯が見当たらないんだけど？」
「なっ！あのお袋はまた・・・！」
「またって前もあったの！？」
「ああ、そんときは上下共に白飯だった。あの時はさすがに目を疑ったぞ」
「お前のお袋さんある意味すげえよ・・・」
結局、ユキは快にご飯を分けてもらい、そのまま談笑しながら昼

休みは続いた。
「は～食った食った」
雄二が食べ終わり、弁当箱を片付ける。すると、
「雄二、どうだった・・・」
「うん？まあ、悪くはなかったな。・・・うわっ！！」
そこにはＡクラスの霧島がいた。
「お前、何しに来たんだよ？」
雄二が聞くと霧島は、
「宣戦布告・・・」
と答えた。ザワッ、と周りの空気が変わる。
「・・・どういうことだ？お前は代表じゃないはずだ。なんでお前が宣戦布告に来る？」
「それは・・・」
雄二が聞き、霧島が何か言おうとして瞬間、ガラッと勢いよく障子が開いた。そこには、秀吉にそっくりの美少女が息を切らして立っていた。
「ハアッ、ハアッ、やっと追いついた・・・代表の足、速すぎるわよ・・・」
「姉上！」
秀吉が声をあげる。
（秀吉が『姉上』って言ったてことは、あいつがＡクラス代表の木下優子か・・・）
快がそう考えていると、
「おう、ちょうどお前と話がしたかったところだ。どういうことか教えてくれ」
雄二が木下に聞いた。
「どうもこうも、そこにいる霧島翔子さんが私たちＡクラスの新代表になったのよ」
「なに！？」
「驚いたわ。朝いきなり何の連絡もなしに来たと思えば、突然代表

を変わってくれってものすごい剣幕で迫られちゃって、何も言えずにOKしちゃったわ」
「翔子ちゃん、一体何のためにそんなことを？」
ユキが霧島に聞くと
「雄二に分からせるため・・・」
と短くそう答えるだけだった。
「とにかく！代表が宣戦布告したの！アンタ達、覚悟しておきなさい！」
「戦争は1週間後・・・」
そう言うと、霧島と木下の2人は教室を出て行った。

「・・・快の言った通りになるとはな」
「ああ、だけど代表が変わるなんてことは想像できなかったけどな」
「どうする雄二、1週間後だって」
「・・・相手はAクラス、油断できない・・・」
「おまけに向こうはかなり気合が入っているようじゃったぞ」
Aクラスの2人がいなくなり、Fクラスの教室ではザワザワと会話が始まっている。5人は戦争に向けてどうするべきか考えていた。
「しかし、雄二は何を霧島と約束したんだ？」
快が聞くと、
「いや、これは誰にも言うなって釘を刺されてるから言えねえ」
雄二は答えなかった。
「とにかく俺たちはAクラスの連中に宣戦布告されたんだ。ついに来るとこまで来た。明久、これは、お前の望みもかかっている。絶対負けられないぞ」
「うん、分かってる」
「望み・・・？」
「ああ、そういえば言ってなかったな。こいつは・・・」
雄二が快に教えようとしたとき
「わーっ！言わないって約束だろ！」

必死のそれを明久が阻止した。
「分かった分かった、快、こいつは姫路のためクラスの設備を良くしようと考えてる」
「あっさり言ったなこの野郎！！」
「ふーん、明久は姫路が好きなのか」
快の目がキラーンと光る。
「ああっ！言わないで、お願いだから言わないで！」
「言わない言わない」
キーンコーンカーンコーン、と予鈴が鳴った。
「さあ、俺たちは今度の戦争は必ず勝たなきゃならねえ。快、お前、装甲の方は？」
「ああ、大方大丈夫だ」
「よし、戦争まであと1週間だ。全員ちゃんと勉強して来いよ」
「「「「おう！」」」」
5人はAクラスとの戦争に向け、闘志を燃やすのであった。

俺と弁当と代表交代と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
えっと、まず言いたいのは翔子がＡクラスの代表になったことですが、これはオリジナリティーを出すためであって間違ったわけではありません。
「あれ？こいつ間違ってんじゃね？」と思った方、その心配には及びません！これからも原作に沿ってオリジナルな作品に仕上げていきますので応援よろしくお願いします！
次回はこの回の放課後、快に起こる出来事を書いてきますのでお楽しみに！

俺とユキとプチデートと・・・、

Aクラスの宣戦布告を受けた日の放課後、快は帰り支度を整え立ち上がった。ふと隣に座っていたユキが視界に入る。
「ん？ユキ、お前は帰らないのか？」
見ると、ユキは帰る準備をしておらず、座布団にポツンと座っているだけであった。
「うん、ホテルを使おうとしてももうお金がないし、転校早々いきなり誰かの家に泊まるのも図々しいだろうし、かと言って帰る家もないし、どうしよう？」
「どうしようって言われてもなあ・・・」
チラ、と会話を横で聞いていた雄二と明久に視線を向ける。しかし2人は
「ええ！？僕の家はダメだよ！まあダメじゃないけど食べるものがないし、その、あの、・・・」
「エロ本があるからだろ」
「雄二！今僕が必死でどうオブラートに包もうか考えてたのになんでストレートに言っちゃうんだよ！・・・そういうわけだからごめんね天野さん」
「俺ん家も駄目だな。と言うか来ない方がいい。来ればまず俺のお袋が絶対何か謎の暗黒物質を台所で調理するし、その後俺は翔子の拷問を受けなきゃならなくなる。お互いのためにもやめておいた方がいいぞ」
とノーの返事をするだけであった。ならばと思い秀吉とムッツリーニにも声をかけるが、
「すまぬ天野。そうしてやりたいのはやまやまなんじゃが、姉上が厄介での。姉上が普通に下着だけで家を歩き回る姿を弟としては誰にも見られたくないんじゃ」
「そうなのか・・・、というかさすがに来客時は服着るだろ」

「そうもいかないんじゃよ快。姉上は小学生の時、家に友達を呼んだ時にの・・・・」
「秀吉ー、お姉ちゃん、秀吉にちょおおおおおおおおっと話があるんだけどなー」
「あ、姉上!?どうしてここに!?」
「良いからいらっしゃい」
「ああ!極まっとる!姉上、腕の掴み方が違う!その関節はそっちに曲がらなっ・・・・・!」
と秀吉はどこかへ連行され、ムッツリーニには、
「なあ、ムッツリーニ、ユキを泊めてやってくんないか?」
と快が聞いた瞬間に、
「・・・女子を泊めるなんて俺の輸血パックが足りなくなってしまう・・・」
となにやら不穏な発言をして断られてしまう。最後の手段で姫路と島田にも声をかけようとしたその時「俺はとっくの昔から適任者がいると思ってたんだがな」
と雄二が快にそう言った。
場所が変わってここは文月学園の校門近くの駐輪場である。ここには自転車やバイクで来る文月学園の生徒が乗り物を授業中は置くことができるようになっている。快以外にも、バイクを使っている生徒は多いらしくスクーターが何台もあった。
「で・・・」
快がヘルメットを被りながら言う。
「なんでこうなるんだよ!?」
そしてそう叫ぶ快の後ろにはユキが予備のヘルメットを被り座っている。快の横には雄二と明久がいるがなぜかニヤニヤと楽しそうな笑みを顔に浮かべている。
「俺は最初からお前が泊めると思ってたんだがな」
「うんうん、僕もそう思ってた」
「お前ら・・・!」

「というか、なんでわざわざ俺たちに聞いて回ったんだ？お前も最初からそのつもりだったんだろ？」
「うぐっ、そ、それは、お、お前らの誰かが泊めてくれたら泊めさせてやろうと思ってだな・・・」
「私も本当は快の家に泊まりたかったから別にこのままで全然かまわないよ」
「ユキ、お前まで・・・」
「でも快、満更でもないって顔してるよ」
最後に明久にそう言われ、
「だーっ、もう！わかったわかったわかりました！俺がユキを俺ん家に泊める！これでいいだろ！」
快も決心がつきエンジンを吹かせる。
「じゃあ、快の家にレッツゴー！」
ユキが楽しそうに言う。
「さて、じゃあ俺たちも帰るか」
「そうだね。じゃあね快」
「ああ、じゃあな」
そう言って快とユキ、明久と雄二に分かれて帰路につくのだった。

「じゃあユキ、俺は今日の飯の材料買わなきゃいけねえからスーパー寄るぞ」
「うんっ！」
快はユキをバイクの後ろに乗せてスーパーへ向かった。始終ユキは楽しそうだった。
「今日の夕飯何かリクエストあるか？あったらそれにするけど」
スーパーに着き、買い物籠を手にスーパーを回っていく。
「うーん、じゃあハンバーグ！」
ユキは声を弾ませながら答えた。
「あいよ」
快もユキと一緒に買い物をするのは楽しかった。ディケイドとして

怪人やらワームやらと戦うよりずっと楽しいと心から思えた。
「よし、一通り材料は買えたな。ユキ帰るぞー、ってあれ・・・？」
ハンバーグに必要な材料を買い終え、ユキに声をかけたがそこにユキはいなかった。
「どこ行ったんだあいつ・・・？」
捜していると見つけた。ショーケースを食い入るように見つめているユキを見つけた。
「ユキ」
「きゃあ！なんだ快か。びっくりさせないでよもう！」
「悪い悪い。買い物終わったぜ」
「あ、うん、分かった」
少し名残惜しそうにユキはもう一度ショーケースに視線を戻している。そしておもむろに財布を取り出し中を見て、ガクーッとうなだれた。
「足りない・・・」
「なんだ、欲しいのか？この雪の結晶みたいな形のストラップ」
聞くと、
「うん・・・」
とうなずいた。
「７８０円か・・・いいぜ。これぐらいなら買ってやるよ」
「ホント！？ありがとう快！すっごくうれしいよ！」
買ってユキにそれを渡すと満面の笑顔でユキは自分の携帯にそのストラップを付けた。
「はい、快も付けて付けて！」
２つ付いていたうちの１つを快に渡した。快も言われた通りストラップを携帯に付けた。
「えへへ、お揃いだね」
「お、おう」
ユキにそう言われ、快は照れてしまった。
「じゃ、じゃあ帰るか」

照れ隠しにそう言って快は歩き出した。
「うん！」
ユキはそう言って快の腕に自分の腕を絡ませた。
「デートみたいでしょ？」
「！」
ボッ！と顔が赤くなるのを自覚しながら快は悟られまいと平静を装いながらスーパーを後にするのだった。
（このまま今日は何もなく過ごせるな）
快はまだこの時まではそう信じて疑わなかった。

俺とユキとプチデートと・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
今回は自分でもちょっと照れるぐらいユキと快の交流を書きました。
読み返してみるとものすごく照れますね。
次回はこの日の夜に快とユキの間に起こる出来事を書きたいと思っています。
お楽しみに！感想お待ちしております！

俺とユキとお泊り準備と・・・、

「着いたぞ。ここが俺ん家だ」
「おお～」
快とユキの2人は無事に快の家まで着いた。ユキは興味深そうに家を見渡している。快がディケイダーを小さくしてポケットに入れるところを見つけると、
「え・・・」
と驚いていた。
「ん？こんなの当たり前だろ、とりあえず上がってくれよ」
快が怪しまれないようそれが当然のように振る舞いながら玄関の鍵を開け、ユキに家に上がるよう促す。
「お邪魔しま～す！」
軽やかな足取りでユキは家の中に入った。
「わあ～、ちゃんと掃除されてる～！」
「いや、驚くトコロそこかよ・・・」
そんなユキの反応を買い物袋をテーブルに置きながら眺めていると、ぐう～・・・と腹の音が鳴った。それは快ではなくユキのものだった。
「あ、あははは・・・」
ユキが気まずそうに笑う。チラと時計を見ると時刻は5時37分を示していた。
「今から作るからちょっと待ってろ」
快は一度2階へあがり、制服から私服に着替えて1階に戻りキッチンでエプロンをつけ、手を洗う。
「・・・・・」
何やらものすごく視線を感じる快。視線のする方へ向くと、ユキがソファ越しに準備をしている快を見つめている。
「テレビでも見て待っててくれよ」

と快は苦笑しながら玉ねぎのみじん切りを始めるのだった。

「ユキ、できたぞ」
「待ってましたぁ！」
快がユキを呼ぶとユキはピョンとソファから飛び上がり、ものすごい速さでテーブルに向かう。快が、向かいの席に着くのを待ってから、
「じゃあ、いただきまーす！」
とハンバーグを一口食べた。すると、ピタとユキの動きが一瞬止まる。
「どうした？不味かったか？」
快が聞くと、
「ううん、とっても美味しすぎてビックリしちゃった。すごく美味しいよこのハンバーグ！」
と笑顔で返してきた。
「そ、そうか。ならいいんだが」
と料理を褒められ快は照れた。そしてしばらく2人はおしゃべりしながら夕飯の時間を過ごした。

「美味しかった～。快、ごちそうさま」
「ん、おそまつさんでした」
夕食を食べ終わり快はカチャカチャと食事の後片付けを始めた。すると、
「あ、私も手伝うよ」
とユキも皿洗いを始めた。
「一宿一飯の恩はちゃんと返さないとね」
と得意げに皿を洗っている。
「あ」
快はあることに気付いた。
「どうしたの？」

「お前の寝るとき用の服どうしようか決めてなかった」
「あ」
ユキも気が付いたようだった。
「大丈夫だよ、このまま寝るよ」
「いや、女の子を1人、学生服のまま夜寝させるなんて男がすたる」
「いや、そこまで考えなくてもいいよ」
「皿洗いが終わったら決めよう」
「・・・そうね」
このやり取りの最中も2人は手を休めなかったので皿洗いはすぐに終わった。
「じゃあ、2階に何かないか見てくる」
快は2階にあがった。2階には快の部屋しかない、はずだった。
「・・・・・なんでだ」
なぜか空き部屋だったはずの一室に寝具と机が置いてあった。
「毎度毎度、ホント便利だ・・・がまさかここまでとは」
まさかと思いクローゼットを開けてみると、そこには女子用の服やらYシャツやらがきちんとたたまれていた。そこにはパジャマもあった。ちらと目を向けると視線の先には
「・・・・・」
女性用下着もきれいにたたまれて置いてあった。それらを持って1階に降りると、ユキがテレビを見ながら待っていた。
「どうだった?」
「あった」
「へ?」
「ほら、これパジャマ。あとワイシャツもあったからそれを明日着ればいい。あと・・・」
快は顔を逸らしながらユキに下着も渡す。
「・・・、快って、1人暮らしだよね?」
「そんな目で見るな!誤解するな!」
「そうだよね、男の子が1人暮らししてればそういうのもあるよね」

言うユキの目にはなぜか輝きはない。
「だから違うって言ってるだろ！」
必死に誤解を解こうと慌てふためいてると、
「ぷっ、ふふ、あははははは！そんなに慌てちゃって、可愛いんだから！」
爆笑しながらぺしぺしと背中を叩いてきた。からかわれた、そう理解した瞬間、快は赤面した。
「ほ、ほら！風呂も湧いてるから、さっさと入ってこい！」
照れ隠しにちょっと強めにそう言うと、くすくす笑いながら
「はーい」
と答えてユキは風呂場へ向かった。
「全く・・・」
ユキに振り回された快は台所で水を一杯飲んで気分を落ち着かせた。
（まあ、悪い気はしなかったな・・・）
そう思い、快はソファに座りテレビを見るのだった。

俺とユキとお泊り準備と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
今回は、ユキが快の家にやってきて、一緒にご飯を食べたり、おしゃべりしたり、皿を洗ったりして2人が親しくなっていく回にしてみました。ですがまだこの日の夜は終わりません。次回はユキに異変が起きます。快はユキを救うことができるのか！次回もお楽しみに！

俺と追跡と告白と・・・、

「ハァッ、ハァッ、ハァッ、ハァッ・・・」
快は今、真夜中にとある建物の中の階段を必死に駆け上がっている。
（クソッ、何がどうなってんだ・・・！）
あまり状況が飲み込めないがひたすら階段を上り続ける。階段を上りきると、扉が1つあった。勢いよくそれを開くと、そこはこの建物の屋上だった。夜の空にはきれいな満月が光を放っている。そして快は、満月を背にこちらを見ている人物に目を向け、名前を呼ぶ。
「・・・・ユキ」

時間はさかのぼってユキが快の家に泊まることになった日の夜10時30分ごろになる。快とユキは、すっかり寝むくなり、二階に上がった。
「じゃあ、この部屋は誰も使ってないからここで寝てくれ。ちゃんとベッドもある」
「ふぁい」
ユキが欠伸交じりに返事をする。相当眠いようだった。
「じゃあ、おやすみ」
「おやすみなふぁい・・・」
2人は互いの部屋に入って就寝した。
快はベッドに入るとすぐに眠れた。しかしその眠りはすぐに妨げられた。何者かが快の体をゆすったからだ。
「・・・ド」
「・・・イド」
「うーん、あと5時間・・・」
快はまだ寝ぼけた状態であった。
「起きてください、ディケイド」
「げふっ」

腹部を少し小突かれ、快は目を開けるとそこには見知った顔があった。

「・・・！なんでお前がここにいるんだよ」

そこに立っていたのは紅渡だった。

「ディケイド、時間がありませんから単刀直入に言います。彼女、天野ユキには気を付けてください」

「・・・・何？」

一瞬快は渡が何を言ってるのか分からなかった。

「彼女は天野ユキというのとは別にもう一つ呼び名があります。『ＤＢ－Ｙ』、それが彼女のもう一つの名前です」

「ちょっと待ってくれ。いきなり現れてユキに気を付けろって言ってそのうえユキのもう一つの名前だと？一体何がどうなってる？」

快は混乱していた。渡はさらに説明を加える。

「ＤＢとはディケイドブレイカーの略称で、Ｙはその番号です。２５番目のあなたを倒すために作られた『ハイパーショッカー』の改造人間です」

「『ハイパーショッカー』？」

「ネオ死神博士が率いるスーパーショッカーの生まれ変わりです。すべての世界の悪を束ねています。彼女はもとはただの人間だったんですがスーパーショッカーにさらわれ、改造手術と洗脳手術を施されてこの世界にあなたを追って転送されてきたんです」

「転送だと？世界の亀裂を利用してここに飛ばされてきたってことか？」

「その通りです。ですから・・・」

と渡が次の言葉を発しようとしたその時、ビュオオオ！！ものすごい音がユキのいる部屋から聞こえた。

「！？」

急いで部屋にいき、ドアを開けると、窓が開け放たれそこから何かが飛び立っていった。

「ディケイド、話は後です！彼女はあなたをこの世界もろとも消滅

させようとしています！」
「なんだと！？」
「急いで彼女を追って止めないとこの世界は消えてしまいます！」
「クッ・・・！」
快は急いで着替えて外に出てバイクに乗った。
「お前はどうするんだ？」
快が渡に聞くと、
「僕も一緒に戦いたいのですが、この世界では何もできません。申し訳ありませんがあなたにすべてを託すしかありません」
と申し訳なさそうに言った。
「んなこったろうと思ったよ！」
快は悪態をつきバイクを発進させた。夜の道路は車が少なく、とても走りやすかった。
（一体どこへ向かってるんだ？）
はるか前方にいるユキと思える何かは、夜の空を高速で飛んでいた。すると突然それは右へカーブし、さらにスピードを上げた。一体何があるのかと思い顔を右へ向けると、すぐにそれがどこへ向かっているのか分かった。
「文月学園！？」
快の視線の先には快やその友人が通っている文月学園があった。案の定それは文月学園の屋上に降り立った。快も急いで校舎に入り、近くにあった階段を駆け上がる。そして屋上にたどり着いた。夜空にはきれいな満月が光を放っている。快は満月を背にこちらを見ている人と思しき何かに声をかける。
「・・・・ユキ」
快が声をかけるとユキは快に背を向けて話し始めた。
「快、あなたと初めて会ったのもこんな感じだったよね。でもあれは夕日だったけ」
「・・・」
快は黙ったまま聞いている。

「あのね・・・あの時私は自分のことは名前しかわからないって言ったけど、本当は自分のことは良く知ってたんだよ」
「ああ、お前が改造人間だってのは聞いた。洗脳もされてて俺を倒しに来たんだってのもな」
「そう・・・全部わかってるんだ・・・。でも、快がこの世界に来てくれたおかげで、私は洗脳が解けて私を取り戻せたの。ありがとうね。だから・・・」
バッと振り返り、腕を大きく横に広げる。
「だから私を止めて!自分ではどうすることもできない!私がこの世界を消す前にあなたが・・・!」
目を涙で潤ませながら、快に訴えかける。しかし快は、
「ふざけんなぁ!!」
それを一蹴した。ビクッとユキが叫びに驚いて身を縮める。
「どうして!?私はあなたをこの世界ごと消滅させようとしてるのよ!?」
「それがどうした!自分で言うのもあれだが俺は結構欲深でな、お前も助けて、世界も救ってやる!」
「だからどうして!?私は私に優しくしてくれたあなたを消そうとしてる。そんな私をなんで・・・」
「好きだからだよ!!」
快は叫んだ。気が付いた時には頭の中で思っていたことが口に出ていた。
「好きなんだよ!お前も、この世界も!それ以外に理由がいるか!?」
「・・・・・」
静寂が二人の間を包む。
「・・・ふ、ふふ、あはははは!」
ユキが笑い始めた。涙を流しながら笑い始めた。
「私が好きでこの世界も好きだからこの世界を救うか。快らしいわね。でも・・・」

ユキが笑顔を消す。
「もう・・・遅いの・・・」
ユキの体が変わっていく。灰色の装甲が足からユキの体を包んでいく。
「快・・・私のことが好きなら・・・私を・・・止め・・・て」
言い終わるとユキの体は灰色の装甲に包まれた。その姿はまさしく世界を消滅させんとする、悪魔の姿だった。
「・・・灰色のディケイドか。ハイパーショッカーも趣味が悪いな」
快はベルトを腰に巻きながらそうつぶやく。
『私を・・・止め・・・て』
ユキの言葉を胸に刻む。
「分かってる。今、助けてやるからな」
快は1枚のカードを取り出しバックルに装填する。
「変身！」
《カメンライド　ディケイド！》
快の姿がディケイドに変わる。今、ディケイド対ディケイドの戦いが始まる。

俺と追跡と告白と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
今回は快対ユキの始まりを書いてみました。読み返してみるとなんだか最終決戦みたいなことになってます。でもまだまだ書きたいことが沢山あるのでこれからも頑張っていきますので応援よろしくお願いします！
次回は快対ユキが爆熱！じゃなかった白熱します！お楽しみに！

俺と崩壊と一回きりの最強と・・・、

「うおおお！」
「・・・・・」
ガキン！とライドブッカーソードモードがぶつかり合う。しかしパワーの差が大きく、快は次第に押され始め、切られてしまう。
「グ・・・ッ、これなら！」
《アタックライド　ブラスト！》
快は後ろに跳び、ブラストで牽制しようとする。発射された光の弾丸はすべて命中したが、ユキはそれを気にすることなく快に接近し腹部に重いパンチを浴びせる。
「ガハッ・・・！」
パンチを食らい、吹っ飛ばされ手すりに体をぶつけたことにより、呼吸ができなくなる。
「・・・・・」
ユキはまるで機械のように声もなくゆっくりと快に近づいてくる。
「負けるかよっ」
快は一枚のカードをバックルに装填する。
《カメンライド　カブト！》
快はディケイドからカブトへとカメンライドする。そしてもう一枚カードを取り出し、装填する。
《アタックライド　クロックアップ！》
快は人間には不可視の超高速移動『クロックアップ』でユキに攻撃を仕掛ける。高速で接近し、パンチとキックを浴びせ続ける。確実にダメージは与えられてるようだったが、突然パンチが止められた。
「！？」
驚く快に、ユキは蹴りを入れた。クロックアップをしているはずならばこの動作は止まって見えるはずである。だが、それを快は避けることができなかった。

（まさか・・・！？）
快はもしやと思い、ライドブッカーで切りかかる。しかしそれはひょいと避けられた。
「あっちもクロックアップ！？」
そう、向こうもクロックアップを発動し、快に追いついたのだ。
「どこまで強いんだよ！」
攻撃を仕掛けようとするユキが、ライドブッカーを手に切りかかる。
《アタックライド　プットオン！》
快は両腕にマスクドフォームのアーマーを装備させ、片方で受け止め、片方で攻撃した。２人の攻撃が、同時にお互いに入った。２人とも盛大に吹っ飛び、快はカブトへのカメンライドが解除された。
「・・・・・」
仰向けに倒れていたユキはムクと起き上った。すると、顔面の装甲の一部が砕けそこからはユキの右目が見えた。目は閉じていた。どうやらユキの自我はないらしく、灰色のディケイドの装甲の胸の部分にある、紫色のクリスタルのようなものが戦闘開始から点滅していたのでおそらくそれがユキの体を動かしているのだろう。
「どうする、このままじゃ勝てそうにないが・・・」
快はどうやってユキ、もとい、灰色のディケイドを倒すか考えた。しかし考えがまとまる前に、向こうが先に動いた。
「これより、ワールドクラッシュを発動します。これより、ワールドクラッシュを発動します。」
突然ユキの声でそう言った後、ユキは禍々しい黒いオーラに包まれ、空中に浮かんだ。そして十字架にかけられているようなポーズをとった。すると、胸のクリスタルが光を強め、その光がユキの上に収束し、大きな球体になっていく。
「何だ！？」
快がその現象を見ていると、息を切らしながら渡が屋上に現れた。
「ディケイド、ついに世界の崩落が開始してしまいました！」
快は今まで見たことがない彼の焦りの表情を見て事態の深刻さを確

認する。
「ああ、見ればわかる。どうやって止める?」
快が聞くと、渡は
「一つだけ方法があります。これを使ってください」
渡は快に、スマートフォンのような端末を渡した。
「これは?」
「ケータッチと言って、ディケイドの力をさらに向上させる道具です」
見ると、ケータッチの画面にはクウガからディケイドまでのライダーの紋章が浮かび上がっていた。快はそれをクウガから順番にキバまで押した。
《クウガ!アギト!リュウキ!ファイズ!ブレイド!ヒビキ!カブト!デンオー!キバ!》
するとディケイドの紋章が点滅した。それを押すと
《ファイナルカメンライド　ディケイド!》
ライドブッカーからクウガからキバまでのカードが飛び出し胴の部分に着き、額にディケイドのカードが着き、マゼンタのカラーから、シルバーを基調とした装甲に変わる。バックルが外れて腰の横に移動し、ケータッチをバックルがあったところに装着する。
「・・・これがディケイドの真の力、コンプリートフォームです」
「コンプリートフォーム・・・」
オウム返しにそう言って手を握り締める。これならやれる、そう思えるほど力が湧き上がってきた。
「その力で、世界の崩落を止めてください。あのクリスタルを砕くのです」
渡は快にそう言った。
「ああ、だけどユキは大丈夫なのか?」
「それは私にもわかりませんが、あのクリスタルが彼女を操っているならそれを壊せば・・・」
次の言葉を言おうとすると、空の一部が突然割れ、その向こう側に

宇宙が見える。
「とにかくやるしかないってことか・・・！行くぜ！」
快はケータッチのクウガからキバまでの全ての紋章を押し『C』を押した。
《アルティメット　シャイニング　サバイブ　ブラスター　キング　アームド　ハイパー　ライナー　エンペラー》
快の周囲に最強フォームのライダーたちが現れる。
「ディケイド、これを」
渡が一枚のカードを快に渡した。
快はそれをドライバーに装填する。
《ファイナルアタックライド　オオオオールライダー！》
全てのライダーが自身の必殺技の構えを取る。
カブトハイパーフォームの『マキシマムハイパーサイクロン』が、ファイズブラスターフォームの『フォトンバスター』と混ざり合い、クリスタルに直撃する。
ブレイドキングフォームの『ロイヤルストレートフラッシュ』が、アームド響鬼の『鬼神覚声』とライナーフォームの『電車切り』と共にクリスタルにヒビを入れた。
そして、クウガアルティメットフォームとアギトシャイニングフォーム、龍騎サバイブとキバエンペラーフォームのライダーキックがクリスタルのヒビをさらに大きくし、ユキの装甲にも亀裂が走る。
「うおおおおおお！」
そして快の渾身の『ディメンションキック』がクリスタルとユキの装甲を完全に破壊した。
巨大な光の球体は消え、ユキがゆっくりと下降してくる。それを受け止め、抱きかかえた。世界の崩壊が止まった。
「なんとか・・・止まったな・・・」
快が変身を解くと、ケータッチが粉々に砕け散った。
「え！？」
驚く快を尻目に、渡は眉一つ動かさずこう言った。

「実は、このケータッチはもう限界を迎えていたんです。あと1回の使用で壊れてしまう程でした」
「そ、そうなのか・・・。良かった、俺が壊したんじゃないんだな」
快はほっと安堵する。
「ええ、それにあなたはこの世界を救った。最期に世界を守るために使われてこれも本望でしょう」
「なあ」
「はい？」
「どうしてそれを持ってきてくれたんだ？」
快が聞くと、渡はこう答えた。
「私もあなたにこの世界を守れと言った手前、何かしないわけにはいきませんから」
「そうか・・・その、なんだ、ありがとな」
快は照れくさそうに礼を言った。
「当然のことをやったまでですよ。では私はこれで」
渡の前に灰色のオーロラが出現し、渡は立ち去ろうとして、足を止める。
「あ、あの時の愛の叫び、中々決まってましたよ」
そう言って、今度こそたちオーロラの向こうへ消えて行った。
「・・・・」
一瞬沈黙し、ユキの顔を見てから、快はボンッ！と顔を赤くした。
ユキはどうやら眠っているらしく、すやすやと寝息をたてていた。
快はユキを背負い、夜の校舎を後にした。

俺と崩壊と一回きりの最強と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
何とコンプリートフォームが登場です！しかーし！1回きりの登場でした短ッ！
今回はちょっと長めに書きました。いかがでしたでしょうか。
次回からはAクラスとの対決前を書いてきたいと思いますので次回もお楽しみに！

俺と返事と2人の秘密と・・・、

紅渡は真っ白な空間を歩いていた。ここは灰色のオーロラの向こう側である。彼は迷うことなく進んでいく。すると、彼の前に無数の本棚が現れた。

「やれやれ、あれほど取扱いには注意してくれと言ったのにやっぱり壊したね」

その本棚の向こうからため息交じりに1人の青年が現れた。

「あれは仕方がありません。ケータッチは限界を迎えていました」

渡はそう静かに言い返した。渡の手には大きめの袋が1つ持たれている。

「では、新しいケータッチの製作をお願いします。設計図と材料はこちらで揃えました」

渡は青年にその袋を渡した。青年はそれを受け取りながら言った。

「いきなりこの『地球の本棚』にやってきて、ヒビだらけのあれを自分が次に来るまで保管しておいてほしいと言ってそのままどこかへ消えて、今度来てみればＤＢ－Ｙとハイパーショッカー、それとユキ、というキーワードで検索をしてくれだなんて、紅渡・・・君は一体何者だい？」

渡は快にケータッチを渡したときに息を切らしていたのは階段を上って来たせいではなく、一度ここで検索の結果を聞いて、ケータッチを受け取り、すぐに走って快のところに向かったからである。オーロラを操作して、屋上に入る扉の前に移動していたのだ。

「誰でもありませんよ。ただ・・・もう二度と彼を、ディケイドを失いたくないと願うライダーの力を失った哀れな1人の人間です」

渡はフッと自嘲的な笑みを浮かべた。

「前に来た時と言っていることが同じだよ」

と青年が返すと、

「おーいフィリップ、居るか？照井があの事件に関して検索してほ

しいんだとよ」
と誰かの声が地球の本棚に響いた。
「あ、翔太郎が呼んでる。じゃあ僕は行くよ。一応この依頼は受けておくよ。ショッカーの技術・・・実に興味深いね。ゾクゾクするよ」
フィリップと呼ばれた青年はそう言うと羽織っていた上着のポケットに袋を入れた。
「では、頼みましたよ。」
渡が踵を返し、地球の本棚から出ようとすると、
「そうだ、1つだけ聞かせて欲しい。新しいディケイドはどんな人物だい？」
フィリップが渡に問いかけた。渡は背を向けたまま答えた。
「面白い人ですよ。自分を世界ごと消し去ろうとした女性に告白をするような、そんな人です」
渡が言うと、
「フフ、興味深いね」
と言ってフィリップは地球の本棚から出て行った。渡もすぐにそこを出ていき、また真っ白な空間を歩き始めた。彼の向かっている方向には、ステンドグラスでできた扉があった。

「ヘックシ！」
快はくしゃみをした。
「・・・誰か噂でもしてんのかな？」
そんなことを言いながら快はユキを背負って夜道を歩いていた。バイクで帰ることもできるのだが、それでは眠っているユキが危ないので、ユキが目を覚ますまで徒歩で帰ることにした。
「・・・うにゅ・・・」
ユキが背中でもぞもぞと動く。起きたかと思ったがまたすぐにすうすうと寝息が聞こえた。
「・・・・・」

快はユキに言った言葉を思い出していた。あんなことを会って2日目に言うだなんてばかばかしいとは自分でも思えた。だが、快のあの言葉に嘘は無い。ユキには快が惹かれる何かがあったのだ。快に分かったのは、一目惚れは本当にある。ということだった。

「雄二が言った通り明久のバカが移ったかな」

快はフと笑った。

「ＤＢ－Ｙ・・・ねぇ」

快はもう1つ気になることがあった。ハイパーショッカーが快を倒すために改造した人間兵器の２５番目がユキだと渡は言ったがならばそれ以前の、言うなれば『ＤＢ－Ａ』とかはどうしたのかと。もしやそれ以前の者はすべて失敗作に終わったのか、ならばそれらはどうなった。そんなことを考えていると家の近くの公園まで着いた。ユキはまったく起きる気配がない。時計で時間を確認すると3時４2分を指していた。家にはあと1時間もあれば着くだろう、そう思いユキを背負いながらまた歩き出す。

「・・・ふに・・・」

またユキが動いた。快はハイパーショッカーが許せなかった。ユキのような望まれない改造を受けた人があと何人いるんだろうか、そう考えると快の心には沸々と怒りの炎が燃えた。

「またお前みたいなやつが来たら、どうすればいいんだろうな・・・」

快はユキに話しかけてみる。返事はないと思っていたが

「・・・大丈夫・・・だよ」

と返事が返ってきた。歩みを止めユキを見ると、やはりすうすうと寝息をたてるだけだった。

「そっか・・・そうだよな」

快はまた歩き出した。西の夜空に浮かぶ満月が2人をやさしく照らしていた。

「うぅん・・・」

ユキは朝日を浴びて目を覚ました。重い瞼を薄く開き、ここがどこなのか確認する。すぐに分かった。快の家の自分が割り当てられた部屋のベッドであった。

「！！」

ガバッと起き上がり、胸に手を当てる。無い、無くなっている。自分の中に重く沈殿していたあの感覚が無くなっていた。ユキはベッドから降りて1階のリビングへ向かった。

「ん、おはよう」

エプロン姿の快がテキパキと弁当を作っている。

「お・・・おはよう」

ユキも挨拶を返した。

「もうちょっと寝ててもよかったんだがな」

快がそう言いながら弁当を作る。

「・・・・・・」

沈黙が続いた。

「あ、あの・・・えっと・・・その・・・」

ユキはもごもごと口篭っていると、

「昨日のことだけど、気にしなくていいぞ」

快が口を開いた。

「え？」

「世界も救えて、お前も救えた。これで良いじゃねえか。ミッションコンプリートだ」

快は弁当を包んでいる。ユキはキョトンとなってから

「そ、そっちじゃなくて・・・だから・・・」

と顔を赤くしながら言うと

「あー、あっちの方か。それは・・・アレだ、まだお前の返事を聞いてない」

快がテーブルの上に2つの弁当箱を置く。

「どう・・・なんだ？」

快がユキの目をじっと見据える。

「私のことが、好き？」
ユキは快に確認するように聞いた。
「ああ」
快も答える。
「世界中の誰よりも？」
「当然」
「あなたを・・・この世界ごと消そうとした私を？」
「全然気にしない」
「私のこと、護ってくれる？」
「もちろん」
それが涙をこらえていたユキの限界だった。
「うう・・・ひっく・・・えう・・・」
「おいおい、泣くなよ・・・」
快は苦笑した。ユキは涙を拭いながら笑顔で答えた。
「不束者ですが、よろしくお願いします」

俺と返事と2人の秘密と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
今回は新キャラとして仮面ライダーWからフィリップと声だけですが翔太郎を登場させました。いやあ、それにしても今回はちょっといい話な感じに仕上げてみましたがいかがでしたでしょうか？たまにはこういうのも悪くないかな、なんて自分では思ってたり、思ってなかったり。
次回からはAクラス戦に向けてのFクラスの準備が始まっていきますのでお楽しみに！感想お待ちしてます。

俺と気まぐれと事後処理と・・・、

ユキが快の告白を受け入れた朝、快はユキをバイクの後ろに乗せて文月学園に向かっていた。
「そう言えば、来週の水曜日はＡクラスとの対決だね」
赤信号で止まっていた時にユキが後ろから話しかけてきた。
「ああ、俺の新しい召喚獣の力を見せてやるぜ！」
快は自信に満ち溢れた声で答えた。
「へえ、それは楽しみね」
ふと横からそんな声が聞こえた。
「「？」」
見ると秀吉の姉、木下優子がいた。
「なんだ、お前か」
快が素っ気なく言うと、
「なんだとは何よ、なんだとは」
と腹立たしそうに言葉を返してきた。
「んで、なんか用か？」
「別に。これと言った用は無いわ」
「なんだよ、何もないのかよ」
「ええ、私はバカとはあんまり話さないの」
「じゃあ、どうしたの？」
ユキが聞くと、
「ふふふ・・・今日の私は機嫌が良いのよ！」
と高らかに答えた。
「「はあ？」」
快とユキの声が重なる。
「なんてったって今日は私がネットで注文したＢエ・・・じゃなかった。書籍が届くのよ！」
「うん、最後の方で微妙に言っちゃってるけどな」

快が指摘すると
「と、とにかく！今日はただの気まぐれで話しかけてやっただけなんだから！」
と何やらごまかすように身振り手振りをしながら言った。
「ほ、ほら！信号青よ！さっさとどっか行きなさい！」
鞄で叩いてきそうになったので
「へいへい」
快はアクセルを踏んだ。
「じゃあね、木下さん」
ユキも手を振った。
「あ、そうそう。そういう趣味、あんまり人に話すなよ。ドン引きされるぞ」
快は別れ際に言った。
「・・・バカ――――！」
叫び声がはるか後方から聞こえた。

しばらくして、快とユキは駐輪場に着き、ディケイダ―から降りた。すると、何やら、下駄箱の方でザワザワと話し声が聞こえたので下駄箱に向かうと掲示板に張り紙が貼られていた。
『文月タイムス号外　スクープ！！屋上に謎の焦げ跡！手すりは一部が大きく湾曲！一体何が！？』
と大きく書かれた学園新聞が掲示板に張られていた。その新聞には、写真で撮られた焦げて破損した床や大きく湾曲した手すりがアップで掲載されていた。
「「・・・・・・・」」
快とユキは凍りついた。そこに
「あ、快、天野さん、おはよー」
とのんきな声で明久がやってきた。
「オウ、アキヒサ。オハヨウ」
「ア、ヨシイクン。オハヨウ」

快とユキは明久の方を見ずに答えた。
「なんで片言?まあいいや、そんなことよりすごいねこれ。誰がどうやったらこうなるんだろうね?」
明久が新聞を見ながら言った。
「「・・・・・」」
「あれ?なんで2人とも無言なの?」
「「ソンナコトナイヨー」」
「また片言!?しかもハモリ!?」
「ネエ、カイ。ワタシ、ソトノクウキガスイタイナ」
「ソウカソウカ。ジャア、イコウ。イマスグ」
「え!?2人ともどうしてそんな競歩みたいな速さで歩けるの!?ていうか外の空気って普通に下駄箱から外に出ればいいんじゃ・・・」
明久の声はもう、2人には聞こえていなかった。

「うわ、これは・・・」
「さすがにちょっと・・・」
快とユキは屋上の入口に立って、屋上の状況を確認した。見ると深夜の戦いの激しさを物語っていた。至る所に焦げ跡があり、ところどころヒビが入っている。
「やっぱり・・・」
「私たちの、だよね」
その凄惨極まる光景は以前の屋上の見る影もないほどだった。
「どうする?」
「どうするって言ったって・・・」
2人は顔を見合わせ、同時に溜息交じりに言った。
「「・・・うやむやにしとこう」」
快とユキは、階段を下った。

俺と気まぐれと事後処理と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
今回は冒頭に木下優子さんを登場させてみました。快とユキの戦いの後に起こる出来事を書きました。みなさんいかがでしたでしょうか？次回もお楽しみに！

俺と脅迫と予定変更と・・・、

教室に着き、障子を開けるとドドドド！とFクラスの男子たちがユキに迫ってきた。
『天野さん！今日は是非俺の家に！』
口をそろえてユキに自分の家に泊まってくれるよう頼むバカ一同。
それにユキは
「え～と、実は、私、快の家に住まわせてもらうことになったの！」
と爆弾発言。ギロリ！と快にバカ達の殺気を孕んだ視線が突き刺さる。
「おう、てめえ天野てめえどういうことだコラァ！？」
「なんでお前ん家に天野さんが住むんだよコラァ！？」
「あれか？苗字一緒で親近感が湧いたんかコラァ！？」
と文句を垂れてくる野郎が大量にいる。そこにユキが楽しそうな笑みを浮かべながら
「そういえば、パジャマに着替えさせてくれたっけなぁ～」
もはやクラスター爆弾発言である。ちなみにこれは真っ赤な嘘である。しかし彼らは
『・・・・・・コロス』
思いっきり信じている。ビキリ！と窓ガラスの一枚に亀裂が走る。
快はこれをただの老朽化と思いたかった。大量の殺気に耐え切れず割れたなんて考えたくもない。
「おいユキ！変なこと言うなよ！」
快は殺気に圧倒されつつ、ユキに言った。するとユキは
「ふふ、深夜に熱～い愛の告白をしてくれたのは誰だったかな～？」
核爆弾発言投下。
『天誅ゥゥゥゥゥゥ！！！！』
ものすごい数のFクラス男子が快に襲い掛かった。中には明久や雄二、ムッツリーニの顔も見えた。

「ちょっ、お前ら、落ち着け！あれは嘘だ！なあユキ！」
快はユキに話を振った。
「本当か天野さん！？」
「どうなんだ！？」
ユキに質問がとぶ。この隙に逃亡を図ろうとした快。
「んーと、パジャマに着替えさせてもらったっていうのが嘘」
「なーんだ。そうなのかー、って住むのと告白は本当じゃねえかぁぁぁぁぁ！！」
快、一瞬で捕まり、逃亡失敗。
「これより異端審問会を開始する。須川異端審問会会長、いかが致しましょう？」
５人掛かりで抑え込まれ、全く身動きが取れない快の処分が決められていく。
「やめろー！離せー！」
ジタバタともがくが、逃げられない。そして処分が決まった。
「よし、被告天野快を手の爪を全て深爪にする刑に処する」
「いやだぁぁぁぁ！」
「さあ！観念しろ！」
快の手に福村の爪切りが近づく。爪切りが爪を挟みそうになったその時、ガシッとユキが福村の手を掴んだ。
「へ？」
戸惑う福村にユキはニコッと笑い、そして思いっきり腕を捻った。
「いでででででで！！？」
「ホントにやることは無いんじゃないかな？」
ユキはニコニコと笑いながらギギギギ・・・と福村の腕を捻り続ける。
「いだだだだ！！ギブ！ギブ！」
福村が肩をタップし、ユキの締め上げから解放される。
「みんなもそう思うでしょ？」
ユキが他のＦクラス男子達に問いかける。

『はい！全くもってその通りです！』
全員が口をそろえて言った。

「全員席に着け。ＨＲを始める」
西村先生が教室に入ってきた。皆ぞろぞろと自分の座布団に戻る。
「全員、知っての通りＡクラスとの戦争は来週に予定している・・・」
西村先生が今度のＡクラスとの戦争について話を始めた。
「・・・はずだが」
『はずだが？』
全員が西村先生の言葉に首を傾げた。
「その戦争がこちら側の理由で今週の金曜日になった」
「え？」
快の一言の後、
『えええええええ！？』
と驚きの声の大合唱が教室に響いた。
「ちょっと待て鉄人！そりゃ一体どういうことだ！」
雄二が立ち上がり、抗議の声をあげる。
「そうですよ鉄人！金曜日ってあと3日しか無いじゃないですか！」
明久もそれに続く。しかし、当の西村先生は
「西村先生と呼べ。この件に関しては私もよく聞かされていないから私に抗議されても意味がないぞ」
と抗議に全く聞く耳を持たない。
「じゃあ鉄人、せめて理由だけでも教えてください！」
快も立ち上がった。勢いで『鉄人』と呼んでしまった。
「西村先生と呼べと言っている。理由は実のところ私も聞かされていない。学園長から伝えろと言われて伝えただけだ」
取りつく島もない。
「では朝のＨＲを終わる」
とそのまま鉄人は教室を出て行った。

「明久」
雄二が明久を呼ぶ。
「分かってるよ、雄二」
明久が答える。そして二人は障子に手をかけた。
「俺も行こう」
快もそれに付いていった。スタスタ、最初はゆっくり歩いていたが段々と速くなり、目的の場所に着くと猛然とまるで勢いをつけるように走った。
「「「ババアァァァァァァ！！」」」
バンッ！とドアを蹴って開ける。
「来ると思っていたよ」
そこには大きな椅子に座った学園長、藤堂カヲルが座っていた。
「言いたいことは分かってるよな？」
雄二が学園長に言った。
「戦争の日程の変更の事だろう？」
学園長は静かに答えた。
「ああ、なんでこうなった？訳を聞かせてもらおうか」
快が学園長に詰め寄った。
「私たちも聞かせてもらいたいですね」
後ろから声がして振り向くとそこには霧島と木下が扉の前に立っていた。
「おやおや、まさかAクラスの代表と元代表が来るなんてね」
学園長が笑いながら言った。
「学園長、どうしてわざわざ予定を早めたんですか？教えてください」
木下も学園長に詰め寄った。
「ふん、まあお前達になら教えても構わないだろう」
学園長は椅子から立ち上がり、窓に顔を向け、快達に背を向けた。
「今朝方、こんなものがここに置いてあってね」
カサ、と学園長はデスクの上に1枚の紙と2枚の写真を放り投げて

置いた。
「これは・・・？」
木下が写真を手に取り、顔をしかめた。そこにはボロボロの屋上が映っていた。
「・・・こっちは？」
明久の手には紙があった。そこには殴り書きで

『学園全体をこうされたくなければ、今度行われる2年Aクラスと2年Fクラスの召喚獣戦争を今週の金曜日に行え。なお、この手紙を警察などに通報した場合即刻学園を破壊する』

と書かれていた。
「脅迫文じゃないか・・・」
「これを送りつけた奴の目的がなんであれ、こちらとしてはこれに従うしかないんだよ」
学園長は苦虫をかみつぶしたように嫌そうな顔をして言った。
「お前たちの作戦か？」
雄二が霧島に聞いた。
「・・・こんな汚いやり方するはずがない」
「だよな」
「全く、癪に障るったらありゃしないよ。こっちとしてはこのことはあまり公にしたくないんでね」
「このことを知ってるのは何人いるんだ？」
快が聞くと
「お前達を含めて私と高橋先生の7人だよ」
と答えた。
「で、お前たちの方に問題が無ければ金曜日に実施したいんだがね」
学園長が言った。
「良いじゃないか。こういうのは中々できない体験だよ」
学園長は薄く笑いながら言った。

うーん、と悩んでいたら
「いいですよ。Aクラスは学年のトップです。この程度のことでうろたえてたらAの名が泣きます」
木下がきっぱりと言った。
「第一、こんな手を使わなくてもこの人たちには勝てますから」
と挑発するようなことも言った。きっぱりと。
「いいぜ、そっちがその気ならこっちもこの脅迫文の要求を飲むぜ。俺たちは勝たなきゃならねえ」
雄二も負けず劣らずの威勢で言った。すると学園長の笑みはより一層濃くなった
「いいね、気に入ったよお前たち。じゃあお前たちの戦争は今週の金曜日だ。このことはくれぐれも内密に頼むよ」
『はい！』
5人の返事が学園長室に響いた。
「・・・・・・」
しかしまだ誰も気づいていなかった学園長室に近い廊下でこの一連の会話を聞いていた人物がいることに。彼はニヤと口元を歪めるのだった。

俺と脅迫と予定変更と・・・、（後書き）

皆さんこんばんは！夜ならこんばんは
前回は全くあとがきに何書いていいのかわからずものすごい駄文な感じがしてしまいました。本当にごめんなさい。
今回は学園長に脅迫文が届いて戦争の日程が変更になるという展開を書きました。なんだか快達と学園長の会話を盗み聞きしている人物も出てきて、ますます複雑になっていきますね。
次回は戦争に入れたらいいなーっと思っています。次回もお楽しみに！

俺と盗難と決戦前と・・・、

Aクラスとの戦争の予定が変わり、今週の金曜日に変更された日から3日後、今日がその戦争の日当日である。快はユキをバイクの後ろに乗せて学園に向かった。
「いよいよ今日だね」
ユキが快に話しかけた。
「ああ、絶対勝たなきゃな」
快はそう答えた。
「応援してるよ」
「おう、任せとけ！」
快はグッ、と拳を握る。
「あわわ、快！片手運転は危ないよ！」
「おっとっと」
ユキに言われ、すぐにハンドルを握る。
「それにしても、脅迫してきた人の目的はなんなんだろうね？」
ユキが言った。
「さあな、それはさすがに俺でもわからん。一体何を企んでるのやら」
実は昨日新たな脅迫文が届き、戦争はラウンド制の一対一の戦いが5回で先に3勝したチームの勝ちというものになった。
そんな会話をしていると学校に着いた。教室に入るともう皆集まっていた。
「おう、快、来たか」
「雄二、今日は頼むぜ」
「ああ、、任せとけ」
「・・・おはよう」
「お、ムッツリーニか。そういえば今日の勝負の科目は保健体育があったな」

「・・・必勝」
「はは、自信満々だな」
「天野君、おはようございます」
「姫路、今日は頑張ろうぜ」
「はい。天野君も頑張ってくださいね」
「・・・・えーと」
一人足りないことに気付いた。
「島田は？」
快が聞くと雄二が答えた。
「風邪だそうだ」
「そうか、風邪か・・・ってなんだと！？」
快は驚いて、声が微妙に裏返った。今回の戦争の参加者は、快、雄二、ムッツリーニ、姫路、島田の５人のはずだった。
「仕方ないだろ、激しい頭痛と高熱だそうだ。そんな状態で戦えって方が無理に決まってる」
「じゃあ、代わりはどうするんだよ？」
「それを今、全員で考えていたところだ」
すると今度は校内放送がかかった。
『２年Ｆクラスの天野快君。２年Ｆクラスの天野快君。大至急技術室まで来てください』
「なんだよこんな時に！」
快は悪態をつきながら技術室に向かった。

技術室に着き、扉を開けると、竹崎先生が待っていた。
「失礼します」
快が入ると、ものすごい速さで竹崎先生が快の肩を掴んで揺らした。
「大変だ！盗まれた！」
ゆさゆさゆさゆさ！！と快をゆすりながら焦っているような口調で言った。
「なん、です、か、なに、が、ぬす、まれ、たん、です、か！」

最後の『か！』で揺さぶりを止めさせて快は聞き返した。
「装甲だよ！新しく製造した装甲が盗まれたんだよ！」
「え！？装甲ってウイングゼロだけじゃなかったんですか！？」
快が聞くと
「ああ、実はウイングゼロ以外にもう1つ作ろうとしていて、あの時は作りかけだったから見せなかったけど、昨日完成したんだ！それが今朝ここに来たら盗まれたんだよ！」
と言った。
「なぜそう言いきれるんですか？」
快が襟を正しながら言った。
「昨日の夜中に完成して微調整は次の日の朝やろうと思ってそのままにして帰って、今日来たらなくなっていたんだ。こんな張り紙もあったよ」
「張り紙？」
快は差し出された1枚の紙を見た。そこには学園長に届いたものと同様に殴り書きで
『この装甲は頂く。私の計画に必要でね』
と書いてあった。
「で、何の装甲が盗まれたんですか？」
聞くと竹崎先生は
「エピオンだよ！！エピオンの装甲が盗まれたんだよ！」
と慌てていた声をさらに慌てさせて答えた。
「エピオン！？エピオンって、あのエピオンですか？」
快もエピオンの名前に驚く。
「そう。ウィングゼロと死闘を繰り広げたあのＯＺ製ガンダム、『ガンダムエピオン』のデータと設定をもとに開発した召喚獣追加装甲計画第2号エピオンだよ」
「それが盗まれた・・・？」
「そうだと言ってるじゃないか」
「でもあれ？装甲って俺しか動かせないんじゃ？」

快が当然の疑問を先生に言う。
「学園長にこの前の稼働テストのデータを見せたら『こいつにだけこんなすごい能力を付けたらパワーバランスが崩れちまうだろう。それに万が一のときこいつを止めるための装甲がいるだろう』って言うから、事前に作りかけの装甲・・・エピオンでその点を補いたいって言ったら、『それもあいつにだけ動かせるんじゃ意味がない。誰でも動かせるよう調整しておくれ』って言われたからその点を改良したんだ」
快はババアは本当に余計なことをする天才なんじゃないかと思った。
「で、エピオンの性能はどれくらいなんですか？」
「ウイングゼロと同等か、いや、使う人が使えばそれ以上だね」
「そんなものを盗む奴に心当たりは？」
聞くと、うーんと唸ってから
「いや、さっぱり見当がつかないね」
「でも」
「？」
「エピオンはまだ微調整が必要で動かすことはできるけどまだコントロールできるほどじゃないんだ」
「そうなんですか」
「だから無理に使おうとすれば召喚獣が暴走してしまうかもしれない。そんなものを犯人は何に使おうと言うんだ？」
竹崎先生は首を捻った。
「とりあえず、俺はこの後Ａクラスとの対決がありますからもう行きますけど、どうします？来ますか？」
快がそう言うと
「ああ、それは行くよ。この目で戦うゼロの姿を見たいしね」
「じゃあ、エピオン捜索は後でってことで、失礼します」
快は技術室を後にした。

「ということだ」

快は明久たちに技術室で何があったのかを話した。
「なるほど、おそらく犯人はババアに脅迫文を送った奴と同一人物だろうな」
雄二は落ち着いた口調で言った。
「ああ、俺もそう思ってる。文字も書き方が乱暴だったからな」
快も雄二の意見に同意した。
「そういえばそっちはどうなったんだ？」
快が聞くと
「ふっふっふ・・・ついに僕の時代が来た！」
と勢いよく明久が立ち上がった。
「雄二・・・もしかして・・・」
「そのまさかだ。島田の代理は明久にやってもらう」
雄二は腕を組みながら言った。
「大丈夫なのか？こいつ・・・バカだぞ」
快は言い放った
「刺さった！僕の心に何かがド直球で刺さった！」
「大丈夫だ。こいつはバカなおかげで召喚獣を使った雑務を多くこなしている。そこいらの奴よりは、召喚獣のコントロールは優れてるだろう」
そう言ってから雄二はうんうん、と頷いている明久を見て一言付け加えた。
「バカだがな」
「なんなの！？ホントは嫌なの！？」
抗議する明久の目は涙目だった。
「さて、お前ら聞いてくれ。俺たちはＡクラスから勝利を勝ち取って、最高の設備を手に入れようとしている。全員、勝つことだけを考えろ！Ａクラスだって何だって俺たちには敵わないってとこを見せつけてやろうぜ！」
雄二が士気を高揚させるために言った言葉は中々うまいものだった。
『おー！！』

皆のやる気満々の雄たけびをあげた。
「よし！参加する奴は今からテストを受けに行くぞ！」
雄二を先頭に快達参加者はテストを受けに行くのだった。

俺と盗難と決戦前と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
気が付けばもう３０話目です。いやあ、頑張ってるなあ自分。そんなことより今回は新しい装甲が登場です。ウイング関連でエピオンの装甲です。初めはゼロがエンドレスワルツ版だったのでナタクにしようと思ったのですが、やっぱりゼロのライバルはエピオンしかいないと思い、エピオンを選びました。
さて次回はＡクラスとの対決が始まります。エピオンはどこに消えたのか？
次回もお楽しみに！

俺と決戦とエリートと・・・、

「それでは、ただいまより2年Aクラス対2年Fクラスの試験召喚獣戦争を開始します！」

学年主任の高橋先生が宣言する。今から学年トップのエリート達と学年最低の学力を誇るクラスの戦いが始まる。立会人は高橋先生以外にババアこと学園長と鉄人の異名を持つ西村先生、技術の竹崎先生がいた。

「・・・なぜわしがラウンドガールなのじゃ・・・」

不服そうに唇を尖らせる秀吉もいた。

「何言ってるのさ、秀吉以外にラウンドガールは務まらないよ」

「ガールではないのだがのう・・・」

「では、1人目は前に出てください！」

高橋先生の合図で広大なフィールドが形成される。

「・・・行ってくる」

ムッツリーニが立ち上がる。

「頑張れー！土屋ー！」

「Fクラス魂見せたれー！」

「勝ってくれよー！」

「・・・・・」

後ろで観戦しているFクラスのメンバーが檄を飛ばすがムッツリーニはことごとく無視している。相当な集中力だ。

「土屋君、頑張ってください！」

「・・・・（グッ！）」

なぜか姫路の応援には答えていた。ムッツリーニらしいと言えばムッツリーニらしい。

「ふーん、君がムッツリーニ君か。ボクは工藤愛子（くどうあいこ）。よろしくね」

パチ、とウインクした工藤はムッツリーニを知っているようだった。

「ねえ、ムッツリーニ君。君って保健体育がすごくできるんだよね

？実はボクもなんだ。でも、ボクは筆記じゃなくて・・・実技の方が得意なんだ」

ブシャアッ！とムッツリーニの顔面に鮮血の花が開いた。

「・・・・ッ！（ボタボタ）」

工藤の精神攻撃は相応効いたらしく、足がプルプルと震えている。

「まずい！ムッツリーニが先制攻撃を受けた！」

「いや、あれはただの妄想による自爆だと思うんだが・・・」

明久に冷静にツッコミを入れる快。

「・・・さっさと始めるぞ」

ムッツリーニは鼻血を止めながら言う。

「ふふ、慌てなくてもすぐ倒してあげるよ。サモン！」

「・・・サモン」

ボンッ！と2人の召喚獣が出現する。

『保健体育　Ａクラス　工藤愛子　３４７点』

流石はＡクラスと言ったところか、３００点越えをしている。

「さ～て、じゃあ、いっただっきま～す！」

ドウッ！と工藤の召喚獣が持っている大きな斧を振りかぶり、ムッツリーニの召喚獣に突進する。

「危ない！」

姫路が声をあげる。このままではムッツリーニの召喚獣は真っ二つだ。

「・・・確かに高い点数だ。・・・だが・・・」

ヒュッ！とムッツリーニの召喚獣が消えた。

「なっ！？」

「えっ！？」

驚きの声が湧く。ムッツリーニの召喚獣が姿を現したのは工藤の召喚獣のはるか後方だった。

『保健体育　Ｆクラス　土屋康太　４２９点』

「・・・俺の足元にも及ばない・・・」

「よ・・・４００点オーバーだなんて・・・」

「・・・加速・・・」
ヒュン！またムッツリーニの召喚獣が消える。ドン！！と工藤の召喚獣が吹っ飛ぶ。そして吹き飛んだ方向とは逆に吹き飛ばされ、そして上に突き上げられ、最後は地面に叩き付けられた。
「・・・加速終了・・・」
ムッツリーニの召喚獣が再び姿を現す。
『保健体育　Ａクラス　工藤愛子　０点』
まさに瞬殺、としか言いようがなかった。点数の表示が間に合わないほどの速さの攻撃で一瞬にして、決着がついた。
「そこまで！勝者２年Ｆクラス、土屋君！」
『ウオオオオ！！』
大きな歓声が湧き上がる。
「やったなムッツリーニ！」
「すごいよムッツリーニ！４００点オーバーするなんて！」
「・・・当然の結果・・・」
「照れやがって、こんにゃろ！」
雄二がワシワシとムッツリーニの頭を撫でまわす。まずは１勝した。
「ごめんね。負けちゃったよ」
工藤が謝る。
「いいのよ。私がすぐに巻き返すわ」
木下が立ち上がった。
「それでは２人目の人は前へ！」
「よーし！僕もムッツリーニに続くぞ～！」
意気揚々と明久が向かった。
「明久・・・」
雄二が明久の肩に手を置く。
「雄二・・・」
「・・・死ぬなよ」
「・・・ああ、任せてよ！」
ザッと前に出る明久と木下。

「あら、あなたが相手なの？もう少し骨のある人と戦いたかったわ」
木下が余裕の笑みを浮かべる。
「それは戦ってみてから言うんだね」
明久も余裕そうだ。
「フン！すぐに終わらせてやるわ！サモン！」
「いくぞ、サモン！」
幾何学的な紋様から召喚獣が飛び出し、点数が表示される。
『数学　Ａクラス　木下優子　２７４点
数学　Ｆクラス　吉井明久　７２点』
『・・・・・・』
「て、点数だけが強さってわけじゃない！」
周囲の残念そうな視線を振り切るように明久は叫んだ。
「・・・ハア・・・」
木下は溜息交じりに召喚獣を動かした。
「・・・あ・・・」
サクッ、と木下の召喚獣のランスが明久の召喚獣の頭部を貫いた。
「いぎゃあああああ！！顔が！顔が熱いィィィィィィ！！」
『数学　Ｆクラス　吉井明久　０点』
「そこまで、勝者２年Ａクラス、木下さん」
高橋先生の全く感情の籠っていない声が勝敗を告げる。
「フン」
スタスタ、と木下は自分の位置に戻っていった。
「明久・・・お前ってやつは・・・」
快が戻ってきた明久に憐みの視線を送る。
「ちょっと・・・そっとしておいてくれないかな・・・」
そう言う明久の目には光が無かった。これで１勝１敗。
「では、３人目は前に出てください」
「あ、私の番ですね」
姫路が立ち上がる。
「負けるな姫路。ここで流れを取り返すんだ！」

雄二が姫路に檄を飛ばす。
「はい！頑張ります！」
姫路はタタタと走っていった。
「君か・・・。Fクラスにいる Aクラス並みの学力を持っている女子と言うのは」
姫路の相手は眼鏡が似合ういかにもエリートという感じの男子だった。
「あなたが2年生の学年次席の久保利光君ですか」
「ああ、君の相手には相応しいと思ってね」
「私はどんな人にも負けません！サモン！」
「威勢だけは良いみたいだね！サモン！」
2人の前に召喚獣が現れる。久保の召喚獣の装備は鎧と袴、武器は大きな鎌を2本持っている。
『古典　Aクラス　久保利光　３３２点
　Fクラス　姫路瑞希　３２９点　』
『オォー！』
「すごいな、姫路、学年次席の奴と互角だぜ」
快は驚嘆する。
「ああ、この日のために猛勉強してたからな」
雄二が答える。
「ほう・・・、中々やるみたいだ」
久保の召喚獣が鎌を両手に一本ずつ構えた。
「行きます！」
姫路の召喚獣が大剣を構えて突進する。ガキィン！金属がぶつかり合う音がした。ガン！ガキン！と、激しいラッシュが続く。バッ！と2人が間合いを取った。
『古典　Aクラス　久保利光　２４９点
　Fクラス　姫路瑞希　２４８点　』
点数が表示された。お互い全く譲らない戦いぶりで点数はほぼ同じであった。

「すごい・・・」
「ああ、完全に別次元だ」
明久と雄二も息を飲んでいる。
「ならこれでどうだ！」
久保の召喚獣が魔法陣のような円を展開し、そこから光弾の雨が降り注いだ。ドガガガガ！！と激しい攻撃が姫路の召喚獣を包んだ。煙で姫路の召喚獣が見えなくなった。煙が晴れるとそこには
「！？」
半球状に姫路の召喚獣を包むバリアが展開していた。
「お返しです！」
姫路が言うと、バリアから先ほどの光弾が久保の召喚獣に向かって飛び出した。
「グッ・・・！」
ドガガガガ！！と大量の光弾が久保の召喚獣を襲った。
「これで・・・終わりです！」
煙がブラインドになって、姫路の攻撃が察知できなかった久保の召喚獣に深々と姫路の召喚獣の大剣が突き刺さっていた。
『古典　Ａクラス　久保利光　　０点
　Ｆクラス　姫路瑞希　２４８点』
「そこまで！ただいまの勝負はＦクラス姫路さんの勝利です！」
『ワァァァァ！！』
大きな歓声が響き渡った。
「ふぅ、何とか勝てました」
笑顔で姫路が戻ってきた。
「すごいよ姫路さん！とってもかっこよかったよ！」
明久が姫路を褒め称えている。
「そっ、そうですか？えへへ、そう言ってもらえると嬉しいです」
姫路はモジモジと恥ずかしそうにしていた。２勝１敗、これで勝利に王手だ。
「・・・さて、いよいよ俺の番か」

快は立ち上がった。
「それでは４人目の人は前に出てきてください」
高橋先生が４人目を呼ぶ。
「快ー、頑張ってー！」
ユキの声援が聞こえた。
「快！このまま一気に勝つぞ！」
「負けるな快！」
「・・・ファイト・・・」
「天野君、応援してますよ！」
「おう！行ってくるぜ！」
皆の声援を一身に受け、快はフィールドに向かった。
「君が噂の転校生か。悪いけど、僕も勝たなきゃならないんでね。
あ、僕は飯島、飯島卓也（いいじまたくや）だよ。よろしく」
「ああ、お手柔らかに頼むぜ。サモン！」
「サモン！」
快と飯島の召喚獣が姿を現らわす。
『現国　Ａクラス　飯島卓也　３０７点
　Ｆクラス　天野　快　２７３点』
点数が表示され、飯島が余裕の笑みを浮かべた。
「僕の方が点数は上だね。それに君の召喚獣、丸腰じゃないか」
「ああ、だけど俺にはとっておきの秘策があるんだよ。いくぜ！アームド！」
快は装甲を起動させるための合言葉を言った。すると快の召喚獣の姿が変わった。足元から白の装甲が快の召喚獣の下半身を包み、青色の装甲が上半身を包んだ。そして背中に白い４枚の翼が生え、手には２丁の長銃身銃が握られた。頭部は召喚獣の顔が出るように装甲が付いている
「どうだ！これが俺のウイングゼロだ！」
快は得意げに言った。
「ほう・・・！」

「すごい！快の召喚獣に羽根が生えてる！」
「あれが装甲って言うんですね！」
「快の召喚獣、カッコイイ！」
明久たちが驚嘆の声をあげる。
「・・・ガンダム」
「ん？」
飯島がぽつりとつぶやいた。
「ウイングガンダムゼロじゃないか！？すごい！召喚獣のバリエーションにそんなのがあるなんて！」
なんだか目がキラキラしていた。
「お、おう！なんだ、お前もガンダム知ってんのか！」
快は嬉しそうに飯島に言った。
「・・・とでも言うと思ったかい？」
「は？」
突然、飯島はニヤと笑った。
「悪いけど、それが使えるのは君だけじゃない！アームド！」
「何！？」
「！！」
ガタッ、と竹崎先生が椅子から立ち上がった。飯島の召喚獣は足元から上半身まで紅と黒の装甲で覆われ、背には2枚の西洋のドラゴンが持つような羽が生え、頭部は快の召喚獣同様、顔が分かるように装甲が付いている。そして右手には緑色に発光する一振りのビームソード、左腕にはシールドと連結した鞭のようにしなるヒートロッドが装備されていた。
「・・・エピオン・・・だと！？」
快は驚愕した。
「そうだよ、これが僕の装甲、エピオンだ！」
飯島は召喚獣にビームソードを構えさせた。

俺と決戦とエリートと・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
今回からＡクラスとの戦いが始まりました。新しく、久保利光と工藤愛子を登場させました。飯島卓也はバカテス２巻のトーナメント表にあった名前を使いました。そしてなんとエピオンの装甲が姿を現しました！快のウイングゼロは勝つことができるのか！？次回もお楽しみに！

俺と激闘と暴走と・・・、

「そうだよ、これが僕の装甲、エピオンだよ！」
飯島は召喚獣にビームソードを構えさせながら言った。
「なんだ！？」
「向こうの召喚獣も変わったぞ！」
「どういうこと？」
ザワザワと騒然とする観客達。
「それを一体どこで手に入れたんだ！？」
それをかき分けながら竹崎先生がステージに近づき、飯島に聞いた。
「邪魔しないでください」
飯島がそう言うと、エピオンの本来ゼロシステムが搭載されている胸部の球体が光を放った。
「一体何を・・・！？」
ゴンッ！と何かがぶつかる音がした。
「痛って～！」
竹崎先生が突然頭を押さえている。
「何をした！？」
快が聞くと飯島は腕を組みながら答えた。
「召喚フィールドを硬質化したんだ。これでもう誰も邪魔することはできない」
「何だと？」
ためしに腕を伸ばしてみると、確かにすり抜けなくなっている。どうやらそれに頭をぶつけただけのようだった。
「あら、変ですね？フィールドが・・・」
見ると高橋先生がフィールドを消そうとしているのが見えた。
「無駄ですよ高橋先生。これは僕が許可しないともう消えません」
「システムを乗っ取ったっていうのかい！？」
学園長も驚きを隠せないようだ。

「さあ、どうでしょう？あと、天野君。これの入手方法だけど、僕に勝ったら教えてあげるよ」
「気を付けて天野君！エピオンはまだ微調整が必要だ。いつ暴走するかわからない！」
竹崎先生が忠告する。
「分かりました。だとさ飯島。どうする？今ならまだ止められるんだろ？」
聞いては見たものの向こうは聞く耳を持たないようで、
「だったら暴走する前に君を倒せばいいだけだ！」
自分の召喚獣（以後エピオン）を快の召喚獣（以後ウイングゼロ）に肉薄させた。
「クッ・・・！」
ビームソードをビームサーベルで受け止める。ズシリと重たい衝撃が攻撃の凄まじさを物語っていた。
快はウイングゼロに装備されたマシンキャノンを至近距離で浴びせた。
「食らえ！」
『現国　Ｆクラス　天野　快　２４８点』
２０点分の弾丸がエピオンの装甲にヒットする。５点はビームサーベルの使用に消費した。
『現国　Ａクラス　飯島卓也　２９６点』
だがあまり効いていないようだった。
「その程度かっ！！」
飯島はエピオンのビームソードを横に振った。ビュオン！と襲い掛かるビームソードを紙一重で躱したが、シールドに装備されたヒートロッドの一撃を食らってしまった。
「グァッ！」
ヒートロッドがウイングゼロの左足にヒットし、快の左足にフィードバックが生じる。
『現国　Ｆクラス　天野　快　２０７点』

一撃で４０点近く奪われた。
「このッ・・・！！」
快はウイングゼロのビームサーベルをエピオンの腹部に突き刺した。
バチバチとスパークを起こしている。
「ふふ、どうやら僕の方が上手のようだね」
飯島は距離を取り、ビームサーベルを引き抜かせ、余裕の笑みを浮かべる。
「なめるな！」
快は２丁のうちの１丁のバスターライフルを５点分のパワーで地面に発射した。ドゴォォン！と激しく煙が舞う。それを目くらましにして一気にエピオンに近づき至近距離でもう片方のバスターライフルを発射した。
（３０点のツインバスターライフルであの威力だったんだ。１丁でも、２０点使えば！）
ドゴォォン！と轟音と共に煙が晴れた。そこには飯島のエピオンと快のウイングゼロが立っていた。
『現国　Ａクラス　飯島卓也　２３１点
　Ｆクラス　天野　快　１８２点　』
予想通り６０点ほどの大ダメージを負わせることができた。飯島は咄嗟にシールドで防ごうとしたが、至近距離の発射だったためバスターライフルの一撃はそのシールドをも突き破った。
「へっ、どうだ！これでヒートロッドは使えねえだろ！」
「なかなかやるようだね・・・でも！！」
ヒュン！ザシュッ！一瞬にしてウイングゼロの４枚のうちの１枚の翼が切り落とされた。
「あれだけが武器じゃないから」
ビームソードを振らせ、不敵に笑った飯島。
『現国　Ａクラス　飯島卓也　２２１点
　Ｆクラス　天野　快　１７２点　』
点数は以前快の方が不利である。

「チ・・・ッ！」
快は距離を取って、姿勢を立て直した。

「すごいな・・・姫路さんと僕の戦いにも引けを取らない戦いだ」
久保が感心したように声をあげる。
「ええ・・・私の時なんかよりずっといいわ」
木下も明久の方を見ながらそう言葉を返した。
「でも・・・」
「ああ・・・君も感づいていたかい？」
「ええ、飯島君はいつの間にあんなものを？」
久保と木下、２人の疑問はそこだった。快が新しい武装でこの戦いに臨むことは噂で聞いていたが、飯島がエピオンの装甲を使うことは想定外だった。と言うより今さっき彼が使うのを見て初めて知った。
「僕も気になるのはそこなんだ。なぜ使うならそうと言ってくれなかったんだろうか？」
「確かに、あれがあるってわかってるならもっと別の順番・・・それこそ姫路さんにあてるべきだわ」
「・・・もしかしたら」
霧島がぽつりと言った。
「どうしたの代表？」
木下が振り向く。
「・・・もしかしたら、彼もさっきまで知らなかったんじゃ」
「・・・・。そうか！彼自身も知らなかったのなら僕たちが知る由もないはずだ！」
「・・・たとえば、誰かに渡されたとか」
「でも誰に？」
「・・・それは私にもわからない・・・」
Ａクラスの秀才３人が話している間にも戦いは激しさを増していった。

「ハァァ！」
ブン！とエピオンのビームソードが快のウイングゼロに迫る。
「ウオォォ！」
それをひらりと躱し、エピオンの右羽根をビームサーベルで切り付ける。
「まだだっ！」
ガッ！とエピオンがウイングゼロの腹部を蹴り付け、その反動で間合いを離した。
『現国　Ａクラス　飯島卓也　１７４点
　Ｆクラス　天野　快　１４９点』
少しずつではあるが、快と飯島の点数差は狭まってきた。
「ハァッ、ハアッ・・・どうした？そろそろへばって来たか？」
快は笑ってみせるが、快の方が明らかに疲労困憊という感じだった。
痛みのフィードバックが容赦なく快の体力を奪っていった。だが、
「うるさい！僕は負けない！負けるわけにはいかない！」
と飯島も疲弊していた。
「そうかよ！」
快はもう一度バスターライフルで地面を打った。煙が舞い、また飯島の視界を奪う。
「クソッ・・・！２度も同じ手には！」
飯島はエピオンにやみくもにビームソードを振るわせる。しかし、快のウイングゼロにあたるはずがない。
「どこ狙ってんだよ」
「なっ！？」
ウイングゼロはツインバスターライフルを構え、空中に浮かんでいた。
「見て！飛んでる！」
「おお、すげえな！」
観客から声が上がる。

「天井が高い部屋で助かったぜ。食らえ４０点分のツインバスターライフル！」
ドゴォォォォォン！！という爆音とともに、凄まじい勢いの一撃がエピオンを飲み込んだ。
「やったか！？」
快は一瞬勝利を確信した。だが、
「負けない・・・僕は・・・負けちゃダメなんだ！」
ゴォォォォォ！！と煙を吹き飛ばしながら緑色の閃光が快のウイングゼロを飲み込んだ。
「・・・ッ！？ウ・・・グァァァァ！」
咄嗟に３枚の翼で身を包んで防いだが、ものすごい一撃で、翼はすべて吹き飛び、地面に落下した。
「何事だい！？」
「学園長！試験召喚獣管理システムがオーバーロードの警告を！」
「そんな！まさか・・・まさか！」
煙を割って出てきたのは、緑色の目を赤く変色させたエピオンだった。
「・・・暴走が始まった・・・！」

俺と激闘と暴走と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
エピオンついに暴走！はたして快は止められるのか！
今ちょっと忙しくてあまりあとがきが書けません！ごめんなさい！
次回もお楽しみに！

俺と自爆と回想と・・・、

「・・・暴走が・・・始まった・・・！」

竹崎先生の声が聞こえた。だが、快は痛みのフィードバックでそれどころではなかった。翼を失って、地面にウイングゼロが叩き付けられた衝撃で体中が痛んでいるのだ。

『現国　Ａクラス　飯島卓也　８７点
　　Ｆクラス　天野　快　６９点　』

点数が表示される。一見それほど差はないように見えるが、快の方が圧倒的に不利である。快の装甲、ウイングゼロは本来あるはずの４枚の白い翼をすべて失い、体のあちこちは装甲が砕けて生身が露わになってしまっている。対する飯島のエピオンはウイングゼロのツインバスターライフルの砲撃を受け、ほぼ満身創痍の状態であるが、厄介なことに暴走が始まっているらしい。

「ハアッ！ハアッ！ハアッ！・・・グッ・・・飯島！暴走が始まったぞ！早くフィールドを消せ！」

快が呼びかけるが、

「無理だよ！もう止まらない！君を倒して、僕が勝つまで！」

と飯島は冷静さを失っている。

「消えろおおおおお！！」

ブゥン！と体にワイヤーで連結させたビームソード、ハイパービームソードをウイングゼロ目掛けて振るエピオン。

「チッ！」

サッとギリギリで躱し、残りの点数を確認する。

『現国　Ａクラス　飯島卓也　８７点
　　Ｆクラス　天野　快　６９点　』

「どういうことだ！なんで点数が変動してんねえんだ！」

快は自分の点数ではなく、飯島の点数を確認しようとした。あれほどの高威力の攻撃には、それ相応の点数が使われているはず・・・

そう思い、何とか攻撃のチャンスを伺おうとしていたのだ。
「先生！どうしてあんな威力の攻撃がタダで使えるんです！？」
快は攻撃をよけ続けながら竹崎先生に聞いた。
「僕にもわからない！おそらく暴走の影響でシステムが異常を起こしているんだ！」
「どうやって止めればいいんです！？」
快はバスターライフルでなけなしの６９点から２０点使ってツインバスターライフルを発射する。だが
それはエピオンの巨大なビームソードを盾代わりにした防御で阻まれてしまった。しかもビームソードを元の大きさに戻して快のウイングゼロの懐まで潜り込むと、そのままツインバスターライフルを両断してしまった。
「もうここまで来てしまった以上どうすることもできない！何としてでも止めないと・・・！」
「でもどうすりゃいいんですか！？バスターライフルも無くなっちまった！」
快は残った右肩に装備されたビームサーベルで攻撃しようとするが、先ほどより格段に速くなった動きについていけず、ウイングゼロは右腕ごとビームサーベルを切られてしまった。
「ウグッ・・・！」
右腕の感覚が無くなった。フィードバックで意識が飛びそうになるが、何とか堪える。
「まずい・・・一体どうしたら・・・！？」
必死に考える。この状況で本当のウイングゼロを操る男、ヒイロ・ユイならどうしただろうか。一体どんなぶっ飛んだアイデアでこの状況を打開したか、と。・・・、ぶっ飛んだ？
「そうだ！その手があった！」
快は閃いた。しかし、それはとても危険な手段であった。
「竹崎先生！すいませんけど・・・約束守れませんでした！」
ビュン！と勢いよく飯島のエピオンに接近し、ガシッと残った左腕

でエピオンにしがみつく。
「へっ?え?!まさか!?待って!それをやったら天野君が・・・!」
竹崎先生の顔が見る見る蒼ざめていく。
「・・・・・」
快はウイングゼロの整備を行った日のやり取りを思い出した。

「ツインバスターライフルに、ビームサーベル2本、マシンキャノン2門・・・ほんとシンプルすぎる武装ですよね」
快がパソコンを覗き込みながら竹崎先生に言う。
「まあ、試作段階だし、武装の面はあとあと何とかするよ。それに・・・」
「それに?」
快が言葉の次の句を聞こうとするとキラーンと竹崎先生の目が光った。
「とっておきの武装を積んでいるからね」
「おお、というと?」
快がさらに追及すると竹崎先生は得意げに答えた。
「自爆」
「・・・・・」
快は絶句した。
「自爆」
「いや、2回言わなくていいですよ。てか、え?積んでるんですか自爆能力?」
「ああ、この自爆能力は所持点数と比例せずに自爆しろと念じるだけでものすごい威力の攻撃を相手に与える超大技だよ」
「ちなみにそれのフィードバックは・・・?」
快が恐る恐る聞くと、
「あるよ」
と短く即答された。

「いやだ！絶対やらん！絶対やらんぞ！」
「まあでも、僕もそうしてくれるとありがたいいんだよね」
「え？」
「だって自爆だよ？なくなっちゃうんだよ？全部」
「ああ、そういうことですか。大丈夫ですよ。なるべくしませんよ。て言うかこっちから願い下げだ」
「そう？そう言ってもらえると助かるよ。」
竹崎先生は安堵の表情を浮かべた。そして小声でつぶやいた。
「まあ、見てみたくもあるけどね」
「なんてこというんだアンタ！」

「・・・先生、そんな訳なんですいません！」
「なんだ！？何するつもりだ！」
狼狽する飯島。それを尻目にジタバタともがくエピオンに振りほどかれないようにガッシリとしがみつかせ、快は頭の中で念じた。
（自爆しろ）
すると装甲の白い部分が赤く光り、まばゆい閃光を放ちながらものすごい爆音が響いた。
ドッッッゴォォォォォォォォォォン！！
フィールドが煙に包まれた。
「なんだ！？どうなったんだ！？」
「天野の召喚獣が爆発したぞ！」
「なんか、すいませんて聞こえたけど？」
ザワザワと騒然とする一同。そして煙が晴れた。
「あーあ・・・」
煙が晴れるのと同時に竹崎先生の声が聞こえた。そこには何もなかった。ただ、ぽっかりと大きな穴がフィールドの中心、もとい爆心地にあるだけであった。２体の召喚獣の姿はどこにもない。
「・・・このような場合、どうすればいいのでしょうか？」
さすがの高橋先生も困惑していた。無理もない。先ほどまでのオー

バーロードの警告がいきなり消えたと思ったら、目の間で激闘を繰り広げていた2体の召喚獣が消滅したのだ。
「・・・・・」
快はクルリと踵を返し、ステージを降りようとした。
「待ちなさい天野君。まだ判定が・・・」
高橋先生が快を呼びとめた。
「判定も何も、どう考えたって引き分けでしょう」
快は高橋先生に静かに言った。
「え・・・」
「今の勝負に最後まで立っている奴がいなかった。2体同時に消えたんだ。引き分け以外の何物でもないと思いますよ」
快がきっぱりと告げると、高橋先生も納得したようだった。
「ただいまの勝負は勝者、敗者ともにいません!よって引き分けとします!」
判定が下り、快は自分の陣地に戻った。
「えーと、快?」
明久が椅子に座った快に話しかけた。
「なんだ?」
快が返事をする。
「さっきの爆発は・・・?」
「ああ、見ての通り・・・自爆だ」
快は少しためて答えた。
「うん、確かにすごい戦いだったよ。なんていうかこう・・・でも・・・」
「最後が自爆っていうのはどうなのか?ってことだろ?」
快は明久が言わんとしていることがよくわかっていた。
「あ、いや、そういうわけじゃ・・・」
「勝てなかったのは謝る。すまなかった。言い訳する気はない。もうあれしか方法がなかった」
快は言葉をぶつ切りにして言った。

「だが・・・最後に言っておく」
「？」
「・・・死ぬほど・・・痛いぞ・・・」
それが快の限界だった。それだけ言うと、快は糸の切れた人形のようにガックリと項垂れ、動かなくなった。あれほどの威力の自爆のフィードバック・・・考えるだけで明久は身の毛がよだった。
「快・・・お疲れ様・・・」
明久は快にそう言った。
「ああ、本当によくやってくれた」
雄二が前に出た。いよいよ最終戦である。ここで雄二が勝てばFクラスの勝利は確定する。
「快、お前の遺志は俺が受け継ぐ！」
遠い目をして窓から空を見上げる雄二。
「待って雄二、快はまだ死んでないからね」
明久が冷静に突っ込む。
「行ってくる」
雄二はそう言うとフィールドの方へ向かった。
「・・・雄二・・・逃がさない。絶対に」
「だ、代表？何かどす黒いオーラが溢れてるけど・・・」
霧島の体からあふれ出る何かを察知し、工藤が指摘する。
「・・・・・」
霧島は無言のままフィールドに向かった。
ついにAクラスとFクラスの戦いに終止符が打たれる。

俺と自爆と回想と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは！
まず、皆さんに謝っておきます。前回のあとがき、すいませんでした。全く何を言っていいのか思い浮かばず、あんなふうにごまかしてはみたものの、やはりちょっと変な感じになってしまいました。これを反省して、あとがきもしっかりかけるような作者になりたいと思います。
さて、振り返りに入りますが、ウイングゼロ、まさかの自爆。ドーン！いやあ、自分ではなかなか面白い展開だと思います。自爆のフィードバックってどんだけ痛いんでしょうね？それこそ
「死ぬほど痛いぞ」
って感じなんですかね？やってみないと分かりませんが、やってみたいとは思いません。さて次回はＡクラスとの戦いが終結します！はたして快達は勝利することができるのか！次回もお楽しみに！

俺と瞬殺と終結と・・・、

「それでは最後の勝負を始めます！５人目に生徒は前へ！」
高橋先生が最終戦の開始の声をあげる。
「・・・雄二」
「ケッ、翔子・・・お前も本当にしつこいな」
前に出た雄二がうんざりしたように霧島に言う。
「・・・雄二、私・・・絶対に勝つ」
「ほう、随分な自信だな。じゃあその実力見せてもらおうか！　サモン！」
「・・・サモン」
雄二と霧島、２人の召喚獣が幾何学的な魔法陣から出現する。ちなみに２人は快が自爆で大穴を開けたステージの上ではなく、ステージのすぐ下に新しく作ったフィールドで戦うことになっている。
『日本史　Ａクラス　霧島翔子　３９９点
　Ｆクラス　坂本雄二　１０６点』
「・・・て、点数だけで勝負が決まるわけじゃねえ！ウオオオオ！」
雄二はあまりの点数差に一瞬言葉を失うが、すぐに立て直し霧島の召喚獣に攻撃を仕掛けた。雄二の召喚獣のメリケンサックが霧島の召喚獣の正面をとらえそうになった瞬間、
「・・・負けないって言った」
『日本史　Ａクラス　霧島翔子　３９９点
　Ｆクラス　坂本雄二　０点』
雄二の召喚獣の首が飛んだ。霧島の召喚獣が日本刀による渾身の斬撃をお見舞いしたのだ。
「は？」
「え？」
雄二と明久は何が起こったのか把握できていない。
「・・・なんて速さだ・・・」

「あ、快起きてた」
先程まで真っ白な灰になっていた快が驚きの声をあげる。
「そこまで！勝者Ａクラス代表霧島さん！」
本日２回目の瞬殺だった。
「・・・・」
トボトボと雄二が戻ってきた。
「「「・・・雄二」」」
「・・・坂本君・・・」
戻ってきて早々、他の参加者４人からものすごく残念そうな視線を受ける雄二。
「う・・・うるせえ！まだ勝負が終わったわけじゃねえ！」
確かに雄二の言う通りであった。これまでの戦績は２勝２敗１引き分けとなっている。このまま延長戦をすることになるはずだ。延長戦、何をするのか誰にも見当がつかなかった。
「えー、話し合いの結果、延長戦は大将の学力勝負と言うことになりました」
高橋先生が淡々と告げた。
「な・・・」
雄二が再び絶句する。雄二のこの反応から全員が理解した。
（（（（（ああ、これは終わったな・・・）））））
「ま、待て待て！おいババア！なんで最後の最後で学力勝負なんだ！？」
雄二が動揺しながら学園長に詰め寄る。
「なんでって、そりゃただのバカ共に最高の設備を与えるわけにはいかないじゃないか」
と学園長は素っ気ない態度で答えた。
「ならせめて俺じゃなくて姫路にやらせてくれ！」
雄二があれほど焦っている様を快は見たことがなかった。
「無理だね。もう大将同士の勝負と決めたから変更は認められないよ・・・まあ、科目位ならハンデとして選ばせてやってもいいがね」

「本当か!?」
雄二の顔色が一気に明るくなった。
「じゃあ、日本史だ!翔子!日本史で勝負だ!」
雄二は日本史を選択した。
「・・・分かった」
霧島もそれに応じた。
「では、始めてください」
しばらくして雄二と霧島に問題と解答用紙が配られ、高橋先生が開始の合図を告げ、2人は問題に向き合った。カリカリ、カリカリ、とシャーペンの音だけが聞こえる。
「坂本君、頑張ってください!」
姫路が小声で応援する。
「だが、何で雄二は日本史を選んだんだ?」
「・・・得意科目であるわけでもないはず・・・」
快とムッツリーニは雄二の選択の意図が分からなかった。
「大丈夫だよ。雄二を信じよう」
明久は、真っ直ぐ雄二を見据えて言った。明久と雄二の間には、絶大な信頼関係があるのだと快は思った。
「・・・そうだな。よし、俺も雄二を信じよう!」
「・・・後はあいつがどれだけ点を取れるか・・・」
快とムッツリーニは、雄二の勝利を信じていた。そして・・・
「そこまでです。答案を回収します」
高橋先生の合図でテストは終わった。
「・・・雄二」
霧島が雄二に話しかける。
「・・・私が勝ったら・・・」
「ふん、それには及ばないな」
雄二は自信満々に答えた。
「・・・?」
霧島は雄二の余裕の理由が分からなかった。

「悪いが、俺は今のテスト、すべての問題に回答できた！」
「・・・！」
「勝ちは頂いたぜ、Ａクラス代表さんよ」
雄二は絶対の自信を体から溢れさせていた。
「それでは、点数を発表します！」
採点が終わり、両者の点数が発表される。
『・・・・・・・ゴクリ』
そこにいた全員が固唾を飲んだ。バン！と電光掲示板に点数が発表される。
『日本史　Ａクラス　霧島翔子　１００点
　　Ｆクラス　坂本雄二　　５２点』
Ｆクラスの敗北が、決定した。

俺と瞬殺と終結と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
・・・はい！というわけで、Ｆクラスの敗北でＡクラスとの対決は幕を引きます。
皆さん大体予想はついていたでしょうか？次回はこの対決のすぐ後のお話を書きます。楽しみに！

俺と不穏と真相と

『ワァァァ！』
とAクラスの陣営から歓声が上がった。
「・・・雄二」
明久が戻ってきた雄二に優しく話かける。
「明久・・・」
雄二はゆっくりと正座し、一言つぶやいた。
「・・・殺せ」
「よく言った。この野郎がぁぁぁぁ！！！！」
雄二に襲い掛かろうとする明久を姫路と快が必死に抑える。
「待ってください明久君！」
「そうだぞ明久！お前だったらもっと悪い点数だっただろうが！」
「離してくれ快！姫路さん！僕は今からお仕置きとしてこいつの喉笛を掻っ切らなくちゃいけないんだ！」
「もはやそれは処刑だ！」
ギャー！ワー！と騒いでいると霧島がやってきた。
「・・・雄二、約束忘れてない？」
「ん？なんだ雄二？約束って？」
明久を抑えながら快は雄二に聞いた。
「・・・これ」
雄二の代わりに霧島が答えた。霧島の手には1枚の書類があった。
名前を書く欄が2つあって、片方は霧島の名前とハンコが押されていた。その書類にはこう書かれていた。
『婚姻届』
「婚姻届！？」
すると黙っていた雄二が口を開いた。
「こいつは俺がAクラスとの戦いに負けたら書かされることになってる婚姻届だ」

「なるほど・・・ってそうじゃなくて！」
「前々から迫られていてな。一度こいつの家に行って婚姻届を束で没収したんだが、まだまだある」
「婚姻届が大量にある家って微妙に怖えーよ・・・」
快は想像してゾッとした。
「翔子・・・俺も男だ。約束は守ろう。だから、・・・目を瞑ってくれ」
すると突然、雄二は霧島を見つめてこう言った。
「・・・はい」
霧島は頬を赤らめて目を閉じた。
「え？な、なにこれ？何この状況！？」
あまりの急展開に快は戸惑う。すると雄二は霧島にゆっくりと顔を近づけ・・・るわけもなく思いっきり背を向けて走り出した。
「俺はまだ人生の墓場に行く気はない！！」
ダダダダダダ！！とすごい速さで走り去っていった。
「・・・逃がさない」
ヒュンッ！と霧島は弾丸のような速さでそれを追いかけて行った。
一瞬見えただけだが、霧島の目が、据わっていた。
「・・・さてどういうことか話してくれ」
竹崎先生が飯島と話をしようとしていたところを快は見つけた。
「悪い。ちょっとあっち行ってくる」
快は姫路と明久に一言言ってから2人のもとへ向かった。
「先生、俺も立ち会います」
「ああ、天野君も来てくれ。場所を変えよう。いいね飯島君？」
「・・・はい」
3人は技術室に向かった。

「じゃあ、どうして君はエピオンの装甲を持っていたんだい？」
竹崎先生がジッと飯島を見つめて聞いた。
「・・・渡されたんです」

飯島は短く答えた。
「渡された？」
快がオウム返しした。
「どういうことだい？」
「昨日、部活動が終わって、教室で着替えようと思って教室に向かったら、自分の机の上にあの装甲と1枚の紙が置かれてたんです」
「紙？」
竹崎先生が訝しげに聞いた。
「はい。手紙みたいだったんですけど文字が殴り書きで・・・」
「なんて書いてあったんだ？その手紙」
「『この新しい力を使って、明日のFクラスとの勝負に勝て。負けは許されない。私は君の将来を自由に操ることができる。なおこれを使わなかった場合や誰かに知らせた場合もそれ相応の罰が下る』って書いてありました。それで怖くなって・・・」
「言われた通り、使用したと」
「ごめんなさい！まさか盗まれたものだったとは思わなくて・・・」
泣きそうになりながら声を震わせている飯島の肩に竹崎先生は手を置いた。
「話してくれてありがとう。どうやら君は悪くないみたいだ」
ニッコリと微笑みながら先生は飯島を許した。
「・・・しかし、これが犯人の作戦ならまんまと成功したな」
快は窓の外を見ながら言った。
「どういうこと？」
飯島が快に聞いた。
「もし、犯人の狙いが装甲の破壊なら、見事に成功してる。俺のウイングゼロも自爆でお前のエピオンごと木端微塵になったからな」
「・・・なるほど。犯人の狙いはそれか！」
「でも、何のために？」
「さあ？ただ単に嫌がらせってわけでもないだろうし俺にもよくわからないな」

快は肩を竦めて答えた。
「だけど、良いデータは取れたよ。さっきの戦いのおかげでデータを日を改めて取る手間が省けた」
竹崎先生はパソコンのに今回の戦闘データをロードしていた。
「あれだけのことがあっても諦めないんですね」
快は苦笑した。
「もちろん。タダで起き上がるほど僕もバカじゃない。それに・・・」
「？」
「盗まれても、また天野君が自爆して止めてくれるからね」
「・・・できればあれはもう遠慮したいっすね」
「冗談だよ冗談。あははは」
竹崎先生は悪戯っぽく笑った。

ここは文月学園のどこかにある使われていない教室である。そこには一人の初老の男が古いテレビに話しかけていた。
「・・・装甲の破壊に成功しました」
「ククク、よくやった。これでお前の望みの実現に一歩近づいたよ」
砂嵐しか映っていないテレビから、しわがれた声が聞こえる。
「本当に、私は学園長の座に就くことができるのですか？」
男は画面に話しかけた。
「そうだとも、心配しなくてもお前の望みは叶えてやる。その代り、私の要求に1つ応えてほしい」
「はあ・・・ディケイド、と呼ばれる人物の捜索ですね」
「そうだ。私の望みを叶えてくれれば、お前の望みも叶えてやろう・・・」
「その、ディケイドとはいったい何者なんでしょうか？」
恐る恐る聞くと、しわがれた声は
「お前は探すだけでいい。それ以外は詮索するな」
と低い声をさらに低くして答えた。

「申し訳ありません！し、失礼します！」
男はそのまま逃げるように立ち去った。
「クックック・・・必ずや貴様を地獄に叩き落としてくれる。待っていろディケイド・・・」
テレビはブツンと消え、この教室はまた何も音がしなくなった。

俺と不穏と真相と（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは！
えーと・・・何書いていいかわかりません（笑）。とりあえず次回予告だけしちゃいましょう。
次回はFクラスの面々でゆるーい感じの回というのに挑戦してみたいと思います。
やばい・・・本当に何も面白いあとがきが浮かばない・・・。
と、とりあえず次回もお楽しみに！

俺と登校と自業自得と・・・、

「快ー。そろそろ行かないと遅れちゃうよー」
朝、ユキが快の自宅の一階から快を呼ぶ。
「んー」
快は制服に着替えながら二階から降りてきた。そしてユキの制服の上にエプロンを着けた姿を見て一言言った。
「別にそんなことしなくてもいいんだぜ？」
「何言ってんの。一緒に住まわせてもらってるんだもの、これぐらいしないとね！」
ユキはエプロンを元々あった位置に置いて力強く言った。ユキはＡクラスとの戦いがあった日の夜、夕飯を食べている時に突然、自分も家事をすると言ったのだ。初めは、快は別にそんなことをしなくてもいいと言ったのだが、そんな図々しいことはできないと言ってユキも譲らなかった。相談の結果、一日交代で家事をすることになった。
「はい、これお弁当」
「おう、サンキュ」
快はユキが作ったであろう弁当を受け取り、鞄に入れて玄関の扉を開ける。
「雄二のお袋さんみたいに中が上下共におかずとおかずだったりしないよな？」
「ふふ、まさか」
そんな会話をしながらディケイダーに乗って、ヘルメットを被る。
「ヘルメット着けたか？」
「うん、オッケーだよ」
ユキのヘルメット装着を確認してから快はアクセルを踏んだ。
「・・・なあ、ユキ？」

しばらくして、快はバイクを走らせながら後ろに座っているユキに問う。
「どうしたの？」
「なにやら殺気が籠った視線を感じるんだが・・・」
「あー・・・」
赤信号で止まって後ろを見ると、朝のさわやかな空気に混じってゴゴゴゴ・・・と凄まじい殺気を肉眼で確認できるほど立ち上らせている文月学園の生徒がちらほら。
「あれってさ・・・」
「ああ、同じFクラスの奴らだな」
「やっぱりね・・・」
後ろには見知った顔が多く・・・というか見知った顔しかいなかった。Fクラスの男子たちは、異端審問会という組織に入っており、彼女がいる、および女子がらみのことで何かいいことがあったりする男を粛清（リンチ）する学園の秩序を守る組織らしい。
「朝からあんなのに構ってたら授業に遅れちまう。早く行こうぜ」
「そうだね」
快は信号が青になったと同時にアクセルを踏んだ。ブロロロロロ・・・とバイクを走らせる。
「・・・・・」
するとまだ視線を感じることに気付いた。
「か・・・快・・・」
ユキが声を震わせながら快を呼んだ。
「ど、どうした？」
「あ・・・あれ・・・横に・・・・・・」
「？」
チラと一瞬横を見る。そこには鬼のような形相のクラスメイトの福村が快のディケイダ―と並行して歩いていた。快は視線を前に戻す。
「は！？」
そしてもう一度横を見た。いわゆる『二度見』というやつである。

「嘘だろ・・・！６０キロ出てるんだぞ！？」
快が戦慄していると福村が口を開いた。
「幸せ者め・・・ゆるさん！！」
ぎらぎらした目で快を凝視している福村。今にも飛びかかってきそうだ。
「お、落ち着けって・・・な？」
「そうだな。一旦落ち着こう・・・お前を殺った後でなァァァァァ！！」
バッ！と快の前方に飛んで福村は快に襲い掛かろうとした。
「あぶなッ！？」
快が言った瞬間、ドガ！！と激しい激突音が聞こえた。
「ぐげふ！！」
それは福村が電柱に激突した音だった。快の事を凝視し続けたため、全く周りを確認していなかったようだ。強かに腹をぶつけた福村はピクピクと痙攣していた。
「・・・いいの？助けなくて？」
見る見る遠くなっていく福村を見ながらユキが快に問う。
「知らん。自業自得だ」
快は素っ気なく答えるだけだった。

そんなことがありつつ、快とユキは無事に文月学園に到着した。
「しかしなあ・・・」
快は上履きに履き替えながらため息をついた。
「？」
ユキが首を傾げる。
「Ａクラスに負けちまったから設備がランクダウンするだろ？ババアは上げるより下げる方が変更が早いって言ってたから昨日のうちにもう変更されてるかもしれないんだぜ？」
快は昨日召喚獣の点数が０点になったことにより、補習を受けた。
その帰りに学園長から聞いたのだ。

「あー・・・そういうことか」
ユキは納得したように苦笑する。
「でも、あれより下ってどんなのだろうね？」
「さあな？いよいよ何もなかったりするんじゃないか？」
そんな話をしているとFクラスの障子の前に着いた。意を決して障子を開くと、
「あれ？」
見慣れたミカン箱と座布団がいつも通り机と椅子の代わりをいていた。
「快、天野さん、おはよう」
明久が快達のところへやってきた。
「おう、なあ、なんでなにも変わってねえんだ？」
明久に聞くと代わりに雄二が答えた。
「昨日の装甲暴走の一件でAクラスの奴らがババアにFクラスの設備のランクダウンをやめるよう言ったらしい。お前が装甲の暴走を止めてくれたお礼だとよ。素直にありがとうが言えない連中だぜ」
「ふーん。ってことは俺の自爆のおかげ？」
「まあ、そういう言い方もできなくはないか」
いやあ、あははと快が照れ笑いをしているとFクラスの数人が白目をむいている福村を抱えてやってきた。
「どうしたの!?福村君に何があったの!?」
明久があわてて駆け寄る。
「なんか道端に倒れてたぞ」
「行き倒れ!?」
「ふん、自業自得だ」
狼狽する明久とどうでもよさそうな快。
「なんだ？快、お前なんか知ってるのか？」
そんな様子を見て、福村を覗き込みながら雄二が快に聞いた。
「ああ、実はな・・・」
かくかくしかじかと話すと一同は口をそろえて

『自業自得だな』
と言った。
「じゃあ、しばらくは設備の変更はないのか。よかったよかった」
快は安心した。だが雄二は真面目な顔をして言った
「まあ、どこぞのクラスに宣戦布告されない限りだけどな」
「あれ？もう私たちのクラスは宣戦布告できないの？」
ユキが快に聞いた。
「ああ、学園のルールで負けたクラスはその学期中は宣戦布告ができないんだ」
「そうなんだ」
ユキは納得したように頷いた。ふと見るとムッツリーニがカメラのレンズをものすごい気迫で磨いていた。
「どうしたんだムッツリーニの奴、いつもと違うぞ？」
「ああ、それはね時間割を見ればわかるよ」
快の疑問に明久が答えた。
「時間割？」
快は壁に貼られている時間割表を見た。そして納得した。
「ああ、そういうことか」
快はある科目を見て納得した。３時限目の保健体育である。
「・・・・・・」
コォォォォォと体から流れる気が本気さを物語っている。
「流石はＡクラスの保健体育が得意の奴に勝っただけのことはあるな」
「ああ、そうだな」
「・・・そう言えば雄二、昨日は逃げ切れたのか？」
快が雄二に聞くと
「ふっ・・・、逃げ切れたと思うのか？」
となにやら達観したような目をして遠くを見た。
「ああ、やっぱり・・・。まあ、何をされたかは聞かねえよ」
快は昨日の目の据わった霧島を思い出した。

「ああ、そうしてくれ」
雄二は快の方を見ずに言った。
（一体何されてんだ・・・）
そんなことを思っているとチャイムが鳴り、鉄人こと西村先生が教室に入ってきた。
「では朝のＨＲを始める。全員席に着け」
快はまだ知らなかった。この日の保健体育で数多の鮮血が飛び散ることに。

俺と登校と自業自得と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
今回は快とユキの朝の出来事から書いてみました。福村は意外と脚力あるかもしれませんね。バイクに追いつくなんて（笑）。さて次回はこの日の保健体育で何かが起きます。では次回もお楽しみに！

俺と体育と明久の悲鳴と・・・、

「位置について、よーい、スタート！」
保健体育の教師、大島武先生がピッ！とホイッスルを吹き、それを合図に２レーンから２人ずつ走り出す。今は１００メートル走のタイム測定の真っ最中である。すでに測定が終わった快はそれを後ろの方で見ている。隣ではムッツリーニが今か今かと女子の出番を心待ちにしている。
「お」
「・・・！！」
そして待ちに待った最初の女子はユキだった。隣に立っているのは北山健一は、確か陸上部のエースとかなんとか。Ｆクラスには学力が低い生徒が集まっているが、明久のような本当のバカの他に部活動などに勤しみ、勉強をする時間がない者もいる。秀吉などがいい例である。彼？は演劇部の期待の星としていつも部活動に忙しい。
「ふっふっふ・・・天野、俺の俊足に驚くなよ？」
北山は余裕の笑みを浮かべる。対するユキは
「負けないわよー！」
と自信満々のようだった。
「位置について、よーい・・・」
ムッツリーニがサッとカメラを構える。
「スタート！」
ピッ！ビュオン！その時、ユキの走りを見ていた誰もが驚いた。ユキはあのボルトもびっくりなほどの速さでレーンを走り抜けた。
「・・・・・・」
ポロッと大島先生の口からホイッスルが落ちる。辺りがぽか～んという空気になった。
（まあ、そうなるだろうな・・・）
快は心の中で一人頷いていた。ユキはハイパーショッカーに改造さ

れた改造人間である。おそらく肉体改造も施されているだろう。だからどちらかと言えば反則であり、常人が敵う相手ではない。
「・・・撮影完了・・・」
ムッツリーニが撮った画像のデータをチェックしていた。
「撮れたのか!?」
快はその画像を横から見て驚いた。あれほどの速さで移動していた被写体(ユキ)を全くぶれることなく撮れる撮影技術はもはや神業である。
「・・・」
北山が無表情でゴールした。そしてゴールすると同時にガックリと膝から崩れ落ちた。
「は・・・速すぎるだろ・・・」
遠くからではっきりとは見えないがおそらく彼は涙目だろう。
「快、どうだった?私の走り、すごいでしょ!」
ユキがタタタとしかしものすごい速さで快の前にやってきた。
「ユキ、ちょっとこっち来い」
快はユキをグラウンドの隅の方へ連れて行く。
「どうしたの?」
「どうしたもこうしたもあるか。お前、微妙にズルしただろ?」
「ぎく・・・そ、そんなことないよ。あは、あははー」
ごまかすように笑うユキに快は言う。
「ぶっちゃけ言って、お前改造人間の力使ったろ?」
「げ・・・やっぱりばれてた?」
快の思った通りユキは改造人間の力を使っていた。
「ダメだろズルしたら。見ろ、北山の奴もう半泣きだぞ」
快は北山を指差した。ほかの陸上部の連中に慰められている。
「あら~・・・ちょっとやりすぎたかな?」
ユキは困ったように笑った。
「あんまりその力使うなよ。変に目立って面倒なことになるのは御免だからな」
「はーい」

快とユキは皆がいる方へ戻った。するとムッツリーニがまたカメラを構えていた。誰が走るのかと思えば姫路と島田だった。
「瑞希・・・ウチの実力見せてあげるわ！」
メラメラと闘志の炎を燃やしている島田に
「あ、あはは・・・」
とたじろぐ姫路。
「位置について、よーい、スタート！」
ピッとホイッスルが鳴り、走り出す島田と姫路。島田は快調な走りで姫路との差を広げていった。
「・・・・」
カシャカシャカシャカシャ！とものすごい速さのシャッター音が隣から聞こえる。
「ある意味、こっちもすごいよね・・・」
ユキがムッツリーニの方を見ながら言う。
「ああ、ん？なんかムッツリーニが震えだしたぞ」
「・・・（プルプル）・・・」
震えだしたと思ったらダラダラダラダラと蛇口をひねったようにムッツリーニの鼻から鼻血が流れ出た。
「ある意味、あっちもすごいよね・・・」
ムッツリーニの左隣にいた明久が走っている姫路、の揺れる胸を見ながら言った。
「ああ、そうだな」
快は鼻血を流しながらもシャッターを切り続けるムッツリーニにも驚いた。
「どうアキ、ウチ速いでしょ？」
島田が明久の近くにやってきた。
「うん、すごく速かったよ。僕、もしかしたら美波に勝てないかも」
「そ・・・そう？じゃ、じゃあ後で一緒に・・・」
明久の言葉に顔を赤くしている島田。そこに姫路がやってきた。
「ハア、フウ、美波ちゃん、速いですね・・・全然敵いませんでし

た」
息を切らしながら言う姫路に明久が
「そんなことないよ姫路さん。姫路さんは美波に絶対勝てるものを持っていぎゃあああああ!?」
励ましの言葉をかけようとして全部言い切る前にその横にいた島田に思いっきり腕を極められていた。
「ふーん、アキ、ウチは瑞希のどこに負けてるのかしら?」
「いだだだだ!!い、言えないよ!そんなこと!」
明久が言うと、ギリ、と島田はさらに強く腕を極めた。
「正直に言わないと、関節外れちゃうわよ?」
あだだだ!!と苦悶の表情の明久を憐み、快が助け船を出す。
「落ち着け島田。明久が言ってるのは学力のことで、別にお前の気にしてるようなことは一切考えてないぞ」
「そうなのアキ?」
「いでででで!!そ、そうです!別に美波の胸の大きさと比べてなんか・・・」
ポキッと小気味良い音が聞こえた。
「いっぎゃあああああ!!」
明久の悲鳴が春の青空に響き渡った。

俺と体育と明久の悲鳴と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
今回はユキがものすごい身体能力を発揮しました。それを表現するためにどんなものと比べようかと考えていたら近くにウサイン＝ボルトさんの表紙の雑誌が置いてあったのでそれを使わせてもらいました。
さて、次回は休み時間にある事件が起こります。一体何が起こるのでしょうか？
次回もお楽しみに！・・・と言いたいところですがごめんなさい！明日から二週間ほど書けなくなります。ちょっとだけ待っててください！絶対続きは書きますから！

「はあ、散々な目にあったよ・・・」
明久がため息をつき、制服に着替えながら言った。時刻は４時限目の前の休み時間である。
「あれはお前が悪いだろ」
「全くだ。せっかく俺が助け舟を出してやったて言うのに・・・って言うかなんでもう腕が治ってるんだよ」
雄二と快が同様に着替えながら明久に言う。更衣室の隅ではムッツリーニが鼻血を垂らしながら撮ったユキたちの写真を整理していた。
「・・・そう言えば秀吉は？」
着替え終えた快は秀吉がいない事に気付いた。
「ああ、たぶん教室で着替えてるんだろ」
雄二がロッカーの扉を閉めて答えた。
「なんでまた？」
「察しろよ」
雄二は顎をしゃくって快に周りを見させた。
「ああ、なるほど・・・」
快は苦笑しながら更衣室のドアを開け、教室に向かおうと外に出た。

「あれー？おかしいな」
男子とは別の位置にある女子更衣室からドア越しにユキの声が聞こえてきた
「どこにもありませんね・・・」
姫路が困ったような声をあげる。
「なんでウチのはあるのかしら？」
島田も同様に声をあげる。
「ユキー？どした？」
快がドア越しにユキに話しかける。

「姫路さん、美波、何かあったのかい？」
明久も話しかけた。すると、体操服姿のユキと姫路、そして制服姿の島田が出てきた。
「なんでまだ着替えてないんだ？」
快が聞くとユキは肩を落としながら答えた。
「着替えがないのよ」
「何？」
「着替えがどこかに言っちゃったんです」
「なんでかウチの以外の制服が無くなってるのよ」
女子3人が困っているとドタバタと上から騒ぐような音が聞こえ、パリン！と乾いた音も聞こえた。
「快・・・」
ユキが快の服の裾を引っ張った。
「どうした？」
ユキは怯えているように震えていた。
「上の教室に何かいる・・・」
快は蒼ざめた。女子更衣室の真上の教室はFクラスの教室なのだ。
「・・・秀吉！」
ダッと快とユキは走り出した。
「あっ、快！天野さん！どこ行くの！」
2人の行動に気付いた明久が快とユキに聞いた。
「「ちょっとトイレ！！」」
2人同時に答えて教室に向かった。

「秀吉！」
快は障子を開き、教室の中に入った。そこには明らかに荒らされた痕跡のあるクラスの備品と押し倒されたように床に手をついている体操服姿の秀吉の姿があった。
「怪我はない！？」
ユキがあわてて駆け寄る。

「う、うむ、目立った怪我はしておらんようじゃ」
秀吉が答えるとユキはホッとしたように笑った。
「一体何があった?」
快が割れた窓ガラスを見ながら秀吉に聞いた。
「わしにもさっぱりわからん。教室に戻ってきたら何やら灰色の化け物が、ワシの着替えを持っていくところに出くわしたのじゃ」
「「化け物!?」」
快とユキは同時に声をあげた。
「そして着替えを取り返そうと掴みかかったのじゃが、全く歯が立たなくての」
「どんな奴だった?」
快が聞くと秀吉は首を傾げながら答えた。
「うーむ、よく見えなかったが何であろう・・・人の姿をしておったがトカゲのように見えなくも・・・」
「トカゲ・・・」
快が秀吉の言葉を繰り返していると、ユキが快に話しかけた。
「快・・・その灰色のトカゲの化け物、まだこの学校にいるみたいだよ」
「何だと!」
快が振り向くとユキは窓の向こうの校舎の奥の木が点々と生えている場所を指差した。
「感じる・・・あそこに隠れてる」
「便利だなそれ!よし、ちょっと行ってくる!」
快は駆け出した。
「どこに行くのじゃ快!」
秀吉の問いかけに快は叫ぶように答えた。
「着替えを取り返してくる!」
「取り返すじゃと・・・!?危険じゃ!」
秀吉は尤もな意見を言った。ユキはそんな秀吉の肩に手を置き
「大丈夫だよ。快は強いんだから!」

諭すように言った。

快が化け物退治に向かったほぼ同時刻の文月学園旧校舎屋上、そこにはマントとロープで身を包んだネオ死神博士とともにいた男が立っていた。彼の手には1枚のカードと大きな拳銃のようなものが握られていた。

「・・・さあ、見せてもらおうか」

彼はつぶやき、カードを拳銃に装填した。

俺と暗躍と着替え泥棒と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは！
前回のあとがきで2週間ほど書けなくなると言いましたが、時間の合間を縫ってかけるよう努力しました！まあ、皆さんが楽しみにしていてくれているかどうかは、この際置いといて（置いとくなや）、これからも少しずつアップしていきたいなと思っております！
さて次回は快が化け物と対峙します。はたして化け物の正体はなんなのか！次回もお楽しみに！

俺と乱入と超感覚と・・・、

「さあて・・・どこにいるんだ?」
快はユキが示した場所に着き、きょろきょろと辺りを見渡す。しかしどこにも怪しい人影、ましてや化け物の影などどこにも見当たらない。すると
「フッ・・・フフ、フフフフ」
と何やら押し殺したような笑い声が聞こえた。見ると1つの茂みがガサガサと揺れていた。
「・・・おりゃあ!」
快は試しに落ちていた大きめの石ころをその茂みに向かって投げた。
「!?」
茂みから突然何かが飛び上がった。それは秀吉が言っていた灰色の化け物などとは程遠く、40代後半の無精ひげを生やした男だった。
「お前だな、着替え泥棒は!」
ビシッ!と指差す。男の手には確かに3つの袋が握られていた。
「さあ!観念してそれを渡せ!」
快が言うと、男は
「ウアアァァァ!!」
と雄叫びをあげ、姿を変貌させた。灰色の体に、肩口から鞭のようなものが伸びている両腕、頭部はトカゲのような顔で、目は突出している。
「おお、秀吉の言うとおりだった」
快はベルトを巻きながらつぶやく。
「変身!」
《カメンライド　ディケイド!》
快はディケイドに変身し、カメレオンオルフェノクと対峙する。するとカメレオンオルフェノクは持っていた3つの袋をなんと腹部にできた大きな口に放り込んだ。

「マジかよ！」
驚いている快をよそに両腕の鞭のようなものをしならせ、快に襲い掛かった。
「あらよっと！」
快はそれをひらりと躱す。そしてライドブッカーソードモードで本体を切り付けた。
「グッ・・・！」
カメレオンオルフェノクは快と距離を取るために後ろに下がった。
「逃がすかよ！」
《アタックライド　ブラスト！》
快はライドブッカーをソードモードからガンモードにし、カメレオンオルフェノクを撃った。撃たれたカメレオンオルフェノクは地面を転がり、姿勢を立て直した。
「どうしたどうした！その程度か！」
快が挑発するとカメレオンオルフェノクはスーッと体を景色に溶け込ませた。
「消えた・・・！うあっ！」
快はどこかから攻撃を受けた。快は顔面を強く殴られたような感覚を覚えた。
「ククク・・・」
カメレオンオルフェノクが姿を現す。
「この野郎！」
快はライドブッカーで切りかかる。しかしあっさりと躱され、蹴りを食らってしまう。再び姿を消したカメレオンオルフェノクは快の後ろから攻撃を加えた。
「グァァ！！」
連続攻撃を食らい、吹き飛んだ快は対抗する手段を考えた。そして2枚のカードを取り出す。
《カメンライド　クウガ！》
快はディケイドから古代より人々をグロンギから守っていた戦士ク

ウガに変身し、さらにカードを装填する。
《フォームライド　クウガ！　ペガサス！》
快は超感覚を持つ、クウガの射撃に特化したフォーム、ペガサスフォームに変身し、ペガサスボウガンを構え、消えているカメレオンオルフェノクを探す。しかし、探すと言っても見渡すのではなく、ただじっとしているだけである。研ぎ澄まされた超感覚の力で敵の足音や呼吸音から敵の位置を把握する。
「・・・そこだっ！」
快は腰を捻って後ろに攻撃した。
「グハッ！」
攻撃は命中し、オルフェノクの胸に封印の刻印が刻まれる。
「グ・・・グアアアア！！」
カメレオンオルフェノクは爆散した。
「ふぅ・・・」
快はディケイドに姿を戻して、落ちていたユキたちの制服が入った袋を拾い上げる。
バキュン！
突然、地面に弾丸が撃ち込まれた。
「！？」
快はサッと身構える。すると快の前に立っていたのは、
「・・・な・・・！」
仮面ライダーファイズの世界の戦士、仮面ライダーデルタが立っていた。

俺と乱入と超感覚と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
今回はユキたちの着替えが盗まれ、その犯人のカメレオンオルフェノクを快が倒す話でした。しかし！まだ快の戦いは終わっていません！なんと仮面ライダーデルタが快の前に登場しました！次回はデルタとの戦いを書きます！お楽しみに！

俺とデルタと絶叫と・・・、

カメレオンオルフェノクを倒した快の前に現れたのは仮面ライダーデルタ。
「・・・・・」
デルタは無言のまま快の前に立っている。
（おかしい・・・）
快には腑に落ちないことがあった。先程まで全く気配すら感じなかった。ペガサスフォームになり、超感覚を持っていたにもかかわらず快はデルタの存在に気付かなかったのだ。
「・・・場所を変えるぞ」
快がどういう事なのか考えているとデルタはそう言って快に背を向けた。すると空から灰色のオーロラが降下してきて、快とデルタを飲み込んだ。

オーロラの向こうに出た快は夜の港に立っていた。
「どこだここは？」
快が持っていた着替えの入っている袋を置き、辺りを見渡す。
「始めるか・・・」
デルタの声が聞こえ、振り返るとデルタがパンチを繰り出してきた。
「クッ・・・」
快はそれを躱し、パンチを打つ。しかしそれはデルタの左手に止められ、キックを食らった。
「待て！どうして俺がお前と戦わなくちゃならない！？一体何が目的なんだ！！」
体勢を立て直しながら快はデルタに向かって叫ぶ。
「・・・・・Ｆｉｒｅ」
《Ｂｕｒｓｔ　Ｍｏｄｅ》
しかしデルタは答えずデルタフォンを構え、快に向かって光の弾丸

を放つ。
「無視かよ畜生ォ！」
快はそれを躱し、ライドブッカーガンモードで対抗する。しかしデルタは快の銃撃を全く気にせず快に接近し、再び肉弾戦に持ち込もうとする。
「そっちがその気なら・・・！」
快はライドブッカーからカードを取り出し、ドライバーに装填する。
《カメンライド　キバ！》
快はディケイドからキバに変身し、さらにカードを取り出す。
「こっちも本気で行くぞ！！」
《フォームライド　キバ！　ドッガ！》
快はキバの標準フォームのキバフォームからパワー重視のドッガフォームに姿を変えた。ドッガハンマーを接近してきたデルタに振り下ろす。
「・・・・！」
快はデルタが怯んだ隙に、さらにもう一撃加える。盛大に吹っ飛び、近くのドラム缶の山に激突するデルタ。
「やったか！？」
快は動かないデルタを見て言う。
「・・・」
しかし、すぐにデルタは起き上ってまた快に接近する。今度はさっきよりも速く動いていた。至近距離で銃撃を浴びた快はヨロリと後ろに下がる。デルタは軽快なフットワークで快を翻弄し、打撃と銃撃のコンビネーションで的確にドッガの弱点を突いて攻撃した。
「グッ・・・それなら！」
快はドッガへの変身を解除し、新たなカードをドライバーに装填する。
《フォームライド　キバ！　ガルル！》
快は今度はスピードを重視したガルルフォームにフォームチェンジする。

「ハアァッ！！」
ズバァッ！とガルルセイバーでデルタを縦一文字に斬る。デルタは大きく仰け反り、バランスを崩した。その隙を見逃さず、快は回転切りを浴びせた。
「ウグ・・・！」
強力な攻撃を受けたデルタは数歩後ろに下がる。快は右へ左へ素早く動き回りデルタを翻弄しながらあることに疑問を持つ。
（何だ？何かがおかしい・・・）
快はデルタとの戦いの中、違和感を感じていた。しかしその違和感が何なのかは快自身にもわからなかった。
（いや、今は戦いに集中だ！）
快は違和感を振り切るようにガルルセイバーで切りかかる。するとデルタはミッションメモリーをデルタムーバーにセットした。
「Ｃｈｅｃｋ」
《Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ》
快の胸部にデルタムーバーから発射された三角錐状のポインターが突き刺さり、快の動きを止める。
「しまっ・・・！」
快が悔やんだ時にはデルタは高くジャンプし、ポインターに吸い込まれるように強烈なキックを快に叩き込んだ。
「ウワァァァ！！」
デルタの必殺技『ルシファーズハンマー』を受け、快はディケイドの姿に戻る。並みのオルフェノク程度なら簡単に撃破できたであろう強力な一撃を受けたが、まだ戦えると自分に言い聞かせ、快は立ち上がる。
「これで・・・どうだァ！！」
快は必殺のカードをドライバーに装填した。
《ファイナルアタックライド　ディディディケイド！》
デルタの前に大きなカードが並び、快のジャンプに合わせて位置が移動する。

「Ｃｈｅｃｋ」
《Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ》
対するデルタもポインターを射出し、再び『ルシファーズハンマー』の体勢に入る。
「おりゃあああああ！！」
快の『ディメンションキック』とデルタの『ルシファーズハンマー』が激突する。しかし、快の攻撃の方が威力が高く、徐々に押し返し、最後はポインターを破壊しデルタを地面に叩き付けた。
「今度こそ・・・やったか？」
フラフラになりながら、デルタの方を見る。
「・・・・・」
デルタは仰向けの状態でピクリとも動かない。おそるおそる近づき、話しかける。
「おい、どうして俺を襲ったんだ？お前の目的は・・・」
何だ？と言おうとした瞬間、デルタは徐々に透けていき、文字通り消えてしまった。
「何なんだよ・・・一体」
１人つぶやき、変身を解除する。すると夜空に再び灰色のオーロラが現れ、ゆっくり下降してきた。
「・・・あっ、着替え着替え・・・」
ハッと気が付き、急いで袋を置いた所に戻り着替えが入った袋を拾う。それと同時にオーロラは快の体を飲み込んだ。

目を開けると、快はカメレオンオルフェノクを倒した場所に立っていた。
「よかった、帰ってこれた・・・」
ホッと安堵し、校舎に向かって歩き出す。しかし、目の前が急に暗くなった。
「？」
顔をあげると、鬼の形相で怒りのオーラを湛えた鉄人こと西村先生

が立っていた。
「天野・・・私の授業をサボるとはいい度胸だな・・・！」
「へ？」
快は腕時計に目を向ける。時計の針は午後１２時３３分を指していた。ちょうど４時限目が終わって昼休みに入った時間である。
ゴゴゴゴゴ・・・とそんな効果音が聞こえてきそうなほどの怒りのオーラで快を圧倒する鉄人。
「ま、待ってくれ鉄じ・・・西村先生！俺は今さっきまでユキたちの着替えを盗んだ奴と取っ組み合いやってて、辛くも勝利を収めたところなんだ！ほ、ほら！証拠にちゃんと着替えの入った袋を持ってるんですよ！」
アワアワと必死に弁解する快だが、鉄人には通じなかった。
「問答無用！私の授業をサボった罪は重いぞ！！」
「なんでだ！畜生、こうなったら逃げるが勝ちだ！」
ダッ！と走り出す快。だがデルタとの戦いで疲労している体で鉄人から逃げられるわけもなく、
「おとなしくしろ！生徒指導室でたっぷりとお前がサボった授業をしてやる！」
あっさり捕まった。
「嫌だ！殴られながらノートを取るなんて嫌すぎる！」
ジタバタともがく快を引きずりながら鉄人は校舎に歩き出した。
「嫌だァァァァァァ！！」
春の空に快の絶叫が響いた。

余談だが、鉄人の特別授業から帰ってきた快を見てユキは
「全てを諦めた世捨て人のような顔をしてる」
と言ったという。

俺とデルタと絶叫と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
今回はデルタとの戦いをメインに書きました。デルタは個人的にそれなりに好きなライダーで、白と黒の渋い感じが好きですね。
それにしてもデルタとの戦いの後に鉄人から逃げ切れるわけありませんよね。
さて次回からはついに第二巻のシナリオ、学園祭編がスタートします！あんなことやこんなことなんかも起こったりしそうですね！
それでは次回もお楽しみに！

俺たちと中華と祭りの準備と・・・、

文月学園の通学路には立派な桜並木がある。それが徐々に緑色の葉をつけ始める頃、文月学園では一大イベントの学園祭が行われる。生徒たちは一丸となってクラスでの出し物を製作し、教室の改装などに勤しんでいる。お化け屋敷をするクラスは教室を改装し、飲食店をするクラスは材料の手配などで忙しい毎日を送っている。そんな学園祭の準備期間の真っただ中で快達2年Fクラスは・・・

「さあ来い吉井！」

「勝負だ、須川君！」

「お前の球なんて場外までかっ飛ばしてやるぜ！」

「言ったな！こうなったら意地でも打たせるもんか！」

みんなで一丸となって野球をしていた。明久がピッチャーで須川がバッターである。明久のバッテリーはかつて神童と言われていたらしい雄二が務めている。

「・・・なんか、違くね？」

「うん、違うね」

快はユキとベンチに座って観戦していた。姫路と島田も明久たちの野球を観戦している。

「全く・・・男子たちは何かやろうとは思わないのかしら・・・」

島田が嘆息していると、雄二が明久にサインを送っていた。

「・・・それじゃ反則じゃないか！」

明久が雄二のサインに反論しているのを快は見ていた。

「どんなサイン出したんだろね？」

ユキの問いかけに快は

「さあ？」

と興味なさげに答えた。

「貴様らぁ！学園祭の準備をサボって何をしているか！」

「ヤバい！鉄人だ！」

そこへ鉄人がやってきた。怒髪天をつく勢いでズンズンと接近してくる鉄人を前に蜘蛛の子を散らすように逃げるFクラス男子たち。
快とユキはこのどさくさに紛れてさっさと教室に戻った。

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが・・・」
雄二が教壇の上に立って快達を見下ろしながら宣言した。
「とりあえず議事進行と実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるから、後は任せた」
心底どうでもよさそうな顔をした雄二。召喚戦争のときとはえらい違いである。
「学園祭だってさ。ユキ、どうする?」
快は隣に座っているユキに話しかける。
「うーん、どうせなら楽しいことやりたいよね」
少し考えてからユキは答えた。
「また漠然としてるな・・・」
快が微妙に呆れていると、咳き込んでいる姫路に明久が心配そうに声をかけているのが見えた。
「そのうち、なんとかしないとなぁ・・・・・・」
と明久がつぶやくのに、
(確かに・・・)
と心の中で返した。次の戦争まであと2か月程ある。それまでに体が弱い姫路が倒れでもしたら洒落にならない。
「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでいいか?」
雄二が島田に顔を向けた。
「え、ウチがやるの?う~ん・・・、ウチは召喚大会に出るからちょっと困るかな」
勝気なつり目とポニーテールが特徴のドイツからの帰国子女の島田が困ったように笑う。
「雄二、実行委員は姫路さんが適任だよ」

「え？私ですか？」
突然話を振られて姫路が驚く。しかし雄二は
「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いているうちにタイムアップになる」
と明久の意見を却下した。
「それにねアキ、瑞希も大会に出るのよ」
「え？そうなの？」
快は明久たちの会話を聞き、窓の外をぼんやりと見ながら考えていた。
（召喚大会ねぇ・・・）
召喚大会とは文月学園の世界中から注目されているシステムを公開する場で、まあ、ぶっちゃけた話、ただの宣伝イベントである。生徒の自由参加で、２人１組のペアで参加した生徒たちが召喚獣で対戦し、優勝ペアを決める。
「そう言えば、快は出るの？」
ユキが快を覗き込むように見ながら聞いた。
「あー、まあ、気が向いたら出ようかなとか考えてる」
現在、快の召喚獣の装甲であるウイングゼロは絶賛修理中なので残っているのはディケイドの力だけである。
「そういうお前はどうなんだ？」
快が聞き返すとユキは
「まあ、気が向いたら出ようかな」
と答えた。
「俺と言ってること変わらんぞ・・・」
「いやあ、あはは」
そんな会話をしていると、雄二が自分の位置に戻って、そのまま寝る姿勢に入っていた。そして入れ替わるように明久と島田が立ち上がった。
「じゃあ、ウチは議事進行をやるからアキは板書をお願い」
「ん、了解」

仕方なさそうにふるまう島田だがどこか嬉しそうである。
「はい、じゃあ何かやりたい人ー」
「・・・・（スクッ）」
「はい土屋」
島田がムッツリーニこと土屋康太を指す。
「・・・・・写真館」
キラリと目と愛用のカメラを光らせ言うムッツリーニ。
「・・・・土屋の言う写真館って、かなり危険な予感がするんだけど」
島田がものすごく嫌そうな顔をした。
「アキ、一応意見だから黒板に書いてもらえる？」
「あいよー」
明久がボロボロの黒板に短いチョークで文字を書く。
『候補？　写真館［秘密の覗き部屋］』
タイトルが明らかに誤解されそうなものだった。
「次。はい、横溝」
「メイド喫茶・・・と言いたいけど、流石に使い古されていると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」
「ウェディング喫茶？それってどういうの？」
「別に普通の喫茶店でウェイトレスがウェディングドレスを着ているんだ」
横溝の提案に皆が話し始める。
『斬新ではあるな』
『憧れる女子も多そうだ』
『でもウェディングドレスって動きにくくないか？』
『調達するのも大変だぞ？』
『それに、男は嫌がらないか？人生の墓場、というくらいだぞ』
などなど会話が繰り広げられていく。
「ほら、アキ。今の意見を黒板に書いて」
「あ、うん」

明久が横溝の提案を黒板に記す。
『候補？　ウェディング喫茶［人生の墓場］』
「なんでその言葉のチョイスなんだよ・・・」
快は思わずつぶやく。しかし、皆はあまり気にしないようだ。
「さて、他に意見は・・・はい、須川」
異端審問会会長でもある須川が立ち上がる。
「俺は中華喫茶を提案する」
「中華喫茶？チャイナドレスでも着せようっていうの？」
島田が訝しむ目で須川を見る。しかし須川は
「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そうやってイロモノ的な格好をして稼ごうってわけじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉があることからもわかるように、こと『食べる』という文化に対しては中華ほど奥の深いジャンルはない。近年、ヨーロピアン文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが、本来食というのものは・・・」
と熱弁を振るう須川に少々面食らった快達。快は須川の言っていることが理解できていたが、クラスの半数がキョトンとしていた。
「アキ。それじゃ、須川の意見も黒板に書いてくれる？」
「あ、うん」
返事をしたはいいが明久は何を書いていいかわからない顔をしている。
「どうしたの？早く書いてよ」
「りょ、了解」
明久は島田に催促され、
『候補？　中華喫茶［ヨーロピアン］』
と書いた。それと同時に筋骨隆々のＦクラスの担任の鉄人こと西村先生が教室に入ってきた。
「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」
「今のところ、候補は黒板に書いてある３つです。」

鉄人が黒板に明久が書いた候補を見つめる。
『候補？　写真館［秘密の覗き部屋］』
『候補？　ウェディング喫茶［人生の墓場］』
『候補？　中華喫茶［ヨーロピアン］』
「・・・・補習の時間を倍にした方がいいかもしれんな」
ため息をつきながら鉄人が言う。
『せ、先生！それは違うんです！』
『そうです！それは吉井が勝手に書いたんです！』
『僕らがバカなわけじゃありません！』
補習の時間を増やされたくない皆が必死になって抗弁する。
「馬鹿者！みっともない言い訳をするな！」
それを鉄人が一喝して制する。
「先生は、バカな吉井を選んだこと自体が亜天の悪い行為だと言っているんだ！」
ズルッとなる快。
（そっちかよ・・・）
声に出そうになったがとても鉄人にそんなことは言えない。
「まったくお前たちは・・・・。少しは真面目にやったらどうだ。稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういう気持ちすらないのか？」
鉄人の台詞に一同がバッと顔を上げる。
『そうか！その手があったか！』
『何も戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！』
『いい加減この設備にも我慢の限界だ！』
一気に活気づいた教室で一際やる気を見せていたのは姫路だった。
「み、皆さん！頑張りましょう！」
握り拳を胸の前で固め、やる気を表現している。
「なんか瑞希ちゃん、やる気に満ち溢れてるね」
ユキが快に耳打ちした。
「ああ、なんでだろうな？」

快はここまで率先して動く姫路がらしくないと思えた。
そして喧々囂々の話し合いの末、

「はい！それではFクラスの出し物は中華喫茶に決定します！全員協力するように！」
僅差で中華喫茶が勝利し、Fクラスの出し物が決定した。
「それならお茶と飲茶は俺が引き受けるよ」
須川が立ち上がった。
「・・・・・・（スクッ）」
ムッツリーニも立ち上がった。
「ん？ムッツリーニも料理できるのか？」
快が聞くと
「・・・・・紳士の嗜み」
と答えた。
「そうか、じゃあ俺も料理の方に・・・」
と快も立ち上がろうとするが、それを須川が制した。
「いや、天野には材料運びをしてもらいたい」
「いいけど、なんでだよ？」
快が理由を聞くと
「クラスの中で唯一バイクを使っているから、荷物運びにすごく便利だ。それに荷物だけに割く人員も節約できる。今回は少しでも時間を無駄にはできないからな」
といかにもな答えを述べた。
「そうか・・・よし分かった。引き受けよう」
快は須川の提案を了承した。
「サンキュ。料理の方は任せてくれ！」
須川はグッと親指を上に向けた。
「まずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は須川と土屋のところ、ホール班はアキのところに集まって！」
島田の号令にワラワラと動き出すクラスの面々。

「それじゃ、私は厨房班に・・・」
姫路が須川たちのところへ向かおうとする。
「ダメだ姫路さん！キミはホール班じゃないと！」
明久がそれを止める。
『ナイス明久！』
『明久、グッショブじゃ！』
『・・・・・！（コクコク！）』
快、秀吉、ムッツリーニはアイコンタクトで明久を褒め称える。姫路のあの化学兵器で食中毒なんかが起こればすべておじゃんになってしまう。なんとしても姫路は厨房に行かせてはならない。
「え？明久君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」
姫路が何の曇りのない瞳で明久を見る。
「あ、えーっと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんに接した方がお店として利益が痛あ〝っ！み、美波！僕の体はサンドバックじゃないよ！？」
「か、可愛いだなんて・・・・明久君がそう言うならホールでも頑張りますねっ♪」
できればホールだけで頑張っていただきたいと切に願う快であった。
「アキ。ウチは厨房にしようかな～？」
「うん。適任だと思う」
「・・・・・」
「それならワシも厨房にしようかの」
「私も私も！」
秀吉とユキが須川たちの方へ向かう。
「秀吉！天野さん！何をバカなことを言ってるのさ。そんなに可愛いんだからもちろんホールに決まってみぎゃあぁっ！み、美波様！折れます！腰骨が！命に関わる大事な骨が！」
「・・・・・ウチもホールにするわ」
コォォォォ～とものすごいオーラを出しながら島田が明久に言った。

「そ、そうですね・・・。それが、いいと、思います・・・・」
「やれやれ・・・」
かくしてFクラスの人並みの生活が懸かった学園祭が幕を開ける。

俺たちと中華と祭りの準備と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
今回からバカとテストと召喚獣の第２巻のストーリーがスタートしました！
須川の長台詞はちょっと苦労しましたね。
さて、中華喫茶をやることになった快達Ｆクラスのメンバー。はたしてしっかり稼ぐことができるのか！？
それでは次回もお楽しみに！

「アキ、ちょっといい？」
放課後、帰ろうとする明久を島田が呼びとめた。
「どうしたの美波？何か用？」
島田の方に振り返る明久。
「用っていうか、相談なんだけどね」
「？」
近くでそれを見ていた快が島田の様子がおかしいこと気付き、それとなく聞き耳を立てる。
「相談？僕で良ければ聞かせてもらうけど」
「うん。ありがと。多分、アキが言うのが一番だと思うんだけど・・その、やっぱり坂本をなんとか学園祭に引っ張り出せないかな？」
島田はどうやら明久に雄二を呼び出してほしいようだ。
「う～ん、それは難しいなぁ・・・・。さっきも行ったけど雄二は興味がないことには徹底的に無関心だからね」
「そうなの・・・ねえ、天野はどう？」
どうやらばれていたようだった。快は肩を竦めて
「無理だな。あいつの事だ、どうせ学園祭の日も寝て過ごすんだろうよ」
と答えるしかなかった。
「でも、アキが頼めばきっと動いてくれるよね？」
なおも食い下がる島田。
「え？別に僕が頼んだからって、あいつの返事は変わらないと思うけど」
「ううん、そんなことない。きっとアキの頼みなら引き受けてくれるはず。だって・・・」
「そりゃ確かに、明久と雄二はよくつるんでるが、だからと言って別に」

「だってアンタたち、愛し合ってるんでしょう？」
「もう僕お婿に行けないっ！」
バッと顔を覆う明久。そしてドン引きする快、その隣にいるユキ。
「お前ら・・・そういう関係で・・・・」
「違うよ快！僕らは決してそういう関係じゃないよ！それに僕は断然秀吉の方がいいよ！」
「・・・あ、明久？」
と偶然近くにいた秀吉の動きが止まる。
「そ、そのお主の気持ちは嬉しいが、そんなことを言われても、ワシらには色々と障害があると思うのじゃ。その、ホラ。歳の差とか・・・」
頬を赤く染めて俯く秀吉。
「ひ、秀吉！違うんだ！ものすごい誤解だよ！さっきのはただの言葉のアヤで！それと、僕らの間にある障害は決して歳の差ぜはないと思う！」
「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」
島田の問いに
「え？あ、うん。そういうことになるかな」
と明久は答える。
「それにしても、どうしてそこまで美波ちゃんは坂本君を動かしたいの？」
ユキが共通の疑問を島田に投げかけた。
「実は・・・すごく深刻な状況なの」
島田の沈んだ面持ちに、快は表情を変えた。
「何があった？」
「本人には内緒にって言われたけど、事情が事情だし・・・。けどこの話はここにいる皆だけの秘密の話だからね？」
島田の念の押しようにただならぬ雰囲気を感じた。
「あ、ああ。分かった」
「実は瑞希なんだけど・・・」

「姫路さんがどうかしたの？」
「あの子、転校するかもしれないの」
「ほえ？」
明久の目の焦点がどこにも定まっていない。
「おい、島田。明久がオーバーロードしてるぞ」
「このバカ！不測の事態に弱いんだから！」
「明久、目を覚ますのじゃ！」
ガクガクと秀吉が明久の体を揺する。すると明久は虚ろな目で秀吉を見ながら言った。
「秀吉・・・、モヒカンになった僕でも、愛してくれるかい？」
「・・・どういう処理をしたら瑞希に転校からこういう反応ができるの？」
「ある意味、稀有な才能だのう」
「仕方ねえ、ユキ。ＧＯ！」
「了解！ちょっと痛いよ～、それ！」
バッッチィィィン！！とユキが思いっきり明久の頬をビンタした。
「ひでぶっ！」
某百烈拳を食らったような声を出した明久は、すぐに正気を取り戻した。
「・・・ハッ！？美波！姫路さんが転校って、どういうことさ！」
気を取り直して本題に入る。
「どうもこうも、そのままの意味よ。このままだと瑞希は転校するかもしれないの」
「このままだと・・・？」
「島田よ、さっきから話がつながらんのじゃが？」
秀吉が言うと島田は
「そうでもないのよ。瑞希の転校の理由が『Ｆクラスの環境』なんだから」
と言った。
「ああ、なるほど。そういうことか」

快は理解できた。
「どういうことなの、快？」
明久の問いに快は答えた。
「姫路の転校の理由がクラスの環境なら納得できる。おそらく姫路の転校には三つの原因がある」
「三つの原因？それはなんじゃ？」
「一つはミカン箱と座布団っていう設備、二つ目はこのボッロボロに老朽化した教室。そして三つ目はクラスメイトだ」
「クラスメイト？」
「ああ、Fクラスの代名詞は『バカの集まり』だ。これじゃ姫路の学力の向上は望めない」
「なるほど、問題だらけだね」
明久が納得したように頷く。
「アキ、あんたもその一因なのよ・・・」
島田が冷静に言う。
「あっ、だからあんなに瑞希ちゃんは学園祭の出し物が決まった時あんなに燃えてたんだ！」
ユキがポンと手を叩く。
「だろ？島田よ」
「うん、そうなの。瑞希のお父さんが転校を勧めてるらしくて、それで瑞希、『お父さんを見返すんですっ！』って・・・」
島田は暗い顔で頷いた。
「なるほどのう。じゃから喫茶店を雄二の手腕で成功させ、そして召喚大会で優勝し、父上殿の鼻をあかそうとしておったというわけじゃな」
秀吉がうむうむと頷いた。
「だからお願い！どうしても坂本の力が必要なの！坂本を呼んで！」
頭を下げる島田。
「・・・分かった！ダメもとで頼んでみよう！」
明久は携帯電話を取り出し、雄二に電話をかけた。

ｐｒｒｒと呼び出し音が響く。
『もしもし』
雄二の声を聴いて、一同がパッと明るくなる。
「あ、雄二？ちょっと話が・・・」
『明久か。丁度良かった。悪いが俺の鞄を後で届けに・・・げっ！翔子！』
「え？雄二。今何してるの？」
『くそっ！見つかっちまった！とにかく、鞄は頼んだぞ！』
「雄二！？もしもし！もしもーし！」
携帯からはツー、ツーと無機質な音が聴こえてくるだけだった。
「ダメか・・・」
明久はガックリと肩を落とす。
「どうやら、霧島から逃げておるようじゃったのう」
「やっぱり雄二を呼ぶことはできないのかな・・・」
「そんな！アキだって瑞希がいなくなるのは嫌でしょ！？」
島田が悲痛な声をあげる。
「・・・・いや、できる」
快はぽつりとつぶやいた
『！？』
一同は快の方を見る。
「閃いたぞ。雄二を呼び込むアイデアが！明久、秀吉、島田。協力してくれ！」
快にはある作戦があった。

俺と作戦と転校の危機と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
今回は姫路の転校の危機を知らされるところから雄二を呼び出す作戦が開始されるまでを書きました。こうやって原作にオリジナルなアイデアを入れていくのはとても楽しいです！
さて、それでは次回もお楽しみに！

俺たちと交渉と承諾と・・・、

ガラッと障子を乱暴にあけて雄二と明久が教室にやってきた。
「皆！雄二を連れてきたよ！」
明久が嬉しそうに告げる。
「おお、良くやったぞ明久！」
「ありがとアキ！」
秀吉と島田が明久のところへ走る。よく見ると明久の顔には殴られたような跡があった。
「いや、快と2人のおかげだよ！ありがとう！」
快の作戦はまず明久が雄二を捜索、発見し、行動を共にし、秀吉が声帯模写で鉄人に扮して明久と雄二を追いかけているように見せて誘導、そして最後は普通に説得するという作戦だ。
「それにしても、よく坂本君が女子更衣室にいるって分かったね」
「まあな。霧島の事だ。雄二がどこにいようと追い続けるだろう。雄二の事だからその裏をかいて男子禁制のところに逃げ込むと思ってな」
胸を張ってユキに誇らしげに説明する快。
「・・・で、話っていうのは何なんだ？」
雄二が状況の説明を要求した。

「そうか。姫路の転校か・・・・・」
快と島田から事の顛末を聞いた雄二は顎に手をあてて、考え込む。
「確かに、お前らの言う通り姫路の転校の阻止に必要なのは喫茶店の成功と召喚大会の優勝だな」
「どうする？こうなった以上はFクラスからも何人か出場した方がいいよな」
「ああ、翔子が参加するようだったら優勝は厳しいが、あいつはこういった行事には無関心だからな。島田と姫路の優勝も十分あり得

る。それにFクラスから優勝ペアが出れば姫路の親父さんも納得するだろう」

「うーん。姫路さんと美波のペアなら優勝できるかもしれないけど・・・」

明久はFクラスから出場する奴らは姫路と島田のペア以外は一回戦突破すら難しいと思っているのだろう。

「おいおい、明久。俺を忘れてるぜ」

快は明久の肩に手を置き、自信満々に言った。

「そうか快がいた！快なら大会の優勝も可能性があるね！」

明久にそう言われ、うんうんと頷く快。そこにボソリとユキが

「いざとなったら自爆でうやむやにできるしね」

とニシシと笑いながら言った。

「じ、自爆は最終手段だ！それにあれじゃ良くても引き分けになっちまう！あとすごく痛いんだぞ！」

快は自爆の時の痛みをを思い出し、背筋を凍らせる。

「快のペアは・・・そうだな、明久がやってくれ」

雄二は明久を指名した。

「え？僕？」

「なるほど。学園一の大バカ野郎のペアが優勝すればそれなりに好印象だからか」

快は納得する。

「ちょっと！どうゆうことだよ！」

「そういうことだ」

雄二も頷いた。

「ひどいっ！」

「俺は喫茶店の方でホールの奴らを指揮する。大会の方は任せたぞ」

「おうよ！」

「了解・・・それは良いとして、設備の方はどうするのさ？」

明久は雄二に聞いた。

「そんなのババアに直訴すれば良いだけだろう」

「大丈夫か？あのババアがすんなり受け入れてくれるとは思えないが」
快の頭に学園長の不敵な笑みを浮かべた顔が浮かぶ。
「あのな。ここは曲がりなりにも教育機関だぞ？いくら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」
雄二は全く気にしていないように説明する。
「そうか、じゃあ早速ババアの所へ行こう」
「そうだな。学園長室に乗り込むか。島田と天野と秀吉は学園祭の準備計画でも考えていてくれ。それと鉄人を見かけたら俺たちは帰ったと言っておいてくれ」
「了解じゃ。ついでに霧島にもそう伝えておこう」
秀吉がニッと微笑む。雄二が霧島の名前をきいて言葉に詰まっていた。
「ユキはそれが終わったら校門で待っててくれ」
快もユキに伝えておく。
「アキ、しっかりやってきなさいよ」
「快、頑張ってね」
島田とユキの声援を受け、３人は学園長室に向かった。

『・・・賞品の・・・・・として隠し・・・・・』
『・・・・こそ・・・・・・勝手に・・・・如月ハイランドに・・・・・』
新校舎の一角にある学園長室の近くに来ると扉の向こうから言い争うような声が聞こえた。
「？」
ふと明久が足を止めた。
「どうした、明久」
快が明久の方に振り返った。
「いや、中で何か話をしてるみたいなんだけど」

「そうか。つまり中にババアがいるってことだな。無駄足にならなくて何よりだ。さっさと中に入るぞ」
雄二はそう言ってずんずんと歩いた。
「んじゃ、行くぞ」
コンコンと立派な扉を快がノックした。
『失礼しまーす』
3人はお構いなしに学園長室に踏み込んだ。
「本当に失礼なガキどもだねぇ。普通は返事を待つもんだよ」
入ってきた快達を第一声でガキどもと言った長い白髪の文月学園の学園長藤堂カヲルはやれやれと言ったふうに首を横に振った。
「全く・・・取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません。・・・・・まさか貴女の差し金ですか？」
眼鏡を弄りながら学園長を睨みつけたのは教頭の竹原先生だ。鋭い目つきとクールな態度が一部の女子から人気というどこかキザっぽい感じの教師である。
「馬鹿なこと言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけでもないのに」
「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意なようですから」
と皮肉たっぷりに言い放つ竹原教頭先生。
「さっきから言ってるように何も隠し事なんかないよ。アンタの見当違いだよ」
「・・・・・そうですか。そこまで否定されるならこの場はそういうことにしておきましょう」
そう言って竹原先生はチラと部屋の隅に一瞬視線を送り、
「それではこの場は失礼させて頂きます」
踵を返して出て行った。
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」

一瞬快と竹原先生の視線が合ったがそれ以上のことは無かった。
「んで、ガキども。アンタらは何の用だい？」
何事もなかったかのように快達に話を振る学園長。
「今日は学園長にお願いがあって来ました」
雄二が口を開いた。
「お願い？どうせろくな事じゃないんだろう？」
学園長は鼻で笑いながら雄二の話を聞いた。
「まあ、聞くだけ聞いてやろうじゃないか」
しばらく考えてから口をニヤと吊り上げた学園長。これで人を教育しようというから不思議である。
「ありがとうございます」
「礼なんか言う暇があったらさっさと話しな、ウスノロ」
「わかりました」
雄二はウスノロ呼ばわりされたにもかかわらず眉一つ動かず話し始める。
「Fクラスの設備の改善の要求に来ました」
雄二がストレートに要件を言う。
「はん、それはそれは暇そうで羨ましいね」
鼻で笑った学園長に雄二に続いて快が説明する。
「今のFクラスの設備は、まるで学園長のカッスカスの脳みそのようです。隙間風が吹き込んでくるようなひどい有様でしてね」
「快。綻んでる。言動が綻んでるよ」
明久の指摘も気にせず今度は雄二が続ける。
「学園長のような戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害が及ぶ可能性があります。誰がウスノロだこの野郎」
雄二が本音をポロリ。そして最後は快と雄二のハモリで言った。
「「要するに、隙間風が吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せやクソババア、というわけです」」
２人の慇懃無礼な説明を受け、思案顔になる学園長。

「あの、学園長・・・？」
明久が恐る恐る声をかける。
「・・・・ふむ丁度いいタイミングさね」
小声で学園長が何かつぶやく。
「よしよし。お前たちの言いたいことはよくわかった」
「え？それじゃ、直してくれるんですか！」
明久が一歩踏み込む。
「却下だね」
「雄二、快。このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」
「まあ待て、明久。どうしてか説明してください。ババア」
快が明久をたしなめて、落ち着き払った態度で学園長に聞く。
「そうだな。なぜなんだ？ババア」
雄二も冷静に快に続いた。
「・・・お前たち、本当に聞かせてもらえると思ってるのかい？」
学園長が呆れ顔で快達を見る。
「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちろいガキども」
ピキリと快と雄二のこめかみに青筋が浮かぶ。
「それは困ります！そうなると、僕らはともかく身体の弱い子が倒れて」
明久が食い下がる。
「・・・と普段なら言ってるけどね」
明久の台詞を遮り、学園長が顎に手を当てて続きを話し始める。
「可愛い生徒の頼みだ。こっちの相談を受けてくれるなら考えてもいいよ」
「・・・その相談っていうのは？」
快が腕組みしながら聞く。
「今度の学園祭の召喚大会は知っているね？」
「ああ、出る予定だが？」
「その優勝賞品が何か知ってるかい？」

「そんなものがあるのか？」
快は優勝賞品があることは初耳だった。
「学校から贈られる正賞には、賞状とトロフィー、それと『白金の腕輪』副賞は『如月ハイランド　プレオープンプレミアムペアチケット』が贈られることになってあるのさ」
ここで学園長は言葉を切った。ペアチケットの言葉を聞き、ピク、と反応する雄二。
「ペアチケット？それがなんだっていうんだ？」
快が続きを促す。
「この副賞のペアチケットのよからぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ」
「回収？それなら賞品に出さなければいいじゃないですか」
明久の至極当然の意見に学園長は眉をしかめた。
「そうできるならとっくの昔にやってるよ。けどね、この話は教頭が進めたとはいえ、文月学園と如月グループの正式な契約だ。今更覆すわけにはいかないのさ」
「契約する前に気付いてくださいよ。学園長なんだから」
「で、その悪い噂ってなんなんだ？」
明久の言葉の後に快が言う。
「つまらない内容さ。如月グループは如月ハイランドに一つのジンクスを作ろうとしてるのさ。『ここを訪れたカップルは幸せになれる』っていうジンクスをね」
「？　それのどこが悪い噂なんです？いい話じゃないですか」
「そのジンクスを作るためにプレミアムチケットを使ってやってきたカップルを結婚までコーディネートするらしい。企業として、多少強引な手を用いてもね」
「な、なんだと！？」
雄二が突然声を荒げた。
「どした雄二？そんな慌てて」
快が聞くと雄二は真っ青な顔をして答えた。

「慌てるに決まってるだろ！今ババアが言ったことは『プレオープンプレミアムチケットでやってきたカップルを如月グループの力で強引に結婚させる』ってことだぞ！？」
「う、うん。言い直さなくても分かってるけど」
雄二は苦虫をかみつぶしたような顔になった。
「くそっ。うちの学校はなぜか美人揃いだし、試験召喚システムという話題性もたっぷりだからな。学生から結婚までいけばじんくすとしては申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然ってことか」
「なるほど、明久。大方雄二は霧島に連れて行かれた場合を考えてるんだろう」
快は雄二の狼狽っぷりに納得した。
「雄二、とりあえず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまで悪いことじゃないし、第一僕らはその話を知ってるんだから、行かなきゃいい話じゃないか」
明久が雄二に話しかけるが雄二は
「・・・絶対あいつは参加して、優勝を狙ってくる・・・・。行けば結婚、行かなくても『約束を破ったから』と結婚・・・・・。俺の、将来は・・・・・！」
と全く聞いていない。
「ま、そんなわけで、本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を勝手に決めようっていうのが気に入らないのさ」
学園長は快と明久を見ながら言った。
「つまり交換条件は」
明久の言葉に快が続く。
「その優勝賞品と交換。ってことか？」
学園長は頷き、
「そうさね。それができるなら教室の改修くらいしてやろうじゃないか」
と条件を提示した。

「無論、強奪、譲ってもらうのはだめだからね。アンタたちが優勝して賞品を手に入れるんだ」
Fクラウスの面々が真っ先に考えそうなことに釘を打つのも忘れてなかった。
「・・・・・僕たちが優勝したら教室の改修と設備の向上は約束してくれるんですね」
明久が学園長に聞いたが、学園長は断った。
「何言ってんだい。やってやるのは教室の改修だけ。設備についてはうちの教育方針だ。変える気はないよ」
「でも！」
と明久は食い下がったが快がそれを制した。
「無理だ明久。ババアに譲る気がないのは明白だ。それに・・・」
快は学園長の方を見ながら言った。
「喫茶店で出た利益をそっくりそのまま設備の購入に使ってもいいんだろう？」
「ふむ、それぐらいはいいよ。勝手におし」
「ありごとうございます」
快はニッと笑った。
「わかりました。この話、受けましょう」
明久が学園長に向かっていった。
「よし、それじゃ交渉は成立だよ」
学園長は『計画通り』と言った風に口を釣り上げた。
「ただし、こちらからも提案がある」
雄二が正気に戻り、学園長に提案した。
「なんだい？言ってみな」
「召喚大会は二対二のタッグマッチだ。形式はトーナメント制で・・・」
しばらく提案の説明を雄二がした。そして
「さて。ここまで協力するんだ。当然優勝できるんだろうね？」
学園長の問いに雄二が笑いながら答えた。

「無論だ。こいつらを誰だと思っている？」
「ああ、任せてくれ」
快は胸を張って答えた。
「絶対優勝して見せます！そっちこそ約束を忘れないように！」
明久も気合十分だ。
「それじゃ、ボウズども、頼んだよ」
「「「おうよ！」」」
こうして、文月学園最低トリオが誕生した。

俺たちと交渉と承諾と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
今回は快達がババアと交渉するシーンを書きました。いやあ、頑張った。
しかし、学園には不穏な空気が流れ始めます。次回は学園祭スタートから書いていきたいと思いますので、次回もお楽しみに！

「ムッツリーニから予算で買うように頼まれてた餡子と胡麻、あと小麦粉か」
今日は学園祭当日である。快はディケイダ―の両サイドに荷物をつないでいる。
「しかし・・・意外と量があるから驚いたぜ」
「そうだね。それだけみんなやる気なんだよ。私たちも頑張らなくっちゃ！」
ユキは快の隣でグッと拳を握っている。ユキは明久の自分を犠牲にした説得でホール係だ。ユキの背には何に使うのか見当がつかない大きな布の入った筒を背負われている。
「よし！荷物の準備はオッケーだ。ユキ、乗れ」
「了解！」
快とユキはヘルメットを被り、バイクに跨った。

「・・・すごいな。段ボールだってのが嘘みたいだ」
学校に着いた快とユキは着々と進んでいる喫茶店準備を手伝っていた。
「ええ、いつもはただのバカに見えるけど坂本の統率力はすごいわね」
隣で島田も感心したように頷いている。快達の目の前にあるのは至る所に設置されているテーブルの一つだ。しかし、これはFクラスのメンバー愛用のミカン箱であった。
「すごいよね。このテーブルだってパッと見は段ボールだなんて思えないよ」
明久は高級そうなクロスに触りながら言った。
「あ、それは木下君が作ってくれたんですよ。どこかからきれいなクロスを持ってきて、こう、パパッと」

姫路はそう言いながら秀吉に尊敬の眼差しを送る。
「なるほど、演劇部の小道具を拝借したってわけだな」
快は納得した。するとそこへムッツリーニがやってきた。
「・・・・・快。空き部屋から赤と青と白の布を持ってきてくれ」
快に近づき、ぼそりと言ったムッツリーニ。
「赤と青と白の布？ああ、あれか」
快は今朝ユキが持っていた長い布の入った筒を思い出した。
「わかった。ちょっくら行ってくる」
快はＦクラスの教室を出てにぎやかな喧騒が聞こえる廊下に出た。
「・・・何やってんですか？船越先生」
しばらく空き教室に向かって歩いていた快は、階段の踊り場で数学の女性教師の船越先生に会った。
「ああ、天野君。悪いけどちょっと助けてくれる？」
船越先生は拡声器やらスピーカーやらが入った段ボール箱を持って立ち往生していた。
「その、あの、あれよ。動けなくなっちゃって・・・」
「は、はあ。分かりました。よいしょっと」
快は段ボールを代わりに持って、船越先生を助ける。
「ありがとうね。あいたた・・・」
自分の腰をトントンと叩いた船越先生。どうやら腰を痛めてしまったようだ。
「大丈夫ですか？先生は保健室に行っててください。俺がこれ持って行くんで」
快は段ボールを持って階段を上り始めた。
「あら、ありがとうね。じゃあ、そのまま新校舎の屋上に運んで頂戴ね」
「・・・結構遠いな・・・まあ良いか。分かりました」
快はそう言って船越先生と別れた。
「・・・・ああいう子もちょっとステキよね」
快はボソッと何か聞こえたが気のせいということにしておくことに

した。噂では船越先生は婚期を逃して、生徒にまで手を出そうとしているらしいが、噂は噂である。

「おーい、ムッツリーニ。持ってきたぞー」
快は筒を持って教室に戻ってきた。
「あ、快。遅かったね」
筒を受け取ったムッツリーニの代わりに明久が快に顔を向けた。
「ああ、ちょっとな・・・ってどういう状況だこれは？」
明久のすぐそばでは、雄二が倒れていた。ユキたち女子組は胡麻団子片手にぽわぽわとトリップ状態である。
「あ、あはは～。ちょっとね」
「？　ああ、そういうことか」
快は試食用であろう胡麻団子の乗った皿を見た。どれも美味しそうだが明らかに一つだけ妖気を放っているものがあった。おそらく姫路お手製のバイオ兵器を雄二が食べたのだろう。明久は顔は笑ってこそいるが、手はものすごく必死に雄二に心臓マッサージをしている。
「だ、大丈夫か雄二？」
快が雄二の顔を覗き込む。
「ふっ、何の問題もない」
雄二は不敵に笑いながら言った。
「あの川を渡ればいいんだろう？」
「・・・・明久、ＡＥＤの準備は？」
快は真面目な顔で明久に聞いた。
「大丈夫・・・もうすぐ戻ってくるはず・・・！」
「六万だと？バカを言え。渡し賃は六文と相場が決まって・・・・ハッ！？」
蘇生成功。
「あれ？どうしたの坂本」
いち早く気付いた島田が様子がおかしいことに気付く。

「え!?あ、ええと、足!足が攣ったんだよな。なあ!雄二!?」
「はぁ?何言って・・・」
「もう一個食わせるぞ?」
「ああ、足が攣ったんだ。少々運動不足でな」
明久の一言で雄二が快に賛同する。
(おまえらいつか殺す・・・)
(((上等だ。やられる前にやってやるよ)))
アイコンタクトでそんな会話をする仲良し三人組。
「ふーん?坂本ってよく足が攣るのね」
島田が聞いた。
「そうだよ。雄二は余計な脂肪がないからね。美波もそうでしょ?胸の脂肪がないかぎゃあああああ!」
思いっきり腕を極められた明久。
「全く、変なこと言わなければいいものを・・・」
雄二がため息をついた。
「さて、じゃあそろそろ一回戦に行くか」
快は立ち上がって時計を確認した。
「そ、そうだね。早く行こう」
島田に腕を極められていた明久もよろよろと立ち上がる。
「店の方はみんなに任せる。行くぞ明久」
「あれ?アンタたちも大会に出るの?」
「え?あ、うん。色々事情があってね」
学園長との約束は口外できない。ばれて面倒になるのは快達にとっては御免こうむりたいものである。
「もしかして、賞品が目的とか・・・?」
「うーん、そういうことになるかな」
これ以上詮索されても困るので快は明久の腕を掴んだ。
「ほら!行くぞ明久」
「う、うん。分かったよ」
「快、頑張って!」

「期待しておるぞ。快」
「天野、しっかりやんなさいよ」
各々が快に声援を送る。
「ねえ!?僕は!?ねえ!?」
誰も明久に声援を送らない事には触れないでおくことにした。

「えー、それでは召喚大会一回戦を始めます」
校庭に作られた特設ステージに快と明久は立っている。
「三回戦までは一般公開はないのでリラックスして全力で戦ってください」
今回立会人になるのは数学教師の木内先生である。当然勝負科目は数学となる。
「頑張ろうね、律子」
「うん」
快達の相手は仲がよさそうな女子のペアだ。
「明久、いいか?俺たちは絶対に勝たなきゃならない。負けんじゃねえぞ」
快は明久の顔を見ず、正面を捉えて言った。
「大丈夫だよ。僕だって勉強してきたんだから」
明久は自信満々に答えた。
「では、召喚してください」
「「サモン!」」
『数学　Bクラス　岩下律子(いわしたりつこ)　１７９点
　Bクラス　菊入真由美(きくいりまゆみ)　１６３点』
先に召喚した女子二人組の召喚獣はお互い似たような装備だ。西洋風の鎧と剣を持っている。
「さて、僕らも召喚しようか」
「ああ」
「「サモン!」」
快と明久の前に丸腰学生服の快の召喚獣と改造学ランに木刀という

姿の明久の召喚獣が現れた。
『数学　Ｆクラス　天野快　１６４点
　　Ｆクラス　吉井明久　６３点　』
「・・・お前、ホントに勉強したのか？」
「し、したよ！した結果がこれだよ！」
明久の点数に快がため息をつく。
「行くわよ。バカコンビ」
律子とか言われていた方が微妙に失礼なことを言ったが、Ｆクラスなのでそこは否定できない。
「えー、それでは対決を始めてください」
「律子！」
「真由美！」
「「行くわよ！」」
息の合った動きで快達を挟み込むように攻撃を仕掛ける２人。
「へぇ～、なかなかいいコンビネーションだね」
「ああ、ただの仲良しオンナノコとは違うみたいだな」
快はベルトを巻き、明久は木刀を構える。
「快！」
「おう！」
お互い、目で合図を送る。そして明久の口から出たのは・・・
「後は任せたぁ！」
「ええっ！？うわっ！」
一気に後ろに飛びのいた明久と驚いて危うく攻撃を受けそうになる快。
「ちょ、だあ畜生！変身！」
《カメンライド　ディケイド！》
「えっ！？うそ！？」
「変わった！？」
快の召喚獣の変身を見て驚いている２人を相手に快はライドブッカーを構える。

「おらぁぁ！」
ガキン！と菊入の召喚獣に切りかかる。
「後ろがガラ空きよ！」
快の後ろを攻めようと突進する岩下。
「やらせない！」
ドン！木刀で岩下の召喚獣を殴った明久の召喚獣。
「よし！ナイスタイミングだ明久！」
快はライドブッカーからカードを取り出す。
《カメンライド　リュウキ！》
快は召喚獣をディケイドからミラーワールドの存在する世界でライダー同士の戦いを止めようとする戦士、龍騎に変えた。
「また変わった！？」
驚いている岩下をよそに快はもう一枚カードを装填する。
《アタックライド　ストライクベント！」
快の召喚獣の右腕に龍騎の契約モンスター『ドラグレッダー』の頭部が装着される。
「食らえ！」
右腕のドラグレッダーの頭から火の玉が飛び出し、岩下の召喚獣に激突した。
「このぉっ！」
岩下の召喚獣は快の召喚獣に近づき、やみくもに剣を振り回している。どうやら召喚獣の操作は素人のようだ。
「そんな戦い方じゃ、俺には勝てないぜ？」
ひょいひょいとそれを避けながら、もう一枚カードを取り出す。
《アタックライド　ソードベント！》
快は新たに召喚獣の左手にドラグレッダーの尾を思わせる剣を持たせた。
「オラオラオラァッ！」
火炎放射と斬撃で岩下の召喚獣を圧倒する快の召喚獣。そして快はトドメのカードを取り出した。

《ファイナルアタックライド　リュリュリュリュウキ！》
「ハァァァ・・・ウオリャァ！」
快の召喚獣はドラグレッダーの頭部から最大出力で火炎弾を出す技
『昇龍突破』で岩下の召喚獣を撃破した。
「さて・・・。明久ー。終わったぞー」
快は明久の方を見るのと明久が倒すのはほぼ同タイミングだった。
「うん。僕もちょうど終わったところだよ」
見ると菊入は悔しそうに呻いていた。
「クッ、まさかFクラスのバカなんかに負けるなんて・・・！」
それに明久がキリッとした表情で答える。
「まあ、僕と快のコンビネーションに勝つにはまだまだかな？」
「「く、悔しいぃぃ～！！」」
「いや、お前さっき『後は任せたぁ！』って言って後ろに退いたよな？」
そんなこんなで無事一回戦を突破した快、明久ペアであった。

俺と明久と一回戦と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
無事、快と明久は第一回戦を突破しました！この調子でガンガン勝ち進んでもらいたいですね！さて、次回はあの迷惑コンビが登場します！
それでは次回もお楽しみに！

「大体、なんであのタイミングでお前後ろに退いちゃうんだよ。ビックリしたじゃねえか」
「まあまあ、勝ったんだし、それにあそこで快のサポートしたとき良いタイミングだったでしょ？」
「そうだけどなんか納得いかねえ！」
校庭の特設ステージから出ながら明久と話をしていると、そこに秀吉がやってきた。
「明久に快。口喧嘩なんぞしとらんで急いで来てほしいのじゃが」
「おう、秀吉。どうした？」
「喫茶店で何かあったの？」
快と明久は同時に秀吉の方に向いた。
「うむ。少々面倒な客が来ての。話は歩きながらで良いな？」
「あ、うん。了解」
先を急ぐ秀吉に続く快と明久。唐突に快が口を開いた。
「・・・営業妨害か？」
「あはは、まさか。たかが学園祭の出店で妨害なんてやってもなんのメリットもないよ」
明久は笑って流したが秀吉は沈痛な面持ちだった。
「実はそのまさかなんじゃよ」
「そうか。相手はどこのどいつだ？」
快は目を細めた。
「高校三年生じゃ」
「おいおい。一番大人な奴らじゃないか」
秀吉の返答に快は思わず頭を抱えた。
「でも、それなら雄二に任せておいた方がいいんじゃないの？」
明久の言うとおりである。雄二はルックス通り腕っぷしが強い。チンピラにはチンピラを、と明久は考えているのだろう。快もその意

見に賛成した。
「それがいつの間にかいなくなっておったんじゃ」
秀吉の言葉に快と明久は驚いた。
「なっ・・・！あいつバックれやがったな！？」
快は憤慨したが秀吉が言葉を続ける。
「すぐに戻ると言っておったが、もしかしたら戻ってきているかものう」
「？　どうしたんだろう雄二の奴・・・」
明久は疑問の表情を浮かべた。
「さあな。とりあえず喫茶店に急ごう」
快達はＦクラスの教室に向けて走り出した。

「む。あ奴らじゃな」
秀吉の視線の先には二人の文月学園の制服を着た三年生の姿があった。彼らは大声でこう話していた。
「マジできったねえなこの机！」
「ああ全くだ！これで食べ物扱っていいのかよ！」
と手本のような罵声である。
『うわ・・・。確かにひどいな・・・・』
『クロスで誤魔化してるみたいね』
『学園祭とは言っても、一応食べ物のお店なのに・・・』
二人の会話を聞いた客たちが呟く。
「ど、どうしよう・・・ばれちゃったよう・・・」
店内でユキがオロオロとしていると、そこに
「おうおう。なんか変なことになってるな」
雄二が戻ってきた。
「あ、雄二。見ての通りだよ。早く何とかしないと・・・」
明久の言葉に雄二は顎に手を当てて答えた。
「そうだな・・・よし、秀吉、ちょっと来てくれ」
雄二が秀吉を呼んだ。

「？　なんじゃ？」
「至急用意してもらいたいものがあるんだ」
ひそひそと耳打ちする雄二。
「構わんが、二つ程度しか準備できんぞ？」
「それで充分だ。頼む」
「承知した！」
そう言って秀吉はクラスメイトを数人引き連れどこかへ行った。
「さて・・・。問題はこっちか」
「どうするの？」
明久が雄二に問う。
「明久はあの二人組の特徴を覚えておけ。快は客を引き留めろ」
「お、おう」
「了解・・・」
快と明久が頷くと雄二は三年生の二人組に近づき、いきなり坊主頭の方を殴り飛ばした。
「どうも。私がクラス代表の坂本です。何かご不満な点でも御座いましたか？」
ホテルのウエイターのように恭しく頭を下げて一礼した。数秒前の動作がなければとても礼儀正しい。
「不満も何も今、連れが殴り飛ばされたんだが・・・」
殴られていないソフトモヒカンのほうが驚いたように目を見開く。
「それは私のモットーの『パンチで始まる交渉術』に対する冒涜ですか？」
すごい交渉術である。
「ふ、ふざけんなよこの野郎・・・・・！なにが交渉術ぶぎゃあっ！」
「そして『キックでつなぐ交渉術』です。最後は『プロレス技でしめる交渉術』が待っていますので」
「わ、わかった。こちらはこの夏川を交渉に出そう。俺は何もしないからな。なっ？」

「ちょ、ちょっと待て常村！今お前俺を売らなかったか？」
坊主頭の方（夏川）がソフトモヒカン（常村）に声をかけている。
「んで、常夏コンビとやら。まだ交渉は続けるか？」
殊勝な態度には限界がある雄二の仮面が取れる。
「いや、もう充分だ。退散させてもらう」
そそくさと立ち去ろうとする常村と夏川。雄二は
「そうか。それなら・・・」
大きく頷いた後夏川の腰を抱え込んだ。
「おいっ！俺はもう何もしてないよな！？どうしてそんな大技をげぶるぁっ！」
鮮やかなバックドロップを決め、平然と立ち上がる雄二。
「これにて交渉は終了だ」
「お、覚えてろよ！」
夏川を抱えて負け犬のような捨て台詞を残して常村が出て行った。
『流石にこれじゃ、食っていく気がしないなぁ』
『折角美味しそうだったのにね』
『腹壊してもなぁ・・・』
だが客はどうしようもなかった。最初になぜかいた教頭の竹原先生が出ていくと
『店、変えるか』
『そうだね』
とぞろぞろと出て行ってしまった。
（ヤベッ！）
快は何とか客たちを引き留めようとする。
「すいません！テーブル通りまーす！」
とそこに立派なテーブルを持った秀吉たちが現れた。
（よし！）
快はここぞとばかりに声を張り上げた。
「失礼致しました！こちらの手違いでテーブルの到着が遅れ、急ごしらえでこのような物を使ってしまいました！ですが！ただいま本

物のテーブルが到着しました！ですのでご安心ください！」
快の必死の説得で何とか客を逃がさずに済んだ。
「・・・ふぅ」
ホッと息をついた快。慣れない丁寧語は疲れる。
「あれ？テーブル入れ替えてるの？」
すると快たち同様召喚大会の一回戦から戻ってきた島田と姫路がやってきた。
「あ、おかえり美波、姫路さん。どうだった？」
明久が二人に戦果を聞いた。
「はいっ。なんとか勝ちました！」
「なかなか手ごたえのある相手だったわ」
どうやら勝ったようだ。
「すごいじゃないか！やったね！」
明久が二人を称賛した。
「そんなことより、いいの？テーブル入れ替えちゃって。演劇部のテーブルだってそんなに多くないでしょ？」
島田の指摘を受けていると
「それでは、他のテーブルも届き次第順次入れ替えて頂きますので、ご利用中のお客様はひとまずこちらのテーブルにお移りの上、ごゆっくりとおくつろぎください」
そう締めて快達がいる廊下に雄二が戻ってきた。
「ふぅ、ま、こんなもんかな」
雄二は肩をコキコキと鳴らしながら息をついている。雄二も快同様に丁寧語は苦手なようだ。
「お疲れ様。雄二」
「おつかれー」
「何かよくわかんないけど、お疲れ様」
「お疲れ様です」
四人が雄二を労う言葉をかけた。
「おう、姫路に島田。その様子だと勝ったようだな」

二ッと笑って雄二は二人を見た。
「・・・ねえ、坂本。アキの事なんだけど・・・」
唐突に島田が雄二に明久の何かについて聞いた。
「ん?僕のこと?」
「ああ、あのことか」
雄二は一人合点がいったようだ。
「なんのことだ?」
快が島田に聞くとこう答えた。
「アキが・・・優勝賞品のチケットを使って坂本と幸せになりに行きたいって言ってたって言うの」
「どういうことだコラァ!!」
グイグイと雄二の襟を締め上げてる明久。
「実は、お前たちが一回戦に行った直後に問いただされてな。こう言い訳した。許せ」
「もっと別に良い言い訳があるだろうが!」
「そんなことより!」
快は二人の間に割って入る。
「テーブルはどうするんだ?流石に足りないぞ」
「ああ、その点に関しては問題ない」
雄二は襟を直しながら言った。
「明久。今からちょっと出かけるからついて来い」
「! まさか!」
島田が息を飲んだ。
「違う!そうではないよ美波!」
明久は必死に否定する。
「で、どこ行くんだ?」
明久の代わりに快が聞いた。
「なあに、ちょっとテーブル調達にな」
雄二の顔には悪そうな笑みがあった。

俺たちと雄二と交渉術と・・・、（後書き）

みなさんこんにちは！夜ならこんばんは
そんなわけで今回は常夏コンビ初登場です！バカテスの噛ませ犬と言えばこの二人ですよね！今後もどんどん出る予定です！
次回は二回戦が開始されます！それでは次回もお楽しみに！

俺と写真と新装甲と・・・、

「失礼します」
快は技術室の扉を開けた。
「やあ、待っていたよ」
そこには技術の中学教師の竹崎先生がいた。
「なんです？話って」
快はどこかヘテーブルを調達しに向かった雄二と明久の代わりに喫茶店を二回戦の時間まで手伝おうと動き始めたら突然ここに来るように鉄人に言われたのだ。
「いや、実は修理の件なんだけどね・・・」
「？」
どこか申し訳なさそうな顔をした竹崎先生は快の方を見て苦笑した。
「ゼロがどうしたんですか？」
「ごめん！もうちょっとだけ待っててくれないか？」
先生が言うにはどうやら予想以上に修理に手間取ってまだ完全に修理できたとは言えないらしい。
「ああ、なんだそんなことですか。構いませんよ」
快は笑って答えた。快にはディケイドの力がある。
「代わりと言ったらなんだけど新しい装甲ができたんだ」
「マジですか！？どんなやつですか！」
竹崎先生の言葉に快は興味津々で聞いた。
「学園長から、なかなか面白かったと言われて、修理の合間に作ってみたんだ」
竹崎先生は快にパソコンの画面を見せた。そこには大きな鎌と黒い翼を生やした漆黒の装甲が映し出されていた。
「召喚獣追加装甲計画第三号！デスサイズヘルだよ」
「おぉ～！」
快はすっかり興奮した。

「武装はビームサイズとバルカンだけだけど、なんと点数を使えばその間、姿が消えるハイパージャマーも付いてる！」
「すごいじゃないっすか！・・・でも」
と言葉を続ける。
「また・・・暴走しません？」
快の脳裏に暴走したエピオンの姿が浮かび上がる。
「それなら大丈夫！ちゃんと調整済みだよ！」
先生は自信満々で答えた。
「誰かにテストで動かしてほしいんだ！」
「え？俺じゃないんですか？」
快はキョトンとした。すると先生は頭を掻きながら照れくさそうに答えた。
「いやあ、実は君と飯島君の戦いを見ていたこの学園のガンダムファンの生徒たちから『自分も動かしたい！』って要望が多々あってね。それで改良に改良を重ねてなんと相性が合えばだれでも動かせる様にしたんだ！」
「そ・・・そうっすか・・・」
「試しのその装甲をつけてごらん」
快は促されて召喚獣を召喚した。
「じゃあ、アームド！」
し～んと何の変化も起こらない。
「あれ？アームド！」
また何も起こらない。
「ね？だから言ったでしょ？この装甲は君とは相性が合わないんだ」
「・・・なんでしょうね。この敗北感・・・」
快はガックリと項垂れた。
「で、肝心の装着者は誰なんです？」
快は顔をあげて先生に向き直った。
「そろそろ来るころかな？」
先生がそう言うのと扉がノックされたのは同時だった。

「失礼しま・・・あ」
「あ」
快は入ってきた人物に驚いた。なんとエピオンの装着者、飯島であった。
「やあやあ。ま、こっちにおいで」
先生は手招きして飯島を椅子に座らせた。
「先生・・・まさか」
快は竹崎先生の方を見た。
「そう!このデスサイズヘルの装着者は飯島君だ!」
「へ?」
飯島はまだ状況が理解できていない様だった。
「実はかくかくしかじかでね・・・」
先生は事情を話し始めた。

「あ、快。やっと来た」
教室に戻った快を明久が出迎えた。
「ああ。全くまさか呼び出した理由が修理の事と自慢だったとは・・・」
快はあの後すぐに教室に戻るように言われて部屋から出させられた。
「どうだ店の様子は?」
快は気を紛らわそうと教室を覗き込んだ。すると部屋の中には段ボールでできたテーブルは一つも無くなっていた。
「ん?なんかテーブルがまともになってる・・・」
「気付いた?さっき雄二と一緒にテーブル調達をしてきたんだよ」
足元を見ると明久の上履きが片方無くなっている。
「ふーん。なんか色々苦労したようだな」
「わかる?実は雄二が・・・」
明久が話し始めると雄二がやってきた。
「快、戻ったか」
「おう・・・何だその本は?」

雄二は小脇に何かアルバムのような大きさのを持っていた。
「次の対戦相手への重要なアイテムだ。試合が始まったら相手のペアにこの本を見せろ。その後の手順は・・・」
と先程秀吉にしたように快に耳打ちする。
「分かった。やってみる。ところで次の対戦相手はどんなペアなんだ？」
快が次の対戦相手について聞くと明久が答えた。
「次の相手はＢクラス代表の根本恭二（ねもときょうじ）君とＣクラス代表の小山友香（こやまゆうか）さんの代表コンビだよ」
「うわまた強敵だな」
「それにお互い付き合ってるからそれなりにコンビネーションもあるだろう」
雄二も情報を伝える。
「だが・・・」
キラーンと雄二の目が光る。
「今の作戦で一発ＫＯだ」
「一体どんな内容の本なんだ・・・」
快は微妙に本の内容が怖くなった。
「よし。じゃあ行こう」
「そ、そうだな」
明久に続くように快も歩き出す。

「やあ、根本君」
明久はステージに立つと根元に笑顔を浮かべて挨拶をした。
「よ、吉井！？と・・・だれだ？」
根本は快の方をみて首を傾げた。
「初めましてか？転校生の天野快だ。よろしく」
「・・・ああ！あのバイクで来てる奴か！まさかＦクラスだったとは」
「なにをＦクラス相手に慌ててるの根本君。この勝負貰ったも同然

じゃない」
そう言った小山は見下したような目つきで快と明久を見る。
「そ、そうだな・・・よし！」
パンッと自分の顔をはたいて気合を入れた根本。
「それでは召喚大会二回戦を始めてください」
今回の立会人は多少の事には目を瞑ってくれる英語担当の遠藤先生だ。
「「「「サモン！」」」」
四人の掛け声で召喚獣が幾何学的な魔法陣から現れた。
『英語Ｗ　Ｂクラス　根本恭二　１９９点
　Ｃクラス　小山友香　１６５点』
流石はＢ、Ｃクラス代表の事だけはある。点数は高い。
『英語Ｗ　Ｆクラス　天野　快　１４３点
　Ｆクラス　吉井明久　５９点』
快の点数は高いが明久はとても低い。
「快、例の物を」
「ああ」
ここで雄二の学園長との交渉の時にしていた要望の力が発揮される。
雄二は試合ごとの科目を自由に決める権限を持っているのだ。わざわざ英語をここに持ってきたのは一回戦では小細工ができなかったが二回戦ではできるからである。
快は雄二に持たされた本を高く掲げる。
「そ、それは・・・！」
根本が驚愕を露わにする。
「なになに・・・『生まれ変わったワタシを見て！』・・・？なんだこりゃ？」
快は頭に？マークが浮かべ明久に聞いた。
「快、その一ページ目を見るんだ」
「一ページ目？」
「や、やめろぉっ！」

根本の制止も聞かず、快はページを開く。
「・・・・・」
そこには女子の制服を着た根本の姿があった。校門の前で恥ずかしそうにポーズをとっているのが痛々しい。
パタンとそれを閉じ、快は打ち合わせ通り小山に話を振る。
「おい小山」
「なにかしら？」
どうやら彼女は内容を知らないらしい。
「これを見ろ」
快はそう言って自分も凍りついた一ページ目の写真を小山に見せた。
「あ、天野！わかった！降参する！だからその写真集だけは・・・！」
いつの間にか快達は勝利した。
「明久、根本を押さえろ」
「ん、了解」
明久は根本を羽交い絞めにする。
「お、お前は鬼か！？」
「さあ？どうだかな」
快はおどけた風に答えた
「な、何言って・・・あぁ！そんなに長々と見ないでくれ！」
「さて。小山この写真集が見たかったら俺たちに負けるんだ」
快は雄二に言われた通りに事を進める。
「・・・いいわ。私たちの負けよ」
小山との交渉が成立した。
「交渉成立だ。ほら、受け取れ」
快は小山に写真集を投げ渡した。
「ゆ、友香！？頼む！見ないでくれ！」
半泣きの根本を尻目に快は遠藤先生の方を見た。
「じゃあ、そういうことで」
「わかりました。勝者は天野・吉井君ペア！」

「明久、喫茶店に戻るぞ」
快はクル、と踵を返し、ステージを後にした。
『・・・・別れましょう』
『ちょ、ちょっと待ってくれ！これには事情が・・・・！』
去り際に聞こえた話は聞かないでおくことにした。人のプライベートに踏み込むほど快も明久も無粋ではない。

俺と写真と新装甲と・・・、（後書き）

みなさんこんにちは！夜ならこんばんは
さて、新しい装甲としてデスサイズヘル（ＥＷ）が登場しました！
これからもどんどん新しい装甲をを出してこうと思っています！
快達は無事強敵を作戦勝ちで倒し、二回戦突破です！次回はあの人の妹さんが登場します！まあ、大体想像ついてますよね。
それでは次回もお楽しみに！

「ただいまー・・・って、あんまりお客さんがいないなぁ・・・・・」

「そうだな。やっぱりあの常夏コンビの影響だな・・・」

二回戦を勝利で収めて喫茶店に戻ってきた快と明久はガラガラの店内を見て嘆息する。

「お、帰ってきたようじゃの」

「おかえりー」

あまり仕事がないようで、秀吉とユキも退屈そうにしていた。

「無事勝ってきたぞ」

「それは何よりじゃ」

「やったね！」

快が勝利を告げると二人は嬉しそうに答えた。

「それより秀吉、これはどういう事？お客さんがいないじゃないか」

「・・・・むぅ。ワシと天野はずっとここにおるが、妙な客はあれ以降来ておらんぞ？」

明久の問いに秀吉が首を傾げながら答える。

「もしかしたら、教室の外で何かが起こってるのかもよ？」

ユキは快が考えていたことと全く同じことを言った。

（あの常夏コンビ・・・・・、一体何を企んでいるんだ？）

快が考えていると突然、

『お兄さん、すいませんです』

と教室の扉の向こうから声が聞こえた。

『いや。気にするな、チビッ子』

『チビッ子じゃないです！葉月ですっ！』

どうやら小さな女の子が雄二と話しているらしい。

『んで、探しているのはどんなヤツだ？』

ガラッと扉が開き、雄二の姿が見えた。だが、話し相手の女の子は

小柄らしく、雄二の陰になって見えない。
『お、坂本、妹か？』
『可愛い子だな～。ねえ、五年後にお兄ちゃんと付き合わない？』
『いや、俺は今だからこそ付き合いたいなぁ』
秀吉とユキに同じく、暇を持て余していたＦクラスの野郎どもが雄二の周りに集まる。
『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探してるんですっ』
『お兄ちゃん？名前は？』
『あぅ・・・、分からないです・・・』
女の子のシュンとした声が聞こえた。
『？　家族じゃないのか？それなら、何か特徴は？』
雄二がそれでも探してあげようと特徴を聞いている。
「ああ見えて、坂本君って優しいよね」
「そうだな」
ユキの言葉に快が返す。
『えっと・・・バカなお兄ちゃんでしたっ！』
『そうか・・・・・』
雄二は言われた手がかりにしたがって周囲を見る。
『沢山いるんだが・・・・・』
否定できない。
『うんっと・・・、とにかくすっごくすっごーくバカなお兄ちゃんですっ！』
『『『吉井だな』』』
『明久だな』
「明久だな」
「明久じゃな」
「吉井君だね」
「あれ？おかしいな？前が滲んでよく見えないや・・・」
女の子の決定的な発言で全員が明久の名前を口にした。
「全く失礼な！僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！絶対

人違いｄ・・・」
「あっ！バカなお兄ちゃんですー！」
明久が歩み出て強く言おうとした矢先に小さな女の子が明久に抱きついた。
「「絶対に人違い、がどうした？」」
快と雄二のハモリで言った。
「・・・人違いだと、いいなぁ・・・・」
明久が眉間を抑えて上を向いた。
「って君は誰？見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の知り合いはいないよ？」
明久が女の子の顔を見るために抱きついているのを引きはがす。
「え？お兄ちゃん・・・・。知らないって、ひどい・・・」
女の子の顔が歪む。
「おい、明久・・・」
快が何か言おうとするといきなり
「バカなお兄ちゃんのバカァッ！バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きながら来たのに！」
「僕の方が泣きそうだよっ！」
「明久、じゃなくてバカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」
「ああ、バカなお兄ちゃんはバカなんだ。許してやってくれ」
雄二と快が泣きそうな女の子をなだめる。
「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに・・・」
「瑞希！」
「美波ちゃん！」
「「殺るわよ！」」
「ごぶぁっ！」
俊敏な動きで明久をこの世から亡き者にしようとしている島田と姫路が現れた。

「姫路に島田か。どうやら勝ったようだな」
落ち着いた口調で雄二が言う。
「瑞希。そのまま首を後ろに捻って。ウチは膝を逆方向に曲げるから」
「こ、こうですか？」
「ちょっと待って！結婚の約束なんて、僕は全然・・・」
「ふえぇぇん！酷いですっ！ファーストキスまであげたのにーっ！」
「坂本は包丁を持ってきて。五本あれば足りるわ。ユキは中華鍋。厨房に置いてあったでしょう？」
「明久君、そんな悪いことをする口はこれですか？」
「お願いひまふっ！はなひをひいてふらはいっ！」
明久の懇願に島田がため息を漏らす。
「しょうがないわね・・・。ユキ、中華鍋はいいわ。坂本は包丁を二本持ってきて」
「あのね、美波。包丁は一本でも刺されば致命傷なんだよ？」
「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」
女の子が島田の方を見てそう言った。
「お姉ちゃん？」
快が首を捻ると明久が
「ああ！思い出した！あの時のぬいぐるみの子か！」
と女の子を指差して言った。
「ぬいぐるみの子？」
ユキが快の隣で首を捻る。
「ぬいぐるみの子じゃないですっ！葉月です！」
女の子がぷぅっと頬を膨らませた。
「そっか、葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった？」
「はいですっ！」
「うんうん。それは良かった。それにしても、よく僕の学校が分かったね？」
「お兄ちゃん、この学校の制服着てましたから」

「・・・なあ明久？完全に置いてきぼり食らってるんだが？」
快が明久に話しかけた。
「ん？ああ、快達はあったことがなかったね。この子は島田葉月ちゃん。名前の通り、美波の妹だよ」
「なるほど。じゃあ、吉井君と葉月ちゃんっていつ知り合ったの？」
ユキが興味津々で明久に聞いた。
「うん。去年ちょっとね」
「そんなことより・・・お兄ちゃんの教室の行き方を聞いたら、皆『Ｆクラスは汚いから行かない方がいい』って言ってたんです。なんでですか？」
葉月が思い出したように明久に聞いた。
「なるほど・・・。道理で客が来ないわけだ」
雄二は納得したように頷く。
「あとあと、お店の近くを通ったら、そのことを大声で話してる声が聞こえたんです！」
「何だって！？それはどこで！？」
明久がしゃがんで葉月の肩を持って聞いた。
「えっとですね・・・短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんたちが一杯いるお店・・・」
「何だって！？雄二、それはすぐ向かわないと！」
「そうだな！これ以上妨害されるのは御免だ！ほら、快も行くぞ！」
「えっ、なっ・・・！」
明久が駆け出し、雄二が快の腕をつかんで後に続く。
「アキ～！ちょっと待ちなさい！」
「明久君・・・酷いです・・・」
「お兄ちゃんのバカァッ！」
「ちょっと坂本！快を連れてどこ行くの！」
後方から女子４人の声も聞こえ、快達を追った。

俺と閑古鳥と人探しと・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
えー、前回のあとがきで書いた『あの人の妹』は皆さんの想像通り葉月です。
葉月は私が原作の中でも好きなキャラクターに入りますね。可愛いですよね。いやマジで。お前はどこの赤い彗星だよ。なんて突っ込まれそうですが、好きです。
次回はついに、明久の女装が登場かも！
それでは次回もお楽しみに！

明久と女装と痴漢退治と・・・

「明久、ここはやめよう」
「ここまで来て何を言ってるのさ！」
「勘弁してくれ！Ａクラスの教室だけは！」
快達は2年Ａクラスの出し物である［メイド喫茶『ご主人様とお呼び！』］の前に立っている。
「つーか、なんで俺も来なきゃいけないんだよ？」
ぽりぽりと頭を掻いて明久たちにの方に向く。
「そりゃあ、僕たちだけで言ったら、美波と姫路さんに怒られちゃうからね」
「道連れは一人でも多くってことだ」
「お前ら・・・ユキもいるって分かって言ってるだろ？」
そんなやり取りをしていると女子四人が追いついて来た。
「坂本、何を駄々こねてるのよ・・・ってそっか、ここは坂本が大好きな霧島さんがいるクラスだったわね」
「坂本君、女の子から逃げ回っちゃダメですよ？」
「立派な看板ね～。やっぱりＡクラスは違うわ」
確かにユキの言う通り、立派な看板が店の前には飾られていた。やはりこういうところにも差は出るのである。
「明久君はどうしてここに来たんですか？」
姫路が明久の方を見て聞いた。
「そりゃ、もちろん敵情視察だよ。やましいことなんてこれっぽっち考えてないよ」
明久はそう答える。
「そうか。明久、お前の隣にいる奴は下心爆発らしいぞ」
快は明久の隣でものすごい勢いでカメラのシャッターを切っているムッツリーニを指差す。
「ムッツリーニ？」

明久が話しかけると彼はカメラから目を離さず
「・・・・人違い・・・」
と答えた。
「どこからどう見ても土屋でしょ。何やってるのよ?」
島田が明久と入れ替わるように聞いた。
「・・・・敵情視察・・・」
「そんなローアングルで女の子の足を見るのが敵情視察なんて初めて知ったよ・・・」
ユキが半ば呆れ顔で言った。
「ここで立ち止まってるのもなんだ。入るなら入ろうぜ」
そう言って快は扉を開けた。
「・・・・お帰りなさいませ。ご主人様」
そこにはメイド服を華麗に着こなし、優雅にお辞儀する霧島が立っていた。
「・・・・!(パシャ!)」
ムッツリーニが快を押しのけて霧島を撮った。
「・・・・そろそろ当番だから戻る」
そう言ってそそくさとムッツリーニはFクラスの教室に戻っていった。
「・・・・・」
だが、快の目はしっかり見ていた。ムッツリーニの顔には
『・・・・急いで現像・・・!』
と書いてあるのを。
「わあ、綺麗・・・」
姫路が感嘆の声をあげる。
「さて、僕たちも入ろうか」
「あ、はい」
明久に言われ、慌てて店中に姫路が入り、その後ろから明久が入る。
「じゃ、ウチたちも」
「入ろっか。葉月ちゃんもおいで」

「はいですっ！」
島田と葉月の手を握ったユキも店の中に入った。
「・・・・お帰りなさいませ。ご主人様にお嬢様」
霧島はぞろぞろと入ってきた明久たちにも快同様に迎え入れる。
「・・・チッ」
雄二も渋々入店する。
「・・・・お帰りなさいませ。今夜は帰しませんよ、ダーリン」
台詞を微妙にアレンジして霧島は雄二を出迎えた。
「翔子ちゃん、大胆です・・・・・」
「ウチも少しは見習わないと・・・・・・」
「肉食女子ってやつね・・・・・」
「あのお姉さん、寝ないで遊ぶのかな？」
各々違ったリアクションをとった女子四人。すると霧島が歩き出したので皆それについて歩いた。
「ね、お兄ちゃん。すごいお客さんだね」
葉月が明久の服の袖をクイクイと引っ張った。
「うん。皆忙しそうだよね」
明久も感心したように辺りを見渡しながら答えた。
「・・・・それではご注文を」
席に着いた快達に霧島はメニューを渡した。
「スゲーな。見ろよユキ、メニューまで本当の店みたいに装丁されてるぜ」
「ホントだ。もう普通にお店として経営できるわね」
快とユキが会話している間に皆注文が決まった。
「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」
「あ、私もそれがいいです」
「私も！」
「葉月もー！」
女子は仲良くシフォンケーキ。
「僕は『水』で。付け合せに塩があると嬉しい」

明久は水を注文した。
「あー、俺は『ガトーショコラ』だな」
快も注文し、雄二が口を開いた。
「んじゃ、俺は・・・」
「・・・・ご注文を繰り返します」
霧島は雄二の注文を聞かずに注文の確認に入った。
「・・・・『ふわふわシフォンケーキ』が四つ、『水』が一つ、『ガトーショコラ』が一つ、『メイドとの婚姻届』が一つでよろしいでしょうか？」
「全然よろしくねぇぞっ！？」
動揺して雄二は叫んだ。
「・・・・では食器を御用意いたします」
女子四人と快にはフォークが、明久には塩が、雄二の前には実印と朱肉が置かれた。
「しょ、翔子！これ本当にうちの実印じゃないか！どうやって手に入れたんだ！？」
「・・・・ではメイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください」
霧島は雄二の問いかけには答えず、優雅にお辞儀してキッチンと思われる方向に歩き出した。
「明久、快。絶対に召喚大会優勝しろよ」
「あ、うん。そりゃあ・・・」
「優勝するつもりだけどな」
「頼むぞ。そうでないと俺に将来は・・・・！」
一人ワナワナと震える雄二をスルーし、ユキが葉月に聞いた。
「ね、葉月ちゃん。さっき言ってたお店ってここでいいの？」
「うんっ。ここで嫌な感じのお兄さん二人がおっきな声でお話ししてたの！」
「そっか・・・ねえ、快これって・・・」
「ああ、お前の考えてる通りだぜ。見ろよ」

快は店の中央の席に顎をしゃくった。そこに座ったのは先ほどFクラスで妨害行動をした、常夏コンビであった。二人は席に着くなり大声で話し始めた。

『それにしてもこの喫茶店は綺麗でいいな！』

『そうだな！2年Fクラスの中華喫茶はひどかったもんな！』

『テーブルが腐った段ボールだし、虫も湧いてたしな！』

という具合でFクラスの悪評を広めている。

「もう許せない！」

明久が怒りに震えて立ち上がる。

「待て、明久」

雄二が常夏コンビをシバきに行こうとする明久を制する。

「雄二！どうして止めるのさ！？」

「今ここであいつらを殴っても、ただ俺たちの悪評が広まるだけだ」

「けどここでただ指をくわえてるだけなんて・・・・・！」

「心配するな、策はある。おーい！翔子ぉー！」

「・・・・・何？」

すると1秒と掛からず霧島が現れた。

「あの連中はさっきも来てたか？」

「・・・・・さっき出て行ってまた入ってきた。さっきと同じことをしてる」

そう言って霧島は顔をしかめた。霧島にとっても愉快な客ではないらしい。

「そうか・・・よし、とりあえず、メイド服を貸してくれ」

「おい雄二。こんな時に何言って・・・」

快が何か言おうとすると

「・・・・・わかった」

そう言って霧島はメイド服を脱ぎ始めた。

「き、霧島さん！こんなところで脱いじゃダメです！」

「そうよ！ここにはケダモノが沢山いるんだから！」

「あわわ、隠して、隠してー！」

「わぁ～、お姉さん、胸おっきい～」
慌てふためく姫路、島田、ユキ。そして全く違う感想を述べた葉月。
「・・・・雄二が欲しいって言うから」
霧島は不思議そうな顔をして言った
「お、おれが言いたいのは予備があったら貸してくれってだけで、お前のをくれとは一言もいってねえ！」
雄二はそっぽを向いて首まで真っ赤にして言った。
「・・・・今、持ってくる」
そう言うと霧島は店の裏に向かった。
「全く・・・。後は、姫路、島田、天野。櫛を持ってるか？」
「櫛・・・ですか？」
姫路が首を傾げる。
「ああ、あと身だしなみ用の物があったらそれも貸してくれ」
「はぁ・・・」
姫路は上着のポケットからポーチを取り出した。
「悪いな。後で必ず返す」
雄二が姫路からそれを受け取ると霧島がメイド服を持って現れた。
「・・・・雄二これ」
「おう。悪いな」
「・・・・貸一つ」
「だそうだ。快」
「だとよ、明久」
「わかったよ。今度、1日雄二を自由にしていいよ」
「ちょっと待て！何で俺が・・・」
「ありがとう。吉井は良い人」
そう言って霧島は嬉しそうにその場を離れた。
「で、これをどうするんだ？」
快は手元に残ったメイド服やポーチから雄二が何をするのか全く見当が付かない。
「・・・・着るんだ」

すると雄二は恨めしそうに明久を見ながら言った。
「だってさ、姫路さん」
「え？わ、私が着るんですか？」
明久に話を振られ、突然の展開に姫路は目を丸くする。
「バカを言うな。姫路が着ても攻撃なんてできないだろうが」
「それじゃ、美波？でも、胸が余っちゃうとぶべらぁっ！」
「ツギハ、ホンキデ、ウツ」
すごい殺気である。
「そ、それじゃ、天野さん？」
「ふえ？あ、私？」
「ゆ、ユキがか？」
ユキと快は狼狽する。確かにユキはハイパーショッカーの改造人間だから、常夏コンビの一人や二人はどうということは無いだろう。しかし、それではユキの体からは考えられないパワーが出てしまうので目立って仕方がない。怪しまれて、変に問い詰められると上手く説明できる自信が二人にはない。
「いや、天野でもない。これを着るのは・・・」
「き、着るのは・・・？」
快は固唾を飲んで問う。
「明久だ」
「いやぁぁぁ！」
指名された明久は全力で拒否する。
「雄二が着ればいいじゃないか！無理をしたら着られるはずだよ！」
「あ、そう言えば噂で聞いたことがある。吉井明久君は女装が似合いそうな男子ランク１位だって」
「天野さん！？そりゃ事実だけど、ここは普通否定の意見が出るはずなんだけどな！？」
わめく明久にため息をついて雄二は口を開く。
「やれやれ。わがままを言うヤツだな。それならあっち向いてホイで決めないか？」

「・・・・・。よし、その提案に乗ろう」
一瞬考えてから明久は提案に乗った。
「それなら行くぞ、ジャンケン」
「ポンッ」
明久はパー、雄二はチョキ。ここは明久の負けだ。
「あっち・・・・・」
雄二が勢いよく人差し指を立てる。
「その手には乗るかぁっ！」
何かを察知したのか、明久は目をそらさず、雄二から視線を外さない。
「向いて・・・」
ブスッ。
「あ、嫌な音」
ユキがつぶやく。
「ぎいやぁぁっ！目が、目がぁっ！」
目を抑えて仰け反る明久。
「ホイ！・・・・・フッ。俺に勝ちだな」
誇らしげに笑みを浮かべる雄二。彼の人差し指は明久の仰け反った方を指していた。
「あの、明久君。大丈夫ですか？」
姫路は心配そうに明久にハンカチを手渡す。
「ありがとう姫路さん。全く雄二の卑劣さには呆れるね」
明久は目をハンカチで拭う。
「あはは・・・でも、きっと大丈夫ですよ」
「そうだよね。今の卑怯な勝負は無効・・・」
「明久君ならきっと可愛いと思いますっ」
そういう問題じゃない。と明久は思った。

「・・・・こ、この上ない屈辱だ・・・！」
「明久、存外似合っておるぞ」

わざわざ喫茶店から秀吉を呼び、男子トイレで明久の着付けとメイクをほんの数分でやってもらった。
「では、ワシは店に戻るぞい。悪党を存分にのしてくるがよい」
「ん。りょーかい」
明久は秀吉と別れ、再びＡクラスにメイド喫茶に入る。
『とにかく汚い教室だったなよな』
『ま、教室のある旧校舎自体も汚いし、当然だよな』
常夏コンビは相変わらずそんな会話を繰り広げている。
「・・・・・まだか？」
「・・・・・もう少し待て。合図が来てからだ」
快と雄二はひそひそと声を潜めて話す。しばらく待つと
『くたばれぇぇっ！』
ゴンッ！！
『ごばぁぁっ！』
という叫び声と何かが勢いよくぶつかる音が聞こえた。
「・・・・・始まったな」
「ああ」
快と雄二はじっと合図を待つ。そして
『こ、この人。今私の胸に触りました！』
明久の裏声が聞こえた。合図である。
「合図だっ！行くぞ快！」
「おう！」
ダッと駆け出し、雄二がバックドロップを食らい、起き上った夏川を殴り飛ばす。
「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎がっ！」
「白昼堂々こんなことばっかやりやがって、このゲス野郎がっ！」
痴漢退治の大義名分を得て、雄二と快は常夏コンビの前に立つ。
「お前は何を見ていたんだ！？明らかに被害者はこっちだろ！」
「問答無用！」
ドガッ！と快は常村を蹴り飛ばす。

「痴漢行為働いといて、被害者面かぁ？いい度胸じゃねえか！」
すると後ろでは雄二が明久（メイド服姿）に話しかけていた。
「ウェイトレス。そっちで倒れている男は任せたぞ」
「え？あ、はい。わかりました」
明久は着ているメイド服に手を突っ込み、ブラジャーを取り出す。
そして伸びている夏川の頭に装着した。瞬間接着剤で。
「さて。痴漢行為の取り調べのため、ちょっと来てもらうぜ」
雄二がずい、と前に出る。このままどうして妨害行為をするのか問いただすためだろう。
「くっ・・・！行くぞ夏川！」
状況を不利と見て、常村は走り出した。
「なんだコレ！取れねえじゃねかクソッ！覚えてろ変態め！」
頭に着いたブラジャーを必死に取ろうと四苦八苦しながら夏川は常村に続いて走り出した。
「逃がすか！追うぞ、快！アキちゃん！」
「ああ！」
「了解！けどその呼び方は勘弁して！」
後を追うように走り出す雄二、快、アキちゃん。
「あっ、天野君！」
常夏コンビを追いかけているとトイレ付近で突然呼び止められた。
「！？」
振り返るとそこには2年Aクラスの飯島卓也が立っていた。
「おう、飯島か！悪い！今すっげえ急いでるから！また後でな！」
「えっ、あ・・・行っちゃった」
快は飯島と短くやり取りをし、再び走り始めた。
「3回戦、出られそうにないって話だったのに・・・お～い、大丈夫ー？」
飯島はトイレに個室に入っている自分のペアの2年Eクラスの近藤（こんどう）昇（のぼる）に話しかける。
「ウゥ、グッ・・・グァ！む、無理だ！とてもじゃないが動けない・

・・！」

近藤は絶賛腹痛中である。

「もう、あれほど食べ過ぎないでって言ったのに・・・」

「し、仕方ないだろ！美味しそうだったんだから！ハゥ・・・！」

「やれやれ。竹崎先生に頼まれたデータ収集、断らないとな・・・」

飯島は深くため息をついた。友人の苦悶の声をＢＧＭにして。

明久と女装と痴漢退治と・・・（後書き）

みなさんこんにちは！夜ならこんばんは
最近、夜に起きるっていうことができなくなってきました。１回、目を閉じて、また開けると、すごい時間が経ってることとってありませんか！？ない？そうですか。じゃあ良いです・・・。
さて。次回はそろそろ学園祭もクライマックスに近づいてきましたので、どんどん面白くして行きたいなと思います。
それでは次回もお楽しみに！

「3年Aクラスに入って行ったぞ！こっちだ！」
雄二が近くにある教室に突っ込んでいく。快と明久もそれに続いた。
「いらっしゃいませ。3名様ですね？」
「いや5人だ。後から来る連中が金を払う」
雄二は何のためらいもなく次の客に会計を任せる。
「それでは恐怖の世界をお楽しみください」
店員の声など全く意に介さず、暗幕を捲って中に入る。どうやら中はお化け屋敷のようでカーテンで閉め切られ、とても視界が悪い。
「気をつけろ二人とも・・・」
雄二が常夏コンビに悟られないように息をひそめて小さな声で言った。
「う、うん。気をつけないと、気をつけないと、気をつけないと・・・」
明久がそろりそろりと歩いているのが気配でわかる。
「気をつけないと・・・うわっ！」
「どうした！？」
「大丈夫か！？」
快と雄二が後ろを振り返る。そこには明久の腰にぶつかった夏川の姿があった。
「「へ、変態だ！」」
「「どっちもな」」
明久と夏川の驚愕と快と雄二のツッコミがお化け屋敷に響いた。
「ここまで追ってくるなんて、しつこい連中だぜ！」
夏川が奥へ走り出す。どうやら待ち伏せではなく、ただ鉢合わせしただけのようだった。
「逃がすか！必殺アキちゃん爆弾を食らえ！」
雄二が明久の頭を掴んだ。

「雄二、その技はやめよう。一番の被害者は僕になるから」
「じゃあ、石破アキちゃん天驚拳でどうだ！」
快が明久を抱えて投げようとする。
「快、ここでそんなコアな人にしかわからないボケはやめよう！」
ぎゃいぎゃい騒いでいると、
「いまだ！壁を倒して閉じ込めろ！」
常村の声が聞こえた。
「くっ・・・！脱出だ、快！アキちゃん！」
「それしかないね！」
「わかった！」
追討ちを諦め、入り口付近に戻る快達。しかし壁は倒れてこなかった。
「あれ？倒れてこないね」
「はったりか！あのモヒカン野郎・・・・・！」
「あ、雄二！」
また中に入ろうとする雄二とそれを追う明久。
「待て二人とも！」
快は二人を慌てて引き留める。
「なんだよ快！」
「もうすぐ三回戦が始まる」
「「あ」」
快の発言に明久と雄二は我に返る。
「・・・・仕方ない。ここは一旦引き上げるぞ」
雄二の一言に快と明久は頷き、入り口に向かう。
「あ！さっきの無断入場者！」
「走るぞ雄二！アキちゃん！」
「ああもう！さっきからこんなのばっかりだー！」

「で、三回戦は不戦勝じゃったと？」
「うん。相手が食中毒で棄権したんだって」

慌てて会場に向かった快と明久に待っていたのは相手の棄権による不戦勝というなんとも拍子抜けな結果だった。
「食中毒ってまさか・・・・？」
快は怪訝な顔をして明久に向いた。
「あはは、ないない。うちでそんなことは・・・ない・・・かな？」
「そう願うしかないな」
「ならば、済まぬがこっちの建て直しに協力してくれんか？」
秀吉が申し訳なさそうに表情を曇らせる。
「そうだな。一度失った客を取り戻すのは難しい。何かインパクトのあることをやらないとな・・・」
一足先に戻っていた雄二は顎に手を当てて、唸った。
「仕方ない。これは最後に最後にしておきたかったんだがな・・・」
「雄二、何かアイデアがあるの？」
「任せておけ。中華とコレの組み合わせは安直すぎるが効果は絶大だ」
そう言って雄二が取り出したのは刺繍の見事な水色と白のチャイナドレスだった。
「なるほど。確かに中華と言えばってことになりそうだが・・・どこで手に入れたんだそれ？」
快がチャイナドレスの出所を聞く。
「これはさっきムッツリーニが作ったやつだ」
「ムッツリーニが？・・・・ああ、あれか！あの布！」
快は今朝ムッツリーニに頼まれた布の束を思い出した。
「そうだ。これを・・・明久が着る」
それはインパクト絶大だろう。
「ちょっ・・・・・。お願い、許して！メイド服の次にコレ着たらもう僕は本物ってことになっちゃう！」
涙目で懇願する明久を笑いながら見て雄二は付け加えた。
「冗談だ。これを秀吉と姫路と島田と天野に着てもらう」
「なんだぁ～、よかったぁ～」

ホッとする明久。
「ワシが着るのは冗談ではないのかのぅ・・・・・」
秀吉がチャイナドレスを手に、深いため息をつく。そのタイミングで島田たちが戻ってきた。
「たっだいま～！・・・って、なんだ。アキってばもうメイド服脱いじゃったんだ」
「あ・・・・残念です。可愛かったのに・・・・・・」
「なかなか様になってたよね」
「お兄ちゃん、葉月もう一回みたいなぁ～」
明久のメイド服姿に思いを馳せながら四人は明久に話しかける。
「あはは。残念でした。ただで人のコスプレを見れるほど世の中甘くないよ」
にこやかに笑って見せる明久。
「そういうことだ。姫路に島田、それに天野も売上アップの為に協力してもらうぞ」
「ユキ・・・・、頼むぞ！」
ずいっと女子三人に詰め寄る男子三人。
「な・・・、なんだか三人とも目が怖いですよ？」
「凄く邪悪な気配を感じるんだけど・・・・・」
「か、快？どうしちゃったの？」
若干引き気味なエモノ三人。
「やれ明久！」
「オーケー！へっへっへ、おとなしくこのチャイナ服に着替え痛ぁっ！すいませんしたっ！自分チョーシこいてましたぁっ！」
「弱いな、お前・・・」
「弱すぎるだろ・・・」
快と雄二から残念な視線が注がれる明久。
「どうしてまた、急にそんなこと言い出すのよ？前に須川はチャイナドレスを着ることは無い、って言ってたと思うけど」
予想通り島田が渋い顔をする。

「店の為と明久の趣味だ。明久はチャイナドレスが好きだよな？」
話を振られ、明久は少し黙ってから答えた。
「大好・・・愛してる」
「明久、変わってねえぞ・・・」
「お前は本当に嘘をつけないやつだな」
快と雄二は呆れた顔で明久を見る。すると、
「し、仕方ないわね。お店の売り上げの為に、仕方なく着てあげるわ」
「そ、そうですね！お店の為ですしね！」
島田と姫路が引き受け、それぞれ服を手にする。ちなみにこれが明久の発言の影響だということを快と雄二は知っていた。
「二人は良いって言ってくれた。ユキ、お前はどうする？」
「別に良いよ。なかなか着る機会なんてないからちょっと楽しみかも」
ユキも了承し、白のチャイナドレスを手に取った。
「お兄ちゃん、葉月の分は？」
「え？葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」
予想外の申し出に明久は驚く。
「・・・お手伝い？あ、うん！手伝うから、あの服葉月にもちょうだい！」
「ありがとう葉月ちゃん！でも・・・、ごめんね。気持ちは嬉しいんだけど葉月ちゃんの分は・・・」
「明久、それに関しては問題ないみたいだぞ」
快は明久の肩をたたき、後ろを向かせる。
「へ？」
「・・・・・・！！（チクチクチクチク）」
「ム、ムッツリーニ！どうしてそんな凄い勢いで裁縫を！？っていうかさっきまでいなかったよね！？」
「・・・・俺の嗅覚を舐めるな」
キランと目の端を光らせてつぶやくムッツリーニ。

「何だろう。すごくカッコイイ台詞なのに、すごくカッコ悪い台詞に聞こえるよ・・・」
「それじゃ、三回戦が終わったら着替えますね」
姫路が腕時計を確認する。もうすぐ姫路達の試合が始まるようだ。
「いや、今着替えてもらいたい」
「「え？」」
雄二の言葉に二人の声がハモる。
「宣伝の為だ。そのまま召喚大会に出てくれ」
「あ、そういや、三回戦からは一般公開があるんだったな」
「そうだ。このタイミングで客を一気に呼び込み始める。そうすりゃ売り上げもアップだ」
雄二の言葉に快も納得する。
「木下とユキならともかく・・・これを着てって・・・」
「ちょっと恥ずかしいです・・・」
逡巡する島田と姫路。しかしこのまま悩んでいてもらっても仕方がない。
「美波、姫路さん。お願いだ」
明久が深々と頭を下げる。
「明久、お前・・・本当にチャイナが好きなんだな」
雄二が微妙な目で明久を見る。すると姫路がハッと顔をあげた。
「もしかして、明久君、私の事情を知って・・・」
「仕方ないわね。これも設備の為だし、協力しましょ。ね、瑞希？」
姫路の言葉を遮って、島田が色よい返事を寄越す。
「は、はい！わかりました！」
姫路も快諾してくれた。
「さ、そうと決まったら早速着替えなきゃ！ほら瑞希ちゃん、美波ちゃん、行こっ！」
ユキが二人の背中を押して着替えに向かった。
「よし。女子たちに負けてらんないな。俺たちもやるぞ！」
「うん！こうなったら大繁盛させてやろうよ！」

快と明久も次の対戦までの短い時間だが、精一杯店を手伝うことにする。
「・・・・できた」
「わぁ～、お兄さん、凄いですっ！」
神速のごとき速さで葉月のチャイナドレスを仕上げたムッツリーニ。
下心の絡んだ彼に不可能の文字はない。
「ふむ。それでは着替えるとするかの」
そう言って秀吉が服を脱ぎ始める。
「ちょ、ちょっと秀吉！こんなところで着替えちゃダメだよ！きちんと女子更衣室で着替えて！」
「最近、明久が完全にワシを女と見ておる気がするのじゃが・・・」
秀吉は渋々女子更衣室に向かう。
「んしょ、んしょ・・・」
「は、葉月ちゃん！君もこんなところで着替えちゃダメだって！秀吉と一緒に着替えておいで！」
「はーい！」
そう言って葉月は秀吉についていった。
「全く・・・、皆凄く大胆だな・・・」
明久は汗をぬぐう。
「ねえ？ムッツリーニ・・・ムッツリーニ？」
「・・・・・（ボタボタボタボタ）」
見るとムッツリーニは鼻血を流して、立ったまま失神していた。
「ムッツリーニ！ムッツリーニィィィ！！」
「・・・いきなり前途多難だな」
「全くだ・・・」
はあ、と快と雄二は同時にため息をついた。

俺とチャイナと不戦勝と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
さて、今回はチャイナドレス登場です！いやあ、チャイナドレスってアレですね。こう、そそられますよね？え？そんなことない？そうですか・・・。
ってこんなの前回もやった気がします。というかやりました。確信犯です。
なぜかって？それはですね・・・。（顔作り中）
『あえて言おう！書くことがないからであると！！』
・・・すいません。今のをギレン総帥ととらえるかグラハムさんととらえるかは皆さんの自由です。
次回は第四回戦を書いていきたいと思います。そろそろこの大会も決勝が近づいてきましたね。ショッカーは何か仕掛けてくるのでしょうか！？
それでは次回もお楽しみに！

「たっだいま～！」
「ただいま戻りました」
チャイナドレス姿の島田と姫路が戻ってきた。
「おう、お疲れ！悪いがホールに回ってくれ！人手が足りなくなってきた！」
いち早く気付いた快はプレート片手に二人に言った。
「わかったわ！」
「はい！」
二人も接客に入る。二人が大会に向かってから、快と明久はユキと秀吉、葉月を連れて校内を歩き回った。初めは効果がないのかと思ったが、徐々に客が増え、今のところ順調な経営状況である。
「これを一番テーブルのお客様に！こっちは四番テーブルだ！」
雄二も厨房で料理を受け取り、どこに持って行くか指示を出している。
「お待たせしました！こちら胡麻団子と本格烏龍茶でございます！」
ユキもテキパキと品をテーブルに置いていく。
「はい！肉まん一つとあんまん一つですね！かしこまりましたです！」
葉月も小学生ながら他に引けを取らない頑張りを見せている。
「ん？」
ふと快の目に明久と話している客が映る。明久と話しているのは教頭の竹原先生であった。そこに島田が後ろから明久に話しかける。
明久は一言二言竹原先生と話し、その場を離れた。竹原先生が口の端を釣り上げているのが見えた。まるで何か企んでいるかのような目をしていた。
「なんだったんだ？」
快は疑問に思ったが、すぐ注文の呼び出しをされ、テーブルに向か

う。
「ご注文は・・・」
快はテーブルについて絶句した。
「こんにちは、ディケイド。来ちゃいました」
快に時折アドバイス?をしてくれる青年、紅渡が何食わぬ顔で烏龍茶を飲んでいたのだ。
「なんでお前がここにいるんだよ・・・!」
快は驚いて叫びそうになるのをグッと堪えて静かに聞く。
「あなたが学園祭を楽しんでる様子を見たので面白そうだから来ました」
「そうかよ・・・、あとディケイドって呼ぶのは止せ。まだ知られてないんだからな」
「そうですか。気をつけます」
「んで?注文は?」
「あなた、僕が客だからって態度変えるのやめてくださいよ・・・。実は」
そこで渡は言葉を切った。
「あの教頭・・・竹原とかいう男、臭いますね」
「?」
「先ほど、この店に入る前にあの男がなんだかガラの悪い男達と話していました。」
「それが?」
「何か渡していたようなんですが・・・、それが何なのか・・・・・・」
渡は目の端に竹原先生を捉えて言った。
「ふーん・・・、まぁ向こうが何かしてこないうちはこっちは何もできねえよ。ほら注文は?」
快が注文を促すと渡は立ち上がった。
「いえ、僕もそろそろ戻らないといけないので」
「ん、そうか」

「では」
渡は会計を済ませ、雑踏の中に消えて行った。
そんなこんなで二時間ほど経ち、快と明久は四回戦に向かう時間になった。
「明久、そろそろ四回戦だ」
「え？もうそんな時間なの？」
雄二に言われ、明久が腕時計で時間を確認すると午後二時過ぎであった
「あれ？アキもそろそろなの？」
「実は私たちもなんですよ」
島田と姫路も支度を始めていた。
「お兄ちゃん、葉月を置いてどこか行っちゃうの？」
葉月が明久のズボンを引っ張って、寂しそうな顔をした。
「チビッ子。バカなお兄ちゃんは今から大切な用事があるんだ。だからおとなしく待ってなきゃダメだ。」
雄二がグシグシと葉月の頭を撫でた。
「う～、でも・・・・」
食い下がる葉月に雄二はそっと微笑み、
「良い子にしてたら、バカなお兄ちゃんが大人のデートを教えてくれるからな」
明久にとっては超弩級の爆弾を投下した。
「葉月、お手伝いするです！」
「ち、違うんだよ葉月ちゃん！僕には君が期待してるような財力はないんだ！」
明久が物凄く慌てふためいている。
「アキ、ちょっと校舎裏まで来てくれる？」
島田が明久の肩をギリギリギリと強く掴んだ。
「美波ちゃん、ちょっと待ってください」
姫路が仲介に入った。

「次の対戦相手は明久君と天野君のようですから、召喚獣でお仕置きした方が遠慮なくできますよ？」
今、明久の目には姫路が放つ禍々しいオーラが見えていることだろう。
「ちょっと待って！僕の召喚獣には痛みのフィードバックがあるんだよ！？姫路さんの召喚獣の攻撃なんて受けたら僕も酷い目に・・・・」
「フン、望むところだ」
「快ぃ！？お願いだから僕の命を勝手に左右しないで！」
「大丈夫だ明久」
快は明久の肩に手を置いた。
「俺の召喚獣も、フィードバックつきだ」
「君の召喚獣は強いじゃないかぁぁぁー！！」
「上等よ、早く会場に向かいましょう。アキがどんな声で啼くのか楽しみだわ」
島田が闘志を滾らせ、グッと拳を固めた。
「いいだろう。明久がどんな断末魔の叫びをあげるのかしかとその眼に焼き付けるんだな」
快も気合十分だ。

『それでは四回戦を始めます。出場者は前に出てください』
マイクを持った審判の先生に呼ばれ、快達四人はステージに上がった。外部からの来場客の為に用意された見学者用の席はほぼ満席である。
「なるほど、これなら宣伝効果的には抜群だね」
「ああ、それにメンバーは全員Fクラスときた。これ以上ない宣伝の機会だ」
辺りを見渡し、快と明久は頷きあう。
「そんなワケだから二人ともしっかり宣伝よろしくね」
会場の男の視線を釘づけにしている島田と姫路に明久が声をかける。

「あ、あの・・・・・。やっぱり恥ずかしいです・・・・」
「アキもメイド服着て来なさいよ！不公平よ！」
二人とも耳まで真っ赤にして恥ずかしがっている。
「僕がメイド服なんて着てるところを姫路さんのお父さんが見てたりしてたら困っちゃうじゃないか」
「バカッ、お前・・・・！」
「え？お父さんは決勝戦は見に来れるって言ってましたけど・・・・。どうして明久君がそれを？」
快が表情を強張らせ、姫路が不思議そうな顔をする。
「ほ、ほら！姫路さんが活躍するなら、家族の人はきっと見に来るんじゃないかなと思って！」
「ふむ。明久としては将来のお義父さんに恥ずかしい姿は見られたくないだろうからな」
快と明久は必死に取り繕う。
「いえ！明久君のメイド服姿はとっても可愛かったです！」
「「あ、つっこみどころはそこなんだ」」
姫路の天然に感謝した快と明久。
『四人とも、そろそろ良いですか？』
先生がマイク片手に苦笑いしていた。
「あ、はい。それじゃあ・・・・・」
大きく息を吸い、召喚獣を呼び出す。
「「「「サモン！」」」」
四人の声が綺麗に揃い、足元に魔法陣が現れる。
『ワァ・・・』
この様子だけでも観客から小さな歓声が上がる。そしてそのすぐ後に皆の姿がデフォルメされた愛嬌だけはある召喚獣が姿を現す。ちなみに点数表示はステージの後ろにある馬鹿でかいディスプレイに表示するため若干の時間ができる。
『では、四回戦を・・・・』
審判の向井先生が開始宣言をしようとして、

「ちょっと待ってください」
快が止めた。
「・・・・はい？なにかありますか？」
気を削がれたのか、先生は若干不満そうな顔ををした。
「すいませんが、マイクを貸してください」
そう言うと快は返事を待たず、マイクを手にした。
『えー、清涼祭にご来場の皆様こんにちは』
明久は合点が行き、姫路と島田を観客に向かい合わせるように並ばせた。
『ここで僕ら四人は、本格飲茶を提供する二年Ｆクラスの中華喫茶で働いています。このように可愛らしい女子もあと、二人が今もそこで働いております。皆一生懸命頑張っていますので、よろしければどうぞお立ち寄りください』
快が丁寧にお辞儀すると、明久たちも大きくお辞儀した。
「「「よろしくお願いします！」」」
ついでに召喚獣もお辞儀していた。
「先生、マイクお返しします」
軽く頭を下げ、快は向井先生にマイクを返した。
『・・・・ということだそうです。ご見学の皆様、お時間に余裕がありましたら、出場選手がいる二年Ｆクラスにお立ち寄りください』
先生が苦笑いしながらも、宣伝に協力してくれた。
『さて、ＣＭも終わりましたし、いよいよ召喚大会の始まりです。Ｆクラスの四人とも、いい試合をお願いします』
そう告げると、先生は快達から離れ、少し距離をとった。
「アキに天野。よくここまで勝ち上がったわね。でも、ウチらに勝てるとはさすがに思ってないでしょう？」
島田が余裕の笑みを浮かべる。
「フッ、甘いな。確かに姫路には勝てるかどうかは五分五分だ。だが！島田、お前ならどうだ？」

快も島田以上の余裕を滲ませて笑みを浮かべる。
「何よ？何が言いたいのよ？」
島田が眉をひそめる。するとディスプレイに点数が表示された。

『古典　Ｆクラス　姫路瑞希　３９９点
　島田美波　　６点　』

「こ、古典ですって！？四回戦は数学のはずじゃ・・・」
狼狽する島田。彼女はドイツからの帰国子女だ。古典は彼女の鬼門と言える。
「美波、君たちに渡した対戦表だけど・・・」
今度は明久が口を開く。
「アレは雄二の手作りだ！」
「だ、騙したわねっ！！」
そう。島田と姫路が持っていた対戦表は雄二がその無駄にある器用さで作った偽物である。これは科目を自由に選択できるという権利を応用し、雄二が作った罠だ。
「ふはははは！これで勝負はほとんど二対一！俺たちの勝利は確定だ！なあ明久！」
某アルヴァトーレのパイロットみたいな高笑いをし、勝利を確信する快。
「その通りだよ快！６点しか取れてない美波の召喚獣なんて、はっきり言っていないも同然さ！」
「くっ！なんて卑怯な連中なの！」
悔しげに呻く島田をよそに、ディスプレイが快と明久の点数を表示する。

『Ｆクラス　天野快　２４７点
　吉井明久　　９点　』

快は膝からガックリと崩れ落ちた。

俺たちと繁盛とトラップと・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
さて、今回は四回戦の開始直後まで書きました。渡が普通に来店するという凄い展開も書いてみましたが、どうでしょうか？これからもどんどんいろんなキャラを、乱入させていこうと思います。
次回は四回戦の続きとその後を書こうと思います。それではお楽しみに！

「・・・・・・明久」
「・・・・・・正直、悪かったと思ってる」
「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」
凄くいたたまれない雰囲気である。そんな雰囲気の中、明久が取り繕うよう言った。
「・・・・・よし！こうなったら個人戦だ！僕は美波を相手にするから、快は姫路さんを！」
「待て！それじゃ俺の負担が・・・・・」
途中で快は言葉を切った。快の頭がフル回転し、ある作戦を閃く。
「快？」
明久が呼びかけるがニ、三回は返事はなかった。
「・・・・・よし。島田、姫路」
快は二人に話しかけた。
「はい？」
「なによ？」
「ちょっと前に雄二から、明久が如月ハイランドのチケットを欲しがってるって話を聞いたよな？」
明久は一回戦の後、教室に戻ってからのやりとりを思い出す。
「それがなにか？」
「雄二と一緒に行くって話だったが・・・あれは嘘だ」
「「ええぇっ！？」」
「うん。意外な反応をされてこっちがビックリなんだけどね」
と明久。快の言葉を聞き、動揺する二人。
「そ、それじゃ・・・一体誰を？」
「誰を？そんなの決まってるじゃないか」
快は不敵に笑う。明久はこれ以上何か変なことを言われないか不安

そうである。
「明久が誘おうとしているのは、島田。お前・・・・」
「ええっ!?あ、アキってば、ウチと幸せに・・・・・・」
「・・・の妹の葉月だ」
「殺すわ」
ゴゴゴゴゴとハマーン・カーンみたいな殺気とプレッシャーが明久を襲った。
「ち、違うよ美波!僕は別に葉月ちゃんをどうこうしようなんて思ってない!」
「妙に仲がいいと思ったら・・・そう言うことだったのね」
「ウフフ・・・明久君にはお仕置きが必要みたいですね」
明久の必死の反論空しく、島田と姫路の怒りのボルテージは臨界点を突破した。例えるならば、それは怒りのスーパーモード並みである。シャイニングフィンガーソードなら軽く扱るだろう。そして戦況は一気に加速する。
「瑞希!アキの召喚獣を攻撃して!ウチは本体をボコボコにするから!」
「わかりました!」
「わからない!僕には二人の言ってることがさっぱりわからない!」
「行きますっ!」
ついに姫路と島田が攻撃に動き出した。高得点なだけあって、姫路の召喚獣は高速で間合いを詰めた。
「わ、わ、わ!」
明久がギリギリのところで攻撃を避ける。点数が9点の為か、明久の召喚獣の動きは少し鈍い。
「アキ!おとなしく殴られなさい!」
「美波!それは反則行為だよ!」
そして明久に直接攻撃を仕掛ける島田。
『反則はありません』
審判の向井先生も今は女子の味方である。たまらず明久は快にアイ

コンタクトで助けを求める。
（快！君が余計なこと言うから、大変なことになっちゃったじゃないか！）
（任せろ。お前は姫路の召喚獣の武器を押さえ込め。後は俺がやる）
「変身！」
《カメンライド　ディケイド！》
アイコンタクトを終え、快は召喚獣を召喚獣サイズのディケイドに変身させる。
『見て！変わった！』
『すごい！あれ欲しい！』
小さな子供の歓声が聞こえた。
「悪いが一気に決める！」
快は二枚のカードを取り出す。
《カメンライド　カブト！》
《アタックライド　クロックアップ！》
快は召喚獣をカブトに変身させ、クロックアップで高速移動し、姿を消す。
「くうぅぅっ！」
それと同時に明久の苦悶の声が聞こえた。明久の召喚獣が身を挺して武器を押さえ込んだのだ。
「快！」
「おう！」
合図を受けた快はトドメのカードを取り出す。
《ファイナルアタックライド　カカカカブト！》
快は召喚獣をジャンプさせ、ライダーキックの構えを取らせる。普段、カブトのライダーキックは回し蹴りだが、今回は伝統の飛び蹴りスタイルである。
「か、快！まさか僕ごと姫路さんをやろうっていうの！？」
明久が少し焦った表情を浮かべる。
「そうだけど？」

「き、キサマ、謀ったな、快ぃぃぃ！！」
「加減はする！明久、恨むんなら、自分の不運を恨め！さらばだ姫路！明久と共に消えろぉぉぉ！！」
カブトのライダーキックが二人の召喚獣に強く叩き込まれる。
「え？あ、きゃあ！」
流石の姫路の召喚獣も無防備な状態で攻撃を受ければ戦闘不能は免れなかった。
「ごべあっ！！」
そして明久にもライダーキックの衝撃がフィードバックで伝わる。
「加減はするって言ったろ？全力だったらお前、死んでるぜ」
「そ、そういう問題じゃ・・・ない」
痛みに耐えながら明久は快に反論した。
「瑞希！よくもやったわね！」
姫路をやられたのを見て、島田の召喚獣が仇を討つべく快の召喚獣に突進する。
「そんな点数で、勝てると思ってるのか？」
快は召喚獣をディケイドに戻すと、ライドブッカーで島田の召喚獣を一刺しした。
「しまっ・・・！」
「これで終わりだ！」
快の召喚獣は深々と島田の召喚獣に刺さったライドブッカーを思い切り横に振った。
「フッ・・・完全勝利だな」
戦いを終え、快は人差し指を天に向けて、カブトがとるあのポーズをした。
『あ～・・・え～と・・・』
形容しがたい展開に向井先生は困っている。
『姦計めぐらせ、味方諸共相手を葬った天野快君の勝利です！』
明久はそれを聞いたのを最後に気を失った。

俺と姦計と完全勝利と・・・、（後書き）

皆さんメリークリスマス！夜でもメリークリスマス！
今回は予定通り四回戦の続きを書きました。本当なら決まったキャラがいる場面にオリキャラを置いて話を進行させるのは大変です！
しかし書き終えたときの達成感はひとしおです。
さて次回は準決勝の話を書いていけたらなと思います！それでは良いクリスマスをお過ごしください！

「ひきょうもの」
「二人とも・・・酷いです」
試合が終わり、ジト目で快と明久を見る島田と姫路。
「あ、いや。あれも勝負だったからさ」
その視線から逃げるように目を逸らす明久。
「二人とも、そう言うなって。後は俺たちに任せてくれよ」
そして全く悪びれる様子もない快。
（ってことで、美波たちは喫茶店に専念してくれる？召喚大会は快の言った通り僕らで優勝して見せるから）
姫路に聞かれるとまずいので明久は小声で島田に話しかける。
（そりゃアキたちが優勝した方が瑞希のお父さんにも印象がいいと思うけど・・・）
島田も小声で返事をする。確かに島田の言う通り、この大会における快達の目的はFクラスの生徒にも実力があると思わせることなので、明久と快のペアが優勝した方が好印象なのは間違いない。
（それはそうと、本当に葉月に手を出そうと思ってるわけ？）
（大丈夫だよ。僕はAカップに興味ないんだ）
（・・・・あ、あはは。それは安心ね）
島田はそうやって少し後に目を逸らす。ボソリと何か言ったような気がしたが、快は聞き取れなかった。
「あの、絶対に優勝してくださいね・・・・・？」
姫路が上目遣いで明久を覗き込んだ。
「もちろんだよ。絶対優勝する。全部上手くやってみせるさ！」
明久はグッと拳を固めた。
「じゃあ、明日は気合入れて早起きしないとな・・・っと凄い繁盛っぷりだな」
喫茶店に戻ると店を出たときよりも遥かに多い客が入っていた。

「そうだね。結構いい感じだね」
「良かった。宣伝の効果があったみたいですね」
「そうでなきゃ、こんな恥ずかしい格好で大会に出た意味がないものね」
皆安心したように頷いていると、
「あ！快達戻ってきたの！？じゃあ、早速だけどホールに入って！」
「バカなお兄ちゃん！おかえりです！」
チャイナドレス姿のユキと葉月が慌ただしく出迎えた。
『お、あの子たちだ！』
『近くで見ると一層可愛いな！』
『手伝いの小さな子も教室にいる子も可愛いし、レベルが高いな！』
客の中からそんな声が聞こえた。やはり雄二の作戦通り、チャイナドレスは効果覿面のようだった。
「明久。戻ったようじゃな。して、どちらが勝ったのじゃ？」
秀吉がトレイ片手に寄ってきた。
「快、かな？」
「そうね。天野の一人勝ちね」
「ですね」
「明久は快と同じチームのはずだろう？それなのに負けだったのか？」
ホールの指揮を執っていた雄二もやってきた。この繁盛っぷりも彼のおかげだろう。
「ま、まあね。あははは・・・・」
と明久は雄二の問いかけに力なく答えた。
「快、あなた何やったの？」
ユキが快に小声で聞いた。
「ま、作戦勝ちって事だ
快は明久とは違い、はっきりと答えた。
「まあいい。そんなことよりも、数少ないウェイトレスが固まってたら客が落胆するぞ。今は喫茶店に集中してくれ」

客の視線が快達に集まっている。綺麗どころが五人集まってるのだから無理もない。
「そうですね。喫茶店のお手伝いをしないといけませんよね」
「そうね。ちょっと視線が気になるけど、売り上げの為に頑張りますか！」
姫路と島田は気合十分だ。
「じゃあ、葉月ちゃん、木下君。私たちもさっきより頑張らないとね！」
「はいです！」
「そうじゃな・・・って、ワシは一応男なのじゃが・・・」
ユキ達残存していたメンバーもより一層のやる気を出している。秀吉は少々乗り気でないようだが。
「秀吉。お前、絶対性別バラすなよ？」
快が釘をさす。客の夢と売上げの為にも、秀吉には完全に女のふりをしてもらわないと困る。
「やれやれ、仕方ないのぅ・・・・・。あ、いらっしゃいませー！中華喫茶ヨーロピアンへようこそー！」
新規入店の客が来た途端、秀吉の口調が一変した。流石は演劇部の星と言われているだけはあって切り替えが早い。
「さて、僕らも手伝おうか」
「そうだな・・・っと言い忘れてた。明久、準決勝に行く前の二十分くらい前にここを出るぞ」
「いいけど・・・どうして？」
「ちょいと準決勝対策をするためさ」
快は不敵な笑みを浮かべながら手伝うために用意されたエプロンを手に取った。

「そろそろだな。明久、行くぞ」
「ん、了解」
準決勝二十分前になり、快は明久を呼んだ。

「ユキ、悪いな。ちょっと用があるからその用を済ませがてら会場に向かうからもう上がるな」
快は近くにいたユキに話しかけた。
「うん、わかった。いってらっしゃい。絶対勝ってきてね！」
「おう！」
「任せといてよ！」
快と明久は喫茶店を出た。
「そう言えば、快の考えってなんなの？」
快と明久は旧校舎と新校舎を繋ぐ渡り廊下を歩いていた。
「まあまあ、着いてからのお楽しみってことで」
快はまだ答えようとはしない。
「雄二も何か作戦を立ててるよ。内容は始まってからのお楽しみだよ」
「そうなのか。だが相手はＡクラスの、しかも秀吉の姉貴と霧島だ。二重三重の作戦を立てないとな」
そんな会話をしていると快と明久は目的の場所に着いた。
「ここって・・・まさか！？」
「そう。そのまさかさ。失礼しまーす」
快はノックし、教室の扉を開けた。技術室の扉を。

「さあて・・・気合入れていくぞ明久！」
「うん！」
拳をぶつけ合い、快と明久は敵のいるステージに歩み始めた。
『お待たせしました！これより準決勝を開始したいと思います！』
快達が入場すると、審判の先生の声が聞こえた。どうやら時間ギリギリのようである。
『出場選手の入場です！』
まるで格闘技の入場のようだと思いながら二人は観客の前に立つ。
快達の向いには対戦相手の秀吉の姉である木下優子とＡクラス代表で雄二にゾッコンの霧島翔子が立っていた。

「ふふ、まさかFクラスのバカがここまで来るなんて思ってなかったわ。褒めてあげる」
と余裕の表情で明久を見ながら木下は言った。
「・・・・負けるわけにはいかない。雄二は誰にも渡さない」
霧島もすごい気迫である。
「お褒めに預かり光栄だよ木下さん・・・いや、秀吉！」
明久はビシッと木下を指差した。
「なるほど。秀吉の姉貴と秀吉を入れ替えてたってことか！」
快は作戦の内容を知り、驚いた。
「・・・・・ふふっ」
木下に扮しているはずの秀吉が口元に手を当てて笑う。
「？秀吉、もういいよ？」
明久が不思議そうに首を傾げる。
「秀吉？秀吉ってあのゴミのこと？」
木下が指差した方向にはボロボロにされた挙句縄で縛られた秀吉の姿だった。
「なっ・・・！？」
明久は絶句した。雄二の作戦が看破されたのだ。
「・・・・雄二の差し金でしょ？雄二の考えてることぐらいお見通し」
霧島が口を開いた。
「く・・・すまぬ快、明久。ドジを踏んだ・・・・」
倒れていた秀吉が起き上り、申し訳なさそうに唇を噛む。
・・・・・！！（パシャパシャパシャ！）」
「ムッツリーニ！いつの間に！？」
「・・・・俺の第六感を舐めるな・・・・」
こんなやり取りをどこかでした覚えが快にはあった。
「撮影なんかしてないで、早く秀吉の縄をほどいてあげてよ！（その写真、後で売って欲しい）」
「明久。本音が混じっているぞ」

快が指摘する。
・・・・・了解・・・・・」
小さく頷くとムッツリーニは秀吉の縄を解きにかかった。
「おとなしくギブアップしてくれると嬉しいな。弱い者いじめは好きじゃないし」
木下が勝利を確信した顔で快と明久を見た。
「くっくっくっ・・・」
「ふっふっふっ・・・」
しかし快と明久は笑っていた。
「何？諦めて自暴自棄になった？」
木下が不愉快そうに眉をひそめる。
「木下、まだ勝負は始まってさえいないんだぜ？」
快が真っ直ぐ木下を見た。
「そうだよ木下さん。まだ召喚獣さえ出てないんだから」
明久も余裕の表情を作った。
「何よ、一体何を・・・」
「「先生！始めましょうか！！」」
快と明久は木下の言葉を遮るように審判の竹崎先生に話しかけた。
『それでは！召喚大会準決勝を始めます！』
「「サモン！」」
快と明久はぴったり息の合った声で召喚獣を出した。
「くっ・・・！何を考えてるっていうの・・・！？」
「・・・・・優子、落ち着いて」
木下を霧島が窘める。
「分かってるわ。サモン！」
「・・・・・サモン」
彼女たちの召喚獣も姿を現す。二体とも以前の戦争で見たときと同じ装備だ。対する快と明久のペアは丸腰制服姿と改造学ランに木刀という、これまたお馴染みの姿だった。
「そんな弱そうな・・・というか弱い装備で私たちに勝てるかしら

！？」
木下は二人の召喚獣を見て笑った。
「まだだぜ！明久！」
「うん！・・・アームド！」
快の合図で明久が装甲を発動させるときの言葉を叫んだ。すると明久の召喚獣は足から漆黒の装甲を装着していき、上半身も同様に黒い装甲に包まれ、背中には悪魔を彷彿させる漆黒の翼が生え、頭部にも装甲が付けられた。そして手には木刀ではなく巨大な鎌を持っていた。
「うそ！？それって、天野君や飯島君の召喚獣がしていた・・・・・」
木下が狼狽する。
「そう。これが僕の装甲、デスサイズヘルだ！！」
明久は巨大な鎌、ビームサイズを構えて高らかに言った。

俺と明久と死神の鎌と・・、・（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは！
今回はなんと明久がデスサイズヘルの装甲を装着しました！次回はその経緯と準決勝の戦いを書きます！今日から冬休みなのでこのままどんどん書いていこうと思います！
それでは次回もお楽しみに！祝５０回突破！

俺と経緯と白熱と・・・、

時間は少し戻って、快が明久を連れて技術室に入った時間。
「やあ・・・天野君に吉井君。いらっしゃい・・・・・」
技術室にはどんよりとした雰囲気の竹崎先生がいた。
「せ、先生・・・どうしたんですか？」
心配になったのか、明久が話しかけた。
「実は、新しい装甲・・・デスサイズヘルのテストができなくなっちゃって」
「やっぱりな。思った通りだ」
快はニヤと笑った。
「君は知ってたのかい？」
「もちろんですよ。だって全然噂になってないんですよ？」
「快、どういうこと？」
「考えてみろよ。俺のウイングゼロや、飯島が使っていたエピオンの装甲に次ぐ新しい装甲を使って、この大会に出場してる奴がいるとしたら？」
「・・・・・。あ、何かしらの話が出てくるはず！」
「そういうことだ。にもかかわらず、そんな話は全然聞こえない。これは何かあったとしか思えない」
そうですよね？と視線で竹崎先生に話を振ると先生はため息をついて答えた。
「その通りだよ・・・三回戦まで勝ち進んでいた飯島君にテストを頼もうと思ってたんだけど、彼のペアの近藤君が食中毒で病院送りになっちゃってそれで飯島君は棄権。デスサイズヘルのテストもできなくなったってわけさ」
「三回戦、しかも食中毒って・・・」
「ああ、俺たちが不戦勝したところだ」
残念そうに言う竹崎先生に明久は疑問を持った。

「でも先生、どうして二回戦の時にテストできなかったんですか？」
「それは装甲を装着者に合わせた微調整に手間取ったからで、その微調整が終わったところで飯島君が来て、棄権するって言われたんだ」
「ウイングゼロの修理をやらなかったから、バチが当たったんですよ」
快は笑いながら言った。
「君のゼロの修理はもう明日には終わるよ！別にサボってたわけじゃ・・・」
竹崎先生が反論している時、ガサ、と机の向こうで何かが崩れる音がした。
「・・・・ガサ？」
見るとそこには焼きそばやたこ焼き、焼きトウモロコシの芯、どこで手に入れたのか分からないお面が机に散らばっていた。
「・・・・思いっきりエンジョイしてましたよね？」
快は非難の目で竹崎先生を見た。
「ち、ちがうよ？これは決してそういうんじゃないよ？」
先生の目が凄く泳いでいる。
「うわ、凄い。これほとんどの出し物に行ってるよ。ほら」
明久が奥の方に置いてあった袋から二年Ａクラスのメイド喫茶でもらえるコースターを取り出した。
「先生・・・・・？」
「・・・・ごめんなさい」
立場が逆転していた。
「まあ、いいです。そんなことより本題に入ります」
「何かな？」
「先生はデスサイズヘルのテストができなくて困ってるようですね。そこで！」
快は明久の肩に手を置いた。
「こいつにやらせてみてはどうでしょう？」

「え!?」
「ええっ!?」
竹崎先生と明久は驚きの声をあげた。
「む、無理無理無理!!僕になんかできないよ!」
明久は首をブンブン横に振って拒否した。
「・・・・いや、できるかもしれない」
竹崎先生はしばらく考えてから言った。
「!?」
「デスサイズヘルの装甲は相性が合えば誰にでも使える。吉井君の召喚獣にも、もしかしたら!」
先生の顔がぱっと明るくなり、パソコンに向かった。パソコンのキーボードをカタカタと打ち、画面に表示されたデータを見て快哉の声をあげた。
「やった!、できる!吉井君、君の召喚獣はデスサイズヘルの装甲に適合してる!」
「本当ですか!?」
明久が驚嘆した。
「よし!早速調整に取り掛かろう!君たちは会場に向かって!準決勝は僕が審判だから!」
「分かりました。行くぞ明久」
「え、あ、うん」
快と明久は技術室を後にした。

「それにしても、まさか僕の召喚獣に装甲が適合するなんて・・・」
会場に向かう道中、明久はまだ信じられないという顔をして言った。
「大丈夫。発動の方法は俺のと変わらないから」
「うん。それは良いんだけど・・・暴走しないかな?」
「それには及ばない!」
ずいっと快と明久の間に割り込んできたのは先ほど別れたばかりの竹崎先生だった。

「わあ」
「も、もう調整終わったんですか？」
「もちろん！」
先生は誇らしげに言った。
「そんなにすぐに終わるんだったら、ゼロの修理もそれぐらい早くやってくださいよ・・・」
快は感心半分、呆れ半分で苦笑いした。しかし竹崎先生は時間がないからと明久にデスサイズヘルを使った主な戦闘スタイルを歩きながら教えた。
「いいかい？デスサイズヘルの攻撃は主にハイパージャマーを使って姿を消し、相手の隙をついてビームサイズで攻撃すること。ハイパージャマーは使用中は一分に一点、点数を消費し続けるんだ。次の科目は確か・・・・・、保健体育だったね？吉井君、点数はどれぐらい取れそう？」
「うーん、ざっと９０点位だと思います」
ここで明久が予想で答えたのは点数は試合の時に発表される為である。
「「低いな・・・」」
「実は僕も言って悲しくなったよ・・・・・」
明久は快と竹崎先生の言葉に力なく答えた。
「まあ、それだけ取れるならハイパージャマーは使えそうだね。じゃあこれを」
先生は明久にサングラスのようなものを渡した。
「これは？」
「ハイパージャマーで見えなくなった召喚獣が見えるようになる器具だよ。これをかければデスサイズヘルがハイパージャマーを発動していてもはっきり見える」
説明が一区切りつくと、もう会場はすぐそこだった。
「あっと、じゃあ僕はこのまま先にステージに行くよ。二人は前の試合と同じように裏に回って、呼んだら出てきてね」

先生は小走りでステージに向かった。
「明久、先生は言ってなかったけど、デスサイズも点数使えば飛べるぜ。点数に余裕があったらそれも使って相手を翻弄するんだ」
「うん。わかった」
「さあて・・・気合入れていくぞ明久！」
「うん！」

というのが明久が装甲を手にするまでの経緯である。そして時間は戻って準決勝の勝負が始まる。
『さあ、Ａクラスが勝つかそれともＦクラスが意地を見せるか！それでは参ります！ガンダムファイトォ・・・・じゃなかった試合開始！』
竹崎先生の試合開始の合図と同時に快は召喚獣をディケイドに変身させる。
「変身！」
《カメンライド　ディケイド！》
快の召喚獣はディケイドに姿を変え、ライドブッカーをソードモードで構えた。
「明久、俺は霧島の相手をする。お前は木下の方を頼むぞ」
「了解！」
「行くぞ！」
快と明久は別々に召喚獣を動かす。それと同時に大型ディスプレイに点数が表示される。
『保健体育　Ｆクラス　天野快　３３４点
　吉井明久　８３点　』
「Ｆクラスのバカになんて負けはしないわ！代表！私はバカの方をやるわ！」
「・・・・わかった」
木下と霧島も召喚獣を動かした。
『保健体育　Ａクラス　木下優子　３２１点

霧島翔子　４０６点』
Ａクラス、それも代表と元代表のペアだけあって点数も高い。
「さあ、あんたの相手は私よ！」
木下の召喚獣が明久の召喚獣に巨大なランスをで襲い掛かる。
「やっぱり僕の事だったんだね！」
明久はデスサイズヘルの背中の黒い翼、アクティブクロークを召喚獣の体を覆うようにして、その攻撃を受け止める。
「あんた以外居ないでしょう！？」
木下の召喚獣の攻撃の手は緩むことがなかった。しかし、ガン！ガキン！と激しくぶつかり合う音が聞こえるがアクティブクロークは頑丈で、明久の召喚獣は無傷だった。
「うそ！？効いてないの！？」
「今度はこっちの番だ！」
明久はハイパージャマーで消えたものが見えるサングラスをかけ、ハイパージャマーを起動した。すると、明久の召喚獣は段々と透けていき、快の目には見えなくなった。
「消えた！？」
驚く木下。すると彼女の召喚獣のランスの先端がスッパリと斬られた。
『保健体育　Ａクラス　木下優子　２７４点』
「あんまり僕を舐めてると・・・」
今度は彼女の召喚獣の左腕が吹き飛んだ。
『保健体育　Ａクラス　木下優子　２３８点』
「痛い目みるよ？」
明久の顔は余裕そのものだった。
『保健体育　Ｆクラス　吉井明久　７４点』
「明久、お前余裕そうな顔してるけど、点数結構ヤバいぞ？」
快がそう言うと快の召喚獣に霧島の召喚獣が日本刀を振り下ろした。
「・・・・余所見は禁物」
快はそれを躱し、躱した方向に飛んできた蹴りを腕で受け止める。

ミシ、と腕に痛みが走ったが、それほどダメージになったということもない。
「っとと・・・・はいはい。わかったよ」
快の召喚獣はカードを取り出した。
《アタックライド　スラッシュ！》
ライドブッカーと日本刀がぶつかり合い、激しい音が校庭に響く。
お互い一歩も引かない切合いが繰り広げらる。ズバッ！ザシュッ！
と二体の召喚獣はほぼ同時にダメージを受けた。
「うぐっ・・・！」
快は痛みのフィードバックで脇腹に走った痛みに顔をしかめた。
『保健体育　Ａクラス　霧島翔子　３５４点　ＶＳ　Ｆクラス　天野快　２９３点』
現状は快がやや不利である。Ａクラス代表はやはり今まで戦ってきた相手とは格が違う。
「剣勝負なら、こいつだ！」
快は召喚獣を新たな姿に変身させる。
《カメンライド　デンオー！》
ディケイドが電王プラットフォームになり、そして周囲に出現した装甲を装着して電王基本形態のソードフォームになった。
「電王と言えばこれだろ！」
快は新たなカードを取り出させる。
《アタックライド　俺、参上！》
「俺・・・参上！」
快は召喚獣にポーズをとらせた。快も『決まった・・・』というような表情である。
「・・・・だから？」
霧島が冷ややかな目で快を見る。
「う・・・、と、特に無えよっ！」
快はポーズをとったことを激しく後悔しながらデンガッシャーソードモードで切りかかった。

「おらおらおらおらぁっ！」
デンガッシャーとライドブッカーの二刀流で攻撃する快に対して、日本刀一本の霧島は明らかに手数が不足していた。そして次第に追い詰められていく。
『保健体育　Ａクラス　霧島翔子　２３７点　ＶＳ　Ｆクラス　天野快　２４１点』
「・・・・・く！」
途中ダメージを受けたが、ついに快の点数が霧島の点数を上回った。
「よし今だっ！」
快はライドブッカーをブッカーモードにして腰に戻し、最後の一撃のカードを取り出させた。
《ファイナルアタックライド　デデデデンオー！》
「必殺・・・俺の必殺技ＰＡＲＴ２！」
デンガッシャーの切っ先が飛び、遠距離から切断攻撃が可能な技で霧島の召喚獣に大きなダメージを負わせる。
『保健体育　Ａクラス　霧島翔子　９３点　ＶＳ　Ｆクラス　天野快　２４１点』
しかしまだ霧島には点数が残っていた。
「おまけの・・・ＰＡＲＴ１！」
快は切っ先がデンガッシャーに戻ってくると同時に　全力疾走で霧島の召喚獣に自身の召喚獣を走らせて思い切り踏み込んで横一文字で一刀両断した。そして霧島の召喚獣は力尽き消滅した。
「よっしゃぁ！」
快はガッツポーズで喜んだ。明久の方を見るとこちらも勝負がつくところだった。
「これで・・・終わりだぁ！」
ハイパージャマーを解除した明久の召喚獣がビームサイズで木下の召喚獣を真っ二つに両断した。
『保健体育　Ａクラス　霧島翔子　　０点　　Ｆクラス　天野快　２４１点

木下優子　０点　　ＶＳ　　吉井明久　３１点』

『そこまでっ！勝者、Ｆクラス天野君、吉井君ペア！』

竹崎先生の勝利宣告が会場に響き渡った。

俺と経緯と白熱と・・・、（後書き）

皆さんこんにちは！夜ならこんばんは
今回は予告通り、明久の装甲ゲットの経緯と準決勝の戦いを書きました。途中、データが消えるという悪夢を見ましたが、何とか書けました！
次回はこの後Ｆクラスに最大の妨害が降りかかります。はたして快達はこのピンチを乗り切れるでしょうか！？
それでは次回もお楽しみに！
ちなみに電王を出したのはデスサイズのパイロットのデュオとモモタロスの声優が同じだからです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4244x/

バカとテストと召喚獣と・・・、

2011年12月28日03時48分発行